

国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 5 冊

## 西村遺跡

2019.3

香川県教育委員会  
国土交通省四国地方整備局

# 序 文

本書には、国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市西村に所在する西村遺跡（にしむらいせき）の報告を収録しています。

発掘調査では、主に弥生時代と平安時代の遺構・遺物を確認しました。

弥生時代では紀元前 4 世紀にさかのぼる堅穴建物や河川から多数の土器や石器が出土しました。周辺には同時代の落合遺跡もあり、この地域が古くから集落が営まれた住みやすい土地条件であったことが明らかになりました。大陸遊牧民族の皮袋形土器や本県中讃地域から持ち込まれたサスカイト石材など、当時の人の移動や交易を物語る遺物が出土したことは、海へのアクセスが良く、内陸交通の便も良いという現代にも通じる土地環境が、古くから歴史に作用していたことを証するものです。

平安時代後期では主に掘立柱建物で構成する施設を確認しました。各建物は県内の他例と比較しても規模が大きく、施設内で文書作成等を行ったことを示す硯や、他地域との交易活動を示す貿易輸入磁器や貴重な国産陶器が伴います。また銅溶解炉や鉄鋳冶炉などの金属器生産施設も伴い、建築・調度用の青銅製金具類や大小の鉄製の金具や釘などを生産していたことが判明しました。宗教具と思われる黒色土器托上碗や鉛製ミニチュア水瓶も出土しています。

このように政治・経済・宗教の各面で一般集落ではあまり例をみない遺構・遺物が多く出土することは、交通に長けた土地環境を有効に活用して周辺地域を統括する役割を担う施設として本遺跡が営まれた可能性が考えられます。中世へ移り変わる時代の変化期における讃岐国の社会動態を知る上で貴重な資料となりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、国土交通省四国地方整備局並びに関係各機関・地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも埋蔵文化財保護行政並びに当センターへのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 31 年 3 月 18 日

香川県埋蔵文化財センター

所長 西岡 達哉

# 例　　言

1. 本書は、国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴い平成 25 年度と平成 26 年度に実施した西村遺跡（にしむらいせき）の発掘調査の本報告である。
2. 発掘調査及び整理作業は香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査・整理を担当した。
3. 発掘調査時及び整理作業時の調査担当機関における組織構成は、次のとおりである。

## 平成 25 年度 調査

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田 宏 副課長 片桐孝浩

文化財グループ 主任文化財専門員 山下平重・松本和彦

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏 次長 前田和也

調査課 課長 森 格也 主任文化財専門員（調査担当）小野秀幸・長井博志

## 平成 26 年度 調査

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田 宏 副課長 片桐孝浩

文化財グループ 主任文化財専門員 山下平重・乗松真也

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏 次長 前田和也

調査課 課長 森 格也 主任文化財専門員（調査担当）森下英治・小野秀幸

## 平成 29 年度 整理

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 小柳 和代 副課長 片桐孝浩

文化財グループ 主任文化財専門員 信里芳紀・乗松真也

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 増田 宏 次長 森 格也

調査課 課長 古野徳久 主任文化財専門員（整理担当）森下英治

4. 本書の執筆は、第 5 章自然科学分析については受託者である株式会社イビソク香川営業所から納入された成果品原稿を掲載し、そのほかの執筆及び全体の編集を森下英治が担当した。なお、参考文献は第 5 章については章内各節末に掲示したが、そのほかは第 6 章の章末に一括して掲示した。

5. 調査時に使用した遺跡略号および遺構略号は、次のとおりである。

NNS 西村遺跡 平成 25 年度調査

NNS2 西村遺跡 平成 26 年度調査

SA 棚列 SH 堅穴建物 SB 堀立柱建物 SP 柱穴 SK 土坑 SD 溝

SR 河川 SF 錫治鑄造関連遺構 SX 性格不明遺構

ただし、報告に当たっては調査時に付与した遺構略号を踏襲し、整理時に遺構の性格が変更となつても略号は変更していないので、当該報告で確定した遺構の性格と遺構略号が一致しないものがある。

遺構番号は平成 25 年度調査区については調査区ごとに 01 から遺構種別ごとに連番を付し、平成 26 年度調査区は遺構種別ごとに 101 から調査区全体を対象に連番を付した。

6. 採図の一部に国土地理院数値地図 25000（地図画像）徳島・岡山及び丸亀、国土地理院発行国土基本図、東かがわ市発行東かがわ市都市計画図を使用した。

7. 本書で使用した座標は国土座標系世界測地系第 IV 系である。

8. 本書に掲載した写真は図版 1 の空中写真は国土地理院撮影、それ以外は調査者及び保存処理及び分析業務受託者が撮影したものである。

9. 土層断面図における土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修、財團法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に従って表示した。

10. 調査、整理にあたって、次の機関や方々に協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略）

国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所、地元各自治会、地元各水利組合、東かがわ市教育委員会

# 本文目次

## 第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業の経過	1

## 第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2

## 第3章 平成25年度の調査(NNS)

第1節 調査地区剖及び微地形・層序	12
第2節 堅穴建物	21
第3節 掘立柱建物	24
第4節 土坑及び不明遺構	24
第5節 溝	31
第6節 河川	34
第7節 包含層出土の遺物	42

## 第4章 平成26年度の調査(NNS2)

第1節 調査地区剖及び微地形・層序	43
第2節 第1遺構面の調査	53
第3節 第2遺構面の調査	132

## 第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定	153
第2節 西村遺跡の花粉分析	157
第3節 西村遺跡から出土した大型植物遺体	163
第4節 西村遺跡出土木製品の樹種同定	168
第5節 西村遺跡の巡方付着有機質の同定	173
第6節 香川県東かがわ市西村遺跡から出土した青銅製品の科学的調査	175
第7節 西村遺跡出土鍛冶・鉄鋼関連遺物の分析調査	184

## 第6章 まとめ

第1節 西村遺跡における遺構の変遷	212
第2節 皮袋形土器について	218
第3節 古代後半の在地土器の編年的検討	220

## 挿図目次

第1図	道路位置図	1	第52図	掘立柱建物SB105出土遺物実測図	65
第2図	与田川下流域の土地条件図	3	第53図	掘立柱建物SB106実測図・出土遺物実測図	66
第3図	周辺遺跡分布図	5	第54図	掘立柱建物SB107実測図・出土遺物実測図	68
第4図	大内平野桑里型割分布図	7	第55図	掘立柱建物SB108実測図1	70
第5図	調査地区概要及び溝柵地区剖面図	11	第56図	掘立柱建物SB108実測図2	71
第6図	平成25年度調査区全体平面図	13~14	第57図	掘立柱建物SB108出土遺物実測図1	72
第7図	1区調査区壁面断面図1	15	第58図	掘立柱建物SB108出土遺物実測図2	73
第8図	1区調査区壁面断面図2	16	第59図	掘立柱建物SB109実測図	74
第9図	2区調査区壁面断面図1	17	第60図	掘立柱建物SB109出土遺物実測図	75
第10図	2区調査区壁面断面図2	18	第61図	掘立柱建物SB110実測図	75
第11図	3区調査区壁面断面図1	19	第62図	掘立柱建物SB111実測図・出土遺物実測図	76
第12図	3区調査区壁面断面図2	20	第63図	掘立柱建物SB112実測図	77
第13図	堅穴建物SH01実測図	21	第64図	掘立柱建物SB112出土遺物実測図	78
第14図	堅穴建物SH01出土遺物実測図	22	第65図	掘立柱建物SB113実測図・出土遺物実測図	78
第15図	掘立柱建物SB01実測図	23	第66図	横列SA101・SA102実測図・SA102出土遺物実測図	80
第16図	掘立柱建物SB01出土遺物実測図	24	第67図	井戸SE101実測図・出土遺物実測図	81
第17図	1区土坑SK01~04分布図・断面図	25	第68図	土坑(SP286)実測図・出土遺物実測図1	82
第18図	1区土坑SK05~12実測図	26	第69図	土坑(SP286)出土遺物実測図2	83
第19図	1区不明道構SX03実測図・出土遺物実測図	27	第70図	SD101概要図	84
第20図	1区不明道構SX04実測図・出土遺物実測図	28	第71図	SD101①~⑨断面図・遺物出土状況図	85
第21図	1区不明道構SX07実測図・出土遺物実測図	29	第72図	SD101⑩段面図・最上層遺物出土状況図	86
第22図	1区不明道構SX08実測図・出土遺物実測図1~30	30	第73図	SD101⑪段下層・上層遺物出土状況図	87
第23図	1区不明道構SX09出土遺物実測図2	31	第74図	SD101出土遺物実測図1	88
第24図	2区土坑SK01・SK02実測図	32	第75図	SD101出土遺物実測図2	89
第25図	SD001・SD007実測図・出土遺物実測図	33	第76図	SD101出土遺物実測図3	91
第26図	2区自然河川SR01・SR04断面図	35	第77図	SD102実測図・出土遺物実測図	93
第27図	2区自然河川SR01・SR04断面図	36	第78図	SD103実測図・出土遺物実測図	95
第28図	2区自然河川SR01・SR04出土遺物実測図1~37	37	第79図	SD105実測図・出土遺物実測図	96
第29図	2区自然河川SR01・SR04出土遺物実測図2~38	38	第80図	SD107実測図	97
第30図	2区自然河川SR01・SR04出土遺物実測図3~39	39	第81図	SD107出土遺物実測図	99
第31図	2区自然河川SR01・SR04出土遺物実測図4~40	40	第82図	SD108実測図・出土遺物実測図	100
第32図	3区自然河川SR01実測図	41	第83図	SD110実測図・出土遺物実測図	101
第33図	3区自然河川SR01出土遺物実測図	41	第84図	SD112実測図・出土遺物実測図	102
第34図	包摂層出土遺物実測図	42	第85図	SD113・SD114実測図・出土遺物実測図1	103
第35図	1区道構面全体平面図	45~46	第86図	SD113・SD114出土遺物実測図2	104
第36図	1区調査区壁面断面図1	47	第87図	SD119実測図・出土遺物実測図	104
第37図	1区調査区壁面断面図2	48	第88図	柱穴SP147・SP173実測図・出土遺物実測図	105
第38図	1区調査区壁面断面図3	49	第89図	政治跡周辺遺構分布図	107~108
第39図	1区調査区壁面断面図4	50	第90図	銅溶解炉SF101実測図	110
第40図	2区調査区壁面断面図	51	第91図	銅溶解炉SF101出土遺物実測図	111
第41図	3区調査区壁面断面図	52	第92図	銅溶解炉SF101出土遺物写真・数量分析図	111
第42図	4区調査区壁面断面図	53	第93図	銅冶炉SF102実測図・出土遺物実測図	112
第43図	掘立柱建物SB101実測図1	54	第94図	銅冶炉SF105実測図	113
第44図	掘立柱建物SB101実測図2・出土遺物実測図	55	第95図	銅冶炉SF106実測図	114
第45図	掘立柱建物SB102実測図1	57	第96図	銅冶炉SF107実測図	115
第46図	掘立柱建物SB102実測図2	58	第97図	微細鉄滓集中域SF104・SF109実測図	116
第47図	掘立柱建物SB102出土遺物実測図1	59	第98図	微細鉄滓集中域SF108実測図	116
第48図	掘立柱建物SB102出土遺物実測図2	60	第99図	政治跡周辺道構SX103実測図	117
第49図	掘立柱建物SB104実測図	62	第100図	政治跡周辺道構SX105実測図・出土遺物	
第50図	掘立柱建物SB104出土遺物実測図	63			
第51図	掘立柱建物SB105実測図	64			

実測図	117
柱穴 SP496 実測図・出土遺物実測図	118
その他の柱穴実測図・出土遺物実測図	119
第 1 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 1	122
第 1 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 2	124
第 1 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 3	125
第 1 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 4	127
第 1 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 5	128
土鍾分布図	129
第 1 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 6	130
第 1 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 7	131
第 2 道構面全体平面図	133 ~ 134
堅穴建物 SH101 実測図	135
堅穴建物 SH101 出土遺物実測図 1	136
堅穴建物 SH101 出土遺物実測図 2	137
堅穴建物 SH101 出土遺物実測図 3	138
堅穴建物 SH102 実測図・出土遺物実測図	139
土坑分布図及び SK103・SK104 実測図 ・出土遺物実測図	140
土坑 SK105・SK107 実測図・出土遺物実測図	141
不明道構 SX106 実測図	142
自然河川 SR103・SR104 実測図	144
自然河川 SR104 出土遺物実測図 1	145
自然河川 SR104 出土遺物実測図 2	146
第 2 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 1	148
第 2 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 2	149
第 2 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 3	150
第 2 道構面に伴う包合層出土遺物実測図 4	151
群年校正結果	156
第 128 図 分析試料採取基準	160
第 129 図 西村遺跡(1 区① 調査区北壁)における花粉 分布図	161
第 130 図 西村遺跡(1 区① 調査区北壁)から出土した 花粉化石	162
第 131 図 西村遺跡から出土した大型植物遺体	167
第 132 図 西村遺跡出土木材の光学顕微鏡写真	171
第 133 図 西村遺跡出土木材の光学顕微鏡および走査型 電子顕微鏡写真	172
第 134 図 西村遺跡出土の付造着有機質の実体顕微鏡 写真および走査型電子顕微鏡写真	174
第 135 国 香川県東かわ市西村遺跡および丸亀町 東坂元秋常道路・田村遺跡から出土した 青銅製品	176
第 136 国 鉛位体比を用いた产地推定の概念図 (A式図)	178
第 137 国 鉛位体比を用いた产地推定の概念図 (B式図)	178
第 138 国 青銅製品の鉛同位体比分布 (A式図)	179
第 139 国 青銅製品の鉛同位体比分布 (B式図)	179
第 140 国 第 138 国の拡大図	179
第 141 国 第 139 国の拡大図	179
第 142 国 平安時代資料の鉛同位体比分布 (A式図)	180
第 143 国 平安時代資料の鉛同位体比分布 (B式図)	180
第 144 国 寛永通宝の鉛位体比分布 (A式図)	181
第 145 国 寛永通宝の鉛位体比分布 (B式図)	181
第 146 国 錦倉時代資料の鉛同位体比分布 (A式図)	183
第 147 国 錦倉時代資料の鉛同位体比分布 (B式図)	183
第 148 国 楊形銀治洋の顕微鏡組織・EPMA 調査	199
第 149 国 炙堜(鉄滓付着)の顕微鏡組織・EPMA 調査	200

# 表 目 次

第1表 調定試料および処理表	153	第56表 西村遺跡出土石器観察表(2)	285
第2表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果	154	第57表 西村遺跡出土石器観察表(3)	286
第3表 分析試料一覧	157	第58表 西村遺跡出土石器観察表(4)	287
第4表 産出花粉類一覧表	159	第59表 西村遺跡出土木器観察表	288
第5表 西村遺跡から出土した大型植物遺体	164	第60表 西村遺跡出土玉器観察表	288
第6表 西村遺跡出土木製品の樹種同定結果	168	第61表 西村遺跡出土金屬器観察表(1)	288
第7表 西村遺跡出土木本材の樹種同定結果	170	第62表 西村遺跡出土金屬器観察表(2)	289
第8表 西村遺跡出土塗方付着有機質の同定結果	173	第63表 西村遺跡出土金屬器観察表	289
第9表 資料一覧	175	第64表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF101(1)	290
第10表 鉛同位体比一覧	179	第65表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF101(2)	290
第11表 供試材の複数と調査項目	196	第66表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF101(3)	291
第12表 供試材の化学組成	198	第67表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF101(4)	291
第13表 出土遺物の調査結果のまとめ	198	第68表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF102	291
第14表 皮芸形土器出土例(1)	218	第69表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF104	292
第15表 皮芸形土器出土例(2)	220	第70表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF105	292
第16表 西村遺跡及び前川東・中村遺跡の土師器 分類別組成表	223	第71表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF106	292
第17表 香川県内の青銅器生産資料一覧	230	第72表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF108	292
第18表 香川県内の鋳治開遺物分析事例一覧(1)	235	第73表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SF109	292
第19表 香川県内の鋳治開遺物分析事例一覧(2)	236	第74表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SX105	292
第20表 香川県内出土上土塗一覧	243	第75表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SA102	292
第21表 西村遺跡出土上土塗観察表(1)	251	第76表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SB101	292
第22表 西村遺跡出土上土塗観察表(2)	252	第77表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SB104	292
第23表 西村遺跡出土上土塗観察表(3)	253	第78表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SB105	292
第24表 西村遺跡出土上土塗観察表(4)	254	第79表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SB108	293
第25表 西村遺跡出土上土塗観察表(5)	255	第80表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SB111	293
第26表 西村遺跡出土上土塗観察表(6)	256	第81表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SD101 (1)	293
第27表 西村遺跡出土上土塗観察表(7)	257	第82表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SD101 (2)	293
第28表 西村遺跡出土上土塗観察表(8)	258	第83表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SD102	294
第29表 西村遺跡出土上土塗観察表(9)	259	第84表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SD105	294
第30表 西村遺跡出土上土塗観察表(10)	260	第85表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SD107	294
第31表 西村遺跡出土上土塗観察表(11)	261	第86表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SD112	294
第32表 西村遺跡出土上土塗観察表(12)	262	第87表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SD113	294
第33表 西村遺跡出土上土塗観察表(13)	263	第88表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SD119	294
第34表 西村遺跡出土上土塗観察表(14)	264	第89表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表SP	295
第35表 西村遺跡出土上土塗観察表(15)	265	第90表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表第1面包含層 (1)	295
第36表 西村遺跡出土上土塗観察表(16)	266	第91表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表第1面包含層 (2)	295
第37表 西村遺跡出土上土塗観察表(17)	267	第92表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表第1面包含層 (3)	296
第38表 西村遺跡出土上土塗観察表(18)	268	第93表 西村遺跡鋳治跡造開遺物観察表第1面包含層 (4)	296
第39表 西村遺跡出土上土塗観察表(19)	269	第94表 サヌカイト製石器剥片一覧表(1)	297
第40表 西村遺跡出土上土塗観察表(20)	270	第95表 サヌカイト製石器剥片一覧表(2)	297
第41表 西村遺跡出土上土塗観察表(21)	271	第96表 サヌカイト製石器剥片一覧表(3)	298
第42表 西村遺跡出土上土塗観察表(22)	272	第97表 サヌカイト製石器剥片一覧表(4)	298
第43表 西村遺跡出土上土塗観察表(23)	273	第98表 サヌカイト製石器剥片一覧表(5)	299
第44表 西村遺跡出土上土塗観察表(24)	274	第99表 石材剥石器集計表	299
第45表 西村遺跡出土上土塗観察表(25)	275	第100表 サヌカイト製石器集計表	299
第46表 西村遺跡出土上土塗観察表(26)	276		
第47表 西村遺跡出土上土塗観察表(27)	277		
第48表 西村遺跡出土上土塗観察表(28)	278		
第49表 西村遺跡出土上土塗観察表(29)	279		
第50表 西村遺跡出土上土塗観察表(30)	280		
第51表 西村遺跡出土上土塗観察表(31)	281		
第52表 西村遺跡出土上土塗観察表(32)	282		
第53表 西村遺跡出土上土塗観察表(33)	283		
第54表 西村遺跡出土上土塗観察表(34)	284		
第55表 西村遺跡出土上土塗観察表(1)	284		

# 写真図版目次

## 図版 1

西村遺跡周辺の空中写真（1967年8月4日国土地理院撮影  
MSI-67-1XCGB 30を複製使用）

## 図版 2

1-2 区調査区全景（東より）

1-1 区 SX03・04 完掘（南より）

## 図版 3

1-1 区溝 SD07 全景（南より）

1-1 区溝 SD07 石列検出状況（東より）

1-2 区溝 SD07 遺物出土状況（南より）

2-1 区全景（南より）

## 図版 4

2-2 区 SR01 完掘状況（北より）

2-2 区 SR01 上層土器出土状況（南より）

2-2 区 SR01 中層遺物出土状況（北より）

2-2 区 SR02・SR04 完掘状況（北より）

3-1 区河川 SR01 完掘状況（南より）

## 図版 5

3-2 区 SH01 完掘状況（西より）

3-2 区 SH01 破化材検出状況（南東より）

3-2 区 SH01 土器出土状況（北より）

3-2 区 SH01 土器出土状況（北より）

3-2 区 SH01 土器出土状況（北より）

## 図版 6

調査地からの眺望（東南より右に西村古墳、左に清塗古墳）

調査地からの眺望（南より西村古墳）

## 図版 7

1 区①第1道構面完掘状況（北より）

1 区②・2 区③全景（東より）

## 図版 8

1 区③全景（北より）

3 区①完掘全景（東より）

2 区①全景（東より）

## 図版 9

2 区③全景（東より）

## 図版 10

1 区①第1道構面検出状況（北より）

1 区②第1道構面検出状況（北より）

2 区②第1道構面検出状況（西より）

1 区①第1道構面・道構検出状況（北より）

## 図版 11

建物 SB101 構成柱穴断面

## 図版 12

建物 SB102 構成柱穴断面（1）

## 図版 13

建物 SB102 構成柱穴断面（2）

## 図版 14

建物 SB104 構成柱穴断面

## 図版 15

建物 SB105 構成柱穴断面（1）

## 図版 16

建物 SB105 構成柱穴断面（2）

## 図版 17

建物 SB107 構成柱穴断面

## 図版 18

建物 SB108 構成柱穴断面（1）

## 図版 19

建物 SB101 構成柱穴断面（2）

1 区② SP101 根太木出土状況（北東より）

1 区② SP102 磁板群検出状況（東より）

1 区② SP102 磁板群検出状況（南より）

## 図版 20

建物 SB112 構成柱穴断面（1）

## 図版 21

1 区③建物 SB113（SP236）柱材（東より）

1 区③ SA101\_SP288（東より）

1 区③ 橋判 SA102\_SP269（南より）

1 区③ 橋判 SA102\_SP245（南より）

1 区② 土坑 SP386 土器出土状況（北より）

2 区③井戸 SE101 下部遺物出土状況（南より）

2 区③井戸 SE101 井筒（南より）

## 図版 22

1 区①溝 SD101 陶窯（353）・杯出土状況（東より）

1 区②溝 SD101 土層（南より）

2 区③溝 SD101 ①遺物出土状況（東より）

2 区③溝 SD101 ②下層遺物出土状況（南より）

## 図版 23

2 区③溝 SD101 ③下層遺物出土状況（北より）

2 区③溝 SD101 上層遺物出土状況（南より）

## 図版 24

2 区③溝 SD101 植出作業（南より）

1 区②溝 SD102a 手前 SP103への落込（東より）

1 区②溝 SD102b ライン断面（東より）

1 区②溝 SD102 理土 SP102への落込（西より）

1 区②溝 SD102 理土 SP102への落込（南より）

1 区②溝 SD102 杯（367・369・370）（東より）

## 図版 25

1 区①溝 SD103 ライン断面（西より）

1 区①溝 SD103 托（386）出土状況（西より）

1 区②溝 SD107 ①土層（西より）

1 区①溝 SD105 仔（387・390・395）（南より）

1 区②溝 SD107 風字録（417）出土状況（西より）

1 区③溝 SD107 完掘状況（北より）

## 図版 26

1 区②溝 SD108・SP386（西より）

1 区②溝 SD108（東より）

1 区③SD112 完掘全景（東より）

1 区③溝 SD112 西端下層土器出土状況（北より）

1 区③溝 SD112 遺物出土状況（北より）

2 区②中段溝 SD113 全景（東より）

## 図版 27

1 区②鍛冶炉 SF102 と金床 SF108 の位置関係（南より）

1 区②鍛冶炉 SF102 植出状況（東より）

1 区②鍛冶炉 SF102 土層（東より）

1 区②鍛冶炉 SF102 炭層 1 上面（東より）

1 区②鍛冶炉 SF102 炭層 1 去除後（南より抜大）

## 図版 28

1 区②鍛冶炉 SF102 淚除去後断面（東より）

1 区②鍛冶炉 SF105（南西より）

1 区②鍛冶炉 SF105（西より）

1 区②鍛冶炉 SF105 植出状況（西より）

1 区②鍛冶炉 SF105 新面（南より）

- 1区②鍛冶炉 SF106 検出状況（東より）  
 1区②鍛冶炉 SF106 埋土層除去後平面（東より）  
 1区②鍛冶炉 SF106 検出状況（南より）
- 図版 29  
 1区②手前 SF106・SF104・SF109 検出（南より）  
 1区②鍛冶炉 SF106 作業面検出（東より）  
 1区②鍛冶炉 SF106 振方検出状況（西より）  
 1区②鍛冶炉 SF106 断面（東より）  
 1区②鍛冶炉 SF106（西より）  
 1区②微細鉄滓集中域 SF104・SF109 断面（北より）
- 図版 30  
 1区②銅溶解炉 SF101・SD102（南より）  
 1区②銅溶解炉 SF101・SD102 間南北土層（東より）
- 図版 31  
 1区②銅溶解炉 SF101・鍛冶炉 SF102 検出状況（東より）  
 1区②銅溶解炉 SF101 検出状況（東より）  
 1区②銅溶解炉 SF101 検出状況（東より）  
 1区②銅溶解炉 SF101 と満 SD102 の埋土共有状況（南より）
- 図版 32  
 1区②銅溶解炉 SF101 炭層上面検出状況（東より）  
 1区②銅溶解炉 SF101 炉底部断面（北東より）  
 1区②銅溶解炉 SF101 東半部が剥離り下げる（東より）  
 1区②SF101 銅鋳、銅粒出土状況（東より）  
 1区②銅溶解炉 SF101・鍛冶炉 SF102 全景（北より）
- 図版 33  
 1区②SF107 断面（南より）  
 1区②鍛冶炉 SF107 完掘状況（南より）  
 1区②SX103 断面（西より）  
 1区②癪素灰坑 SX105 遺物出土状況（西より）  
 1区②灰色包含層銅製金具出土状況（東より）  
 1区②灰色包含層銅製水瓶（706）出土（南より）  
 1区③SP224 青銅製帶金具（492）出土（南より）  
 1区②包含層器具集中群（500・501・589）（北より）
- 図版 34  
 1区②満充西堀 SB102（SP272）はか断面  
 1区②満充区南壁断面  
 1区③包含層鋼板（707）出土  
 1区③調査区南壁土層（西より）
- 図版 35  
 2区②風字器（417）出土状況（北より）  
 2区③灰釉陶器（598）出土状況  
 2区③SP496（SD105 下層）遺物出土状況  
 1区③包含層中棒土疊（657）出土状況（東より）  
 1区③建物 SB108 身舎部（北より）
- 図版 36  
 1区①第2造構面完掘状況（北より）  
 1区①SK103 検出状況（南より）  
 1区①SK103 断面（南より）  
 1区①SK105 遺物出土状況（南より）  
 1区①SK105 断面（南より）
- 図版 37  
 1区③黒灰色包含層 打製石瓦丁（853）出土  
 3区①土瓦 SX106（北より）  
 1区①北壁下層確認（南より）  
 2区③SR103 土層（南より）
- 図版 38  
 1区③第2造構面河川 SR103（北西より）  
 1区③第2造構面河川 SR103 断面（北より拡大）  
 2区②・③河川 SR104 全景（南より）  
 2区③SH101（手前）・102（奥）完掘状況（南より）
- 図版 39  
 2区③SH101 検出状況（南より）  
 2区③SH101 完掘状況（南より）  
 2区③SH101 主柱穴 SP625 住材（東より）  
 2区③SH101 主柱穴 SP625 住材（南より）  
 2区③SH101 主柱穴 SP626 住材（東より）  
 2区③SH101 主柱穴 SP629 断面（南より）  
 4区南側トレンチ土層（北より）  
 4区北側トレンチ土層（南より）
- 図版 40  
 遺物写真（2区 SB01・3区 SH01・1区 SX03・04・08）
- 図版 41  
 遺物写真（1区 SD07・1区 SX08）
- 図版 42  
 遺物写真（2区 SR01）
- 図版 43  
 遺物写真（2区 SR01）
- 図版 44  
 遺物写真（2区 SR01・04・3区 SR01・SH101・SD101  
 ・107・113・第1面包含層・第2面包含層）
- 図版 45  
 遺物写真（SB101・102・104・108・SD102・113・119  
 ・第1面包含層）
- 図版 46  
 遺物写真（SB104・105・107・108・109・111・112）
- 図版 47  
 遺物写真（SD101・SP286）
- 図版 48  
 遺物写真（SD101）
- 図版 49  
 遺物写真（SD102・103・105・107）
- 図版 50  
 遺物写真（SD108・112・119・SP224・302・321・412・496  
 ・SF101・SX105・第1面包含層・第2面包含層）
- 図版 51  
 遺物写真（第1面包含層）
- 図版 52  
 遺物写真（第1面包含層）
- 図版 53  
 遺物写真（SB105・108・SD101・107・SF102・第1面包含層）
- 図版 54  
 遺物写真（金銅器 X 線・SH101・第1面包含層）
- 図版 55  
 遺物写真（SH101・102）
- 図版 56  
 遺物写真（SR104・SK105・第2面包含層）
- 図版 57  
 遺物写真（SH101・102・SR104・第2面包含層）
- 図版 58  
 遺物写真（鍛冶铸造関係1）
- 図版 59  
 遺物写真（鍛冶铸造関係2）
- 図版 60  
 遺物写真（鍛冶铸造関係3）
- 図版 61  
 遺物写真（鍛冶铸造関係4）
- 図版 62  
 遺物写真（鍛冶铸造関係5）

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財の保護については、国土交通省四国地方整備局（以下、「国交省」という）から香川県教育委員会（以下、「県教委」という）が照会を受け、平成19年度より条件が整った地区から順次県教委が試掘調査を実施し、対象地内の埋蔵文化財包蔵状況を確認した上で計画的に文化財保護法に基づく保護措置を図っているところである。

当該西村地区では至近地に落合遺跡、清塚古墳、西村古墳の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在し、その関連遺跡が所在する可能性があることから、県教委は平成23年度に試掘調査を実施し対象地内の埋蔵文化財包蔵状況を確認した。その結果、楠谷川を挟む2箇所において新たに周知の埋蔵文化財包蔵地を確定し、2箇所をあわせて「西村遺跡」と命名し、保護措置の対象とした。

### 第2節 発掘調査と整理作業の経過

工事に伴い保護措置が必要となる範囲は、楠谷川の東側で2,083m<sup>2</sup>、西側で1,577m<sup>2</sup>である。国交省と県教委との間で東側を平成25年度に、西側を平成26年度に香川県埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」という）が担当して本発掘調査を実施することで協議が整い、平成25年6月～9月、平成26年6月～11月において埋文センターが直営方式（基準点測量は委託）で現地における発掘調査を実施した。この間、平成25年9月14日及び平成26年8月23日に現地説明会を実施し、調査成果の一部を公開した。



第1図 遺跡位置図

整理作業は埋文センターが平成 29 年度に実施することとなったが、それに先立ち平成 28 年度中に出土遺物の注記作業を株式会社島田組に委託して実施した。その後、平成 29 年 6 月から 12 月まで整理作業を実施した。整理作業に当たっては出土土器の接合・復元作業を株式会社九州文化財研究所に委託して実施し、出土土器の実測作業を株式会社イビソク香川営業所に委託して実施した。その他、自然科学分析及び木製品・金属製品の保存処理について株式会社イビソク香川営業所に委託して実施した。整理作業の結果は、平成 31 年 3 月に印刷物及びデジタル媒体により当該報告書として刊行した。

## 第 2 章 遺跡の立地と環境

### 第 1 節 地理的環境

西村遺跡は香川県東部の大内平野に所在する。行政区分上は東かがわ市西村、平成 16 年度の市町合併前は大川郡大内町西村である。平野は中央構造線北側に併走する讃岐山脈に端を発する二級河川与田川が形成した小規模平野で東西 8km、南北 2km の範囲に広がり北東は播磨灘に面する。平野の南には白亜紀に形成された領家花崗岩を基盤として白亜紀後期の和泉砂岩層がそれを覆い、さらに新第三紀中新世の瀬戸内火山活動によって形成された凝灰岩や安山岩が山塊上部を覆う山地がある。中小河川はそれらの基盤岩を侵食して各所に標高 200 ~ 400 m の独立丘を形成する。そして平野には砂を中心とした堆積物を供給し現在の海岸線から 2km ほど南まで安定した土地を形成する。そこには北から約 7 度東に振れた方位の条里型地割が広がる。海岸沿いに幅 0.5km 延長 3km に及ぶ浜堤があり、その南の標高 3 m を下回る範囲は後背湿地として土地利用されてきた。

山地と平野の境には幅 100m に満たない細い尾根が北に向かって無数に伸び、標高 7m 付近まで続いて平野面に吸収される。その直前の尾根末端には比高差数 m ~ 10m 程度の自然に形成された小丘があり、古墳や堂祠が立地する。西村遺跡はそのような花崗岩風化土で形成された尾根筋の末端に近い斜面を中心にして立地する。

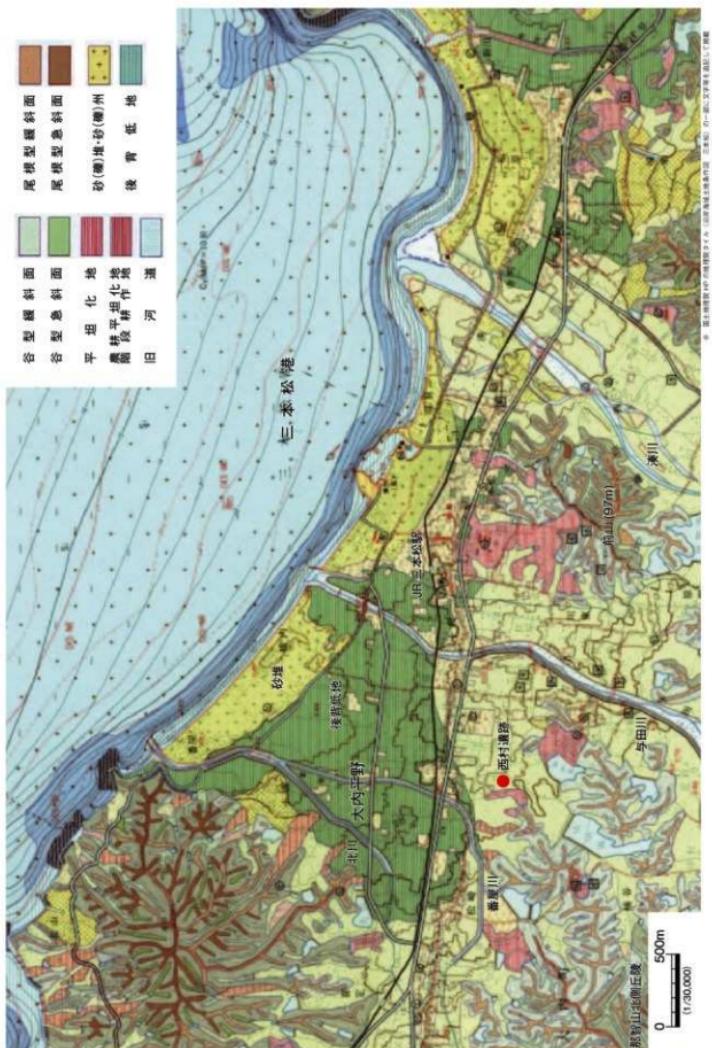
遺跡内を北流する楠谷川は上流の川田池を形成した谷筋を水源とし遺跡の南 150 m から約 700m (約一里分) 北まで条里型地割に沿って一直線に流下する。平野内ではこれほど明確に条里地割に沿う河川ではなく、時期は不明ながら明確に水利管理下にあったことを示す。

ここで報告する西村遺跡における楠谷川以西の平成 26 年度調査地は、削平を被り現地形にほとんど反映されない上記のような埋没尾根や尾根間の埋没河川にあたり、楠谷川以東の平成 25 年度調査地は、河川堆積によって形成された沖積微高地にあたる。

### 第 2 節 歴史的環境

#### 旧石器・縄文時代

大内平野における旧石器時代の遺物は今のところ採集品も含めて知られていない。縄文時代草創期、与田川中流域ではサヌカイト製の有舌尖頭器が 2 点採集 (大内町史編さん委 1985) されている。金毘羅山遺跡では縄文時代前期、爪型文を施文する羽鳥下層式の深鉢が出土した。それとともに蛇紋岩製の抉状耳飾が出土している。また晩期後半の突帯文系土器 (突帯文Ⅱ期) が遺構面基盤である砂層中から多数出土している (財県埋 2000d)。



第2図 与田川下流域の土地条件図

## 弥生時代

弥生時代前期では、楠谷川から分岐した小谷川に面した斜面地で圃場整備事業に伴う落合遺跡の発掘調査が行われ、弥生時代前期後半の遺物が出土した。甕口縁部に突帯を貼付したいわゆる逆L字形口縁の甕で、多条沈線を施す個体が多い（大内町史編さん委 1985）。今回検出した西村遺跡は落合遺跡とは一谷隔てて東に位置するが、同じ時期の堅穴建物が確認されるなど、同時期に複数の尾根に集落が展開し遺跡群を形成していた様子がうかがえる。

そのほかの弥生時代の遺跡としては、仲善寺遺跡で中期・後期の堅穴建物等（県教委 1994）が、楠谷遺跡で後期の掘立柱建物（財県埋 2004a）、高原遺跡で後期の土器棺墓（大内町史編さん委 1985）などが確認されている。与田川東岸では原間遺跡で後期後半以後の大規模な集落が調査され、それに伴う墳墓が随端遺跡等で確認されている（財県埋 2002a～c）。

金毘羅山遺跡は中期末の溝、後期後半の堅穴建物・自然河川、古墳時代中期初ごろの遺構、13世紀頃の建物群がある。塔の山南遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期の土坑墓群がある。

## 古墳時代

周辺丘陵地には重要な古墳が点在する。平野東端の丘陵上には大日山1号古墳が前期の前方後円墳、その南の原間丘陵で中期から後期の古墳が多数分布する。特に原間6号古墳は木椁構造の主体部をもつ5世紀中ごろの円墳で、甲冑や三累環頭大刀など朝鮮半島系の遺物が出土した（財県埋 2002b）。住屋遺跡は5世紀後半から7世紀前半の堅穴建物が多数所在する古墳時代の集落である（県教委 2017a）。仲戸東遺跡は6世紀前半の埴輪生産関連遺物が大量に出土し至近地における生産活動が想定される。埴輪は東側の丘陵に展開する大日山古墳がその候補とされる（県教委 2016a）。

## 古代

近隣遺跡 平野西端の北川中流域では高松平野との境となる田面峠に向かう山道の始点付近に坪井遺跡が所在し、8～9世紀の遺構・遺物が多数出土した（財県埋 2002d）。平野東端の住屋遺跡では8・9世紀の柱穴・自然河川や11世紀の掘立柱建物が所在し、須恵器や瓦片が出土した。金銅装帯金具が自然河川で出土しており、公的施設との関連性が注目できる（県教委 2017a）。原間遺跡では8世紀の大形建物が確認されているが、遺跡の広がりは明確でない（財県埋 2002a）。誉水巾筋遺跡では12世紀以後の遺構・遺物が知られる（県教委 2017b）。

郡郷 「和名抄」で大内郡は「引田郷」「白鳥郷」「入野郷」「与泰郷」と記される。江戸期寛永10年（1633）の「讃岐国絵図」によると与田郷には「与田山」「河東」「横内」「中筋」「西村」「下村」「水主」「笠松」の各村の表記があり古代郷範囲の参考となる。今回の調査地は現大字西村に属していることから古代においては大内郡と泰郷に属していた可能性が高い。また、調査地西隣の現大字名は「落合」である。「讃岐国絵図」では入野郷に「落相」村が表記されている。このような後世の土地呼称を考慮すると、今回の調査地西端付近に古代の「与泰郷」と「入野郷」の境が想定できる。

条里と官道 当該地域の平野部には北から6.7度東に振った方格地割が広がる。方格は一辺約109mで讃岐国内に分布する他の条里型地割と同類である。古代南海道はこのエリアを東西方向に直線で通過し、その路線を基準として条里地割が施工されたと推測できる。北川沿いに高松方面へ抜ける田面峠に向かう県道高松長尾大内線の北に所在する坪井遺跡では何度も掘り直された痕跡のある道路側溝が検出され



第3図 周辺調査分布図

（財）県理 2002d）、幅約 9m の古代道路が遺跡を東西に横断したと推測されている（県埋文 2006）。改めて大内平野全体の条里型地割との関係で見直すと、まず坪井遺跡で検出した道路跡の位置は条里型地割の坪境線のほぼ延長にある。さらに大内町史に部分的に示されている小字境（大内町史編さん委 1985）では、「与田市」「友国」「東地」の字南縁が延長八町にわたって東西一直線に描うラインがあるが、そのラインは坪井遺跡で検出した道路跡を延長したラインに一致する。このことからその道路跡は古代海道である可能性が一層高いものと考える。

坪井遺跡では古代の建物が沿道に建並び、一部には床面積 50m<sup>2</sup> を越える大形建物もある。出土遺物は 7世紀末から 8世紀の土器が多く、9世紀まで続き、10世紀に至ることなく廃絶している。水瓶や鉄鉢形など宗教系土器が出土し、専用硯はないが杯蓋転用硯が 6点出土している。また升機能が推定される須恵器小形杯も注目できる。さらに 8世紀後半から 9世紀に属する東日本系黒色土器類が多く出土しており、全国軍事機関等に配置された「伴囚」（下向井 2001）との関係も強く窺える。高松平野へ抜けれる峠の直前にあたることから、官道に面して交通・軍事等に関わる公的要素を帯びた施設と言えよう。

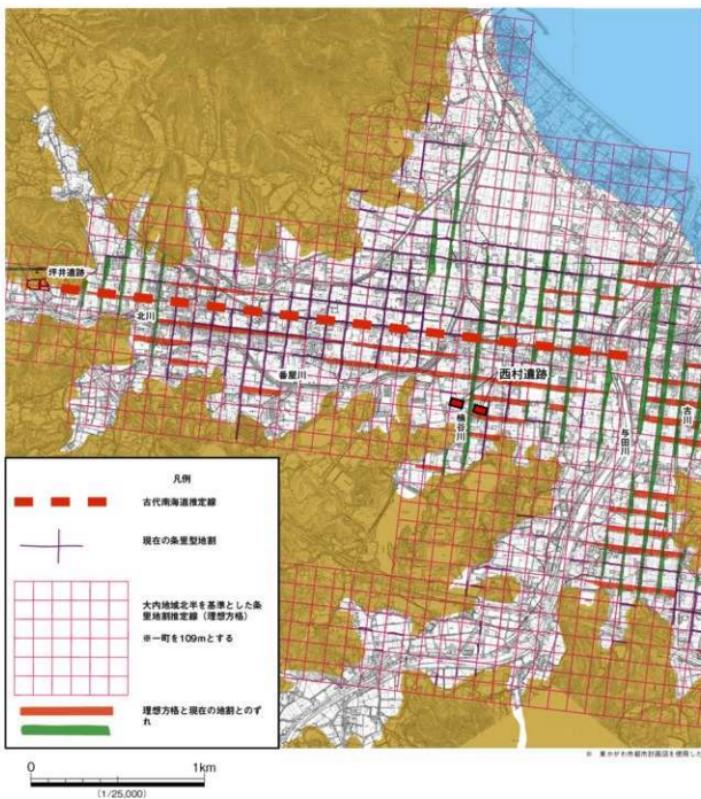
第4図は大内平野に現存する条里型地割を都市計画図に基づいて分析した（2006年東かがわ市歴史民俗資料館で当センターが出張展示したパネル）ものである。109m 理想方格を都市計画図に被せ、南北方向は坪井遺跡付近の地割を基準として東西方向は主に西半分が整合するように配置すると、南北方向は南海道推定線より南に幅 10 ~ 15m の一定のずれが確認でき東西方向は現在の楠谷川を境として東側にやはり 10 ~ 15m の一定のずれが確認できる。このことから大内平野の条里地割の施工基準線は南海道推定線と楠谷川にあった可能性が高く、その交点は今回報告する地点から 3町北にある。

なお条里呼称を推定する手掛りはなく、現段階では坪界復元にとどまるものの、大内平野内に限れば平野東端の古川が南北に直線的でその一町東が丘陵端部にあたる。そこを起点とすると、楠谷川がちょうど 12町（二条分）の位置にくる。つまり楠谷川は条境であり得る地割施工の基準で、かつ坪付けにおいても基準となる重要なポイントになるとと考えられる。

大内郡入野郷戸籍 大内郡は古代の法隆寺伽藍起記資財帳（747）の寺領莊園に「大内郡一處」とあるので、郡内に法隆寺領莊園が所在したと思われるが、その後の記録が途絶えており詳細は不明である。中世、鎌倉時代後半に皇室領大内庄となり、庄名と郡名が同じである郡名庄であることから国衙領から郡域が丸ごと莊園となった可能性が高い。それ以前の平安時代後期、寛弘元年（1004）の戸籍 23 戸分が九条家本「延喜式」紙背文書として残存する。これは日本で最も新しい時期の戸籍で、すでに班田取扱が行われなくなった後の、形骸化した戸籍とされており、後に郡名庄となるように、国衙権力の闇事が継続した状況のもとでの戸籍の在り方を示すものである。

古代寺院 古川中流域、大日山丘陵南面に所在する高松庵寺は奈良時代末期から平安時代にかけての瓦が出土している。平瓦は厚めで、凸面に細い網目の叩きを縱方向に端正に施すもの、山形・らせん状に施すものがあり 9 ~ 10世紀の平瓦と 12世紀の平瓦が含まれる。同時に周縁に珠文を巡らせる 14世紀の三巴文軒丸瓦が多数採集されており、13世紀の瓦は今のところ含まれていない。奈良・平安時代に存続し、一旦廃寺となった後、14世紀に再興した寺院と考えられる。水主神社大般若經箱書の至徳 3 年（1386）の奉加帳に「白鳥高松寺現前住持大徳律師良巣」とあるので文献からも 14世紀の再興が窺える。

一方で瀬川水系の白鳥廃寺は白鳳期から奈良時代前半までの瓦があり、その後は一時的に 11世紀中葉の瓦の出土と同時期の講堂の縮小再築が確認された（平成 24 年度市教委調査）。先に白鳥廃寺が創ら



第4図 大内平野条里型地割分布図

れ奈良時代末に高松庵寺が創られている。補完的な存続時期を示すものではないが、中世以後「白鳥高松寺」と記載されるのは、両寺が強い関連のある寺院であったことを示すものである。

### 中世・近世

近隣遺跡 13世紀以後、平野南側の金毘羅山遺跡、西谷遺跡、楠谷遺跡、水主神社周辺遺跡、三殿北遺跡、三殿出口遺跡、土居遺跡などで遺構・遺物が確認されている。平安期までは異なり多数の遺跡が知られる。当該西村遺跡が立地する平野低地域だけでなく、高松道が通過する山間丘陵部周辺においても遺跡数が増加する。前段階12世紀ごろからの開発行為が小単位ごとの活発な耕地開発を促し、中小規模の新規集落が増大して村落や地域の紐帯となる社会基盤に変化が生じたものとみられる。

水主神社と12世紀における社領莊園の出現 与田川をさかのぼり水主地区に所在する水主神社は「延喜式」神名帳に記される式内社・宝龟年間（770～780）の創建とされ、続日本紀によると「承和3年（836）11月壬申讀岐国水主神社授從五位下」とあるので、9世紀前半までには創建した神社とされる。神社に残る国指定重要文化財「大般若經 附：経箱60箱 内底経箱勸進記録等墨書」水主神社所有 昭34・3・27指定の内箱の墨書き記載として「水主神社旧記（註：大水主大明神社旧記香川叢書第一 所取 香川県編 1939）」がある。そこには崇徳天皇承元年（1131）から六条院仁安2年（1167）までの4件の国司神押記事が記されており、12世紀には神名帳に基づく国司神押が行われた実在の神社であったことがわかる。旧記に、「建長四年（1252）申状案云。大水主庄号は初当去寛弘年中」とあり、庄号（社領）の始まりは寛弘年中（1004～1012）にあるとするが、具体的な記事は12世紀にはじまる。保安四年（1123）の神主安倍信茂・神人等の申状案云によると、永久二年（1114）に初めて二丁二反六〇歩の土地が留守所の裁判に載せられた。その後、保安二年（1121）の春に平の前司（平正盛）の時十丁となり、神人綾利弘等の申状案云によると、天承二年（1132）には春田24町5反になっていた、とある。

安倍信茂は水主安部氏の祖先といわれ在地の有力者一族と考えられる。また、綾利弘は讃岐国在庁官人の一族と考えられ、大水主社領は国衙権力と人的結びつきを持った在地有力者らによって、留守所の裁判を経て成立した社領であった。このようにして国衙領の一部に官社大水主社領が12世紀に成立したものである。これに基づき、先の国司神押が行われ、国衙・在庁官人の関与により神仏習合による社内堂宇の建造や法会の開催などが行われていたものと想定される。

水主神社では当初現在の與田寺を別當（神宮寺）として位置付けており、12世紀末前後に現在の與田寺の前身が水主神社の神宮寺として建立され、與田寺由緒書によれば薬師院と称したらしい。12世紀後半は讃岐国の一宮である田村神社でも出土した瓦から神宮寺（一宮寺）が創られた可能性が高く（県埋文2016b）、国衙・在庁官人の勢力拡大に伴う形で讃岐国内全域で進められた国司神押・社領莊園形成・神宮寺創建の政策の一環として東に45km離れた当地においても楔が打たれたものであろう。

与田寺と周辺宗教施設の整備 与田寺出土とされる瓦（千葉1981）は巴の断面が台形を呈し頭部が繋がった三巴文軒丸瓦である。13世紀に下る可能性が高いが、近隣の譽水中筋遺跡の発掘調査では12世紀後半から14世紀に継続する遺構が確認された（県埋文2017b）。とりわけ建物内部に須弥壇（仏像が安置される内陣）用と推定される柱穴を配置した仏堂と推定される建物（SB12）や、副葬品として和鏡・青白磁合子・小刀や丁寧な作りの楕が想定される鉄製金具などが出土し高貴な被葬者像が想定できる墳墓群、また火山凝灰岩製で宝珠屋根形品2点が円形周溝造構から出土し円形基壇を伴う1対の経轔が復元できるなど、一般的の集落遺跡とは異なる宗教色の強い調査成果が得られている。経轔は重

要文化財の長尾寺經幢のように通常は2個一対で整備され、輿輪に経文を刻し寺院伽藍や重要墳墓の墓道の左右等に配置するもので、中世寺院において重要な役割を担った石造物である。このような与田寺周辺の遺構・遺物は、12世紀後葉以後次第に施設整備された塔頭あるいは坊といった宗教施設に相当するものであろう。つまり多数の付属施設を伴う大規模寺院に拡大したという下記由緒書の記載を傍証する資料である。水主神社社領莊園の成立とも深く関わる社会的な画期と考えられよう。

熊野信仰と小地域単位の宗教 与田寺の住職であった増吽（1366～1452）は「譽田村虚空藏院水主村大水寺由緒」（元禄13年）で「大内郡西村の天満に出生」と記載され、当該西村遺跡の近辺出身の僧と推定される。同記では中筋村の密寺（薬師院＝与田寺）増恵を慕い受戒し密教を学び、増恵の意を繼いで増吽と改名し、薬師院を虚空藏院（与田寺）と改称して現在の与田寺の基礎を築いたとされる。また増吽は熊野信仰に深く水主山に三社を祀り日々参詣したことと記されている。武田和昭氏によるとこの地域では増吽以前より若王寺に伝わる千手觀音及び阿弥陀如来の懸仏が平安末期製作によることから、神仏習合による熊野信仰が盛んに行われた（武田2005）。

13世紀以後にこの地域だけでなく遺跡数が急増する背景には、耕地開発の促進に伴い小地域単位で精神文化の醸成も行われ宗教が地域紐帯の素材となり始めたことを示す。大内平野北西海浜部の馬籠地区及びその周辺における「守尾千軒」とされた宗教施設群も、同様の小地域単位における宗教面の醸成を示す材料である（松本2004）。

県内でも先述した誉水中筋遺跡の仏堂（13世紀後半）や、高松市西打遣跡B2区（財県埋2002e）における仏堂と推定される1×1間の四面廻付建物（SB04）、また綾川町西末則遺跡ⅡのK地区（県埋文2007）検出の溝に囲まれた1間×3間で正面扉をもつ神社建築建物（12世紀後半）など、神仏に関わる遺構が集落内的一部に取り込まれた状況を各所で見ることができる。また、引田郷に属す天王谷遺跡の瓦窯は従前の寺院瓦と比べ、著しく矮小化した小規模堂宇に対応する平・丸瓦を生産するなど、小規模な宗教施設が村落単位で数多く整備されはじめたことを示唆する資料が増加する。13世紀以降の当遺跡周辺でも誉水中筋遺跡のように与田寺を核とした宗教環境下にあったものと思われる。

中世庄園 小早川家文書竹原家證文一「小早川本仏茂平譲状案」によると正嘉二（1258）年に小早川茂平が与田郷地頭に任じられている。地頭だけでなく、公文・案主・田所・団師・懇断職といつた郷司職分も一括して任命されており、与田郷が承久の乱後の国衙領没収地であったことを示す。その後、文永元（1264）年から正応2（1289）年までの間に小早川家による郷地頭職は完了し、安樂寺院文書（野口2005）の正安4（1302）年3月28日龜山院書状案に示された「淨金剛院領大内庄」表記により、その時期までに大内庄が成立したことが分かる。

交通と物流 当遺跡の北には、古代南海道推定線をトレースして、讃岐国往還経図の大内郡絵図に示された街道が東西に走る。西村には「相対入馬繼立所」と記載があり現楠谷川と現国道11号が交差するあたりに「馬づぎ」の地名が残る（平成29年調べ）。刈田駅（引田）と松本駅（大川）の中間にあたることから、「間の宿」とされている（大内町史編さん委1985）。この馬づぎの地名や宿場がどの時代までさかのほるものか定かでないが、当遺跡周辺が交通の拠点であったことを示す材料として重要である。与田寺由緒書には「当山往古は七堂伽藍に八町を占め、外に大門あり。その石口至りて今にある。境内に百坊あり。諸国に末寺数多くあり。広徳高僧数代の住持が修め、密教繁榮無比の靈地なれば、諸僧・諸人競いて集まりて市をなす。故を以て世人は譽田市と呼ぶ。今譽田市というところあり。」と記す。実際に旧南海道と推定した旧街道東西ラインの北側の小字名には「与田市」があり、その西端には絵図

西村遺跡（香川県埋蔵文化財センター撮影 2019年）

に示された「相対人馬繼立所」があった。つまり元禄期には旧街道沿いに門前市が立ち、物流が活発であった。街道駅が古代南海道の時期までさかのぼるのであれば、当西村においても物流に良好な地理的条件が整っていたものと言える。

以上、当西村遺跡は古代の南海道や条里地割の基準線に近く、中世以後は宗教施設の整備や街道沿いの馬繼所や市が所在し名僧増叶を生んだ土地柄といった歴史的環境にあった。



第5図 調査地位置図及び調査地区割図

## 第3章 平成25年度の調査（NNS）

### 第1節 調査地区割及び微地形・層序

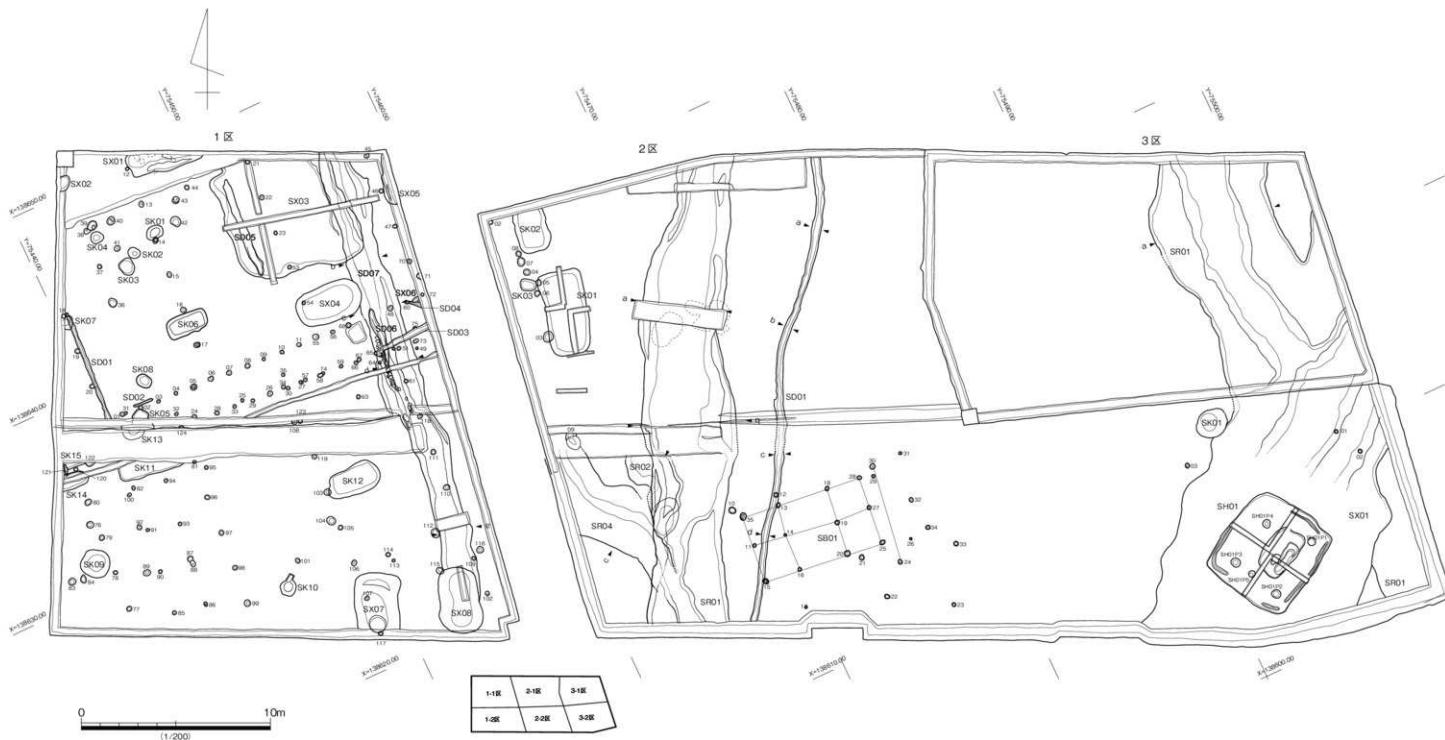
楠谷川以東の調査区である。東西延長75m、南北幅30mの範囲を周辺の条里型地割に沿って縱方向に三区分し、西から1～3区とした。また一つの調査区を便宜上北と南の調査区に細分し、それぞれ1-1、1-2区と表記した。

調査地の旧状は1区がビニールハウスが設置されていた畠地、2・3区は水田で、地表面標高は概ね7.75mで、北へ緩やかに傾斜する。基盤層は黄色～橙色系の砂質土層である。岩盤の一次風化土壌ではなく、河川の開析によって上流の花崗岩風化土が再堆積して形成した沖積層である。上流を辿ると、調査地から南東650mに所在する与田寺北側及び西側に広がる標高36～50mの丘陵間に到達する。現在の保田池築造前に所在したと思われる小規模な谷川が土砂の発生源と特定できる。形成時期は基盤河川で出土した約3千年前の後期繩文土器がその年代を示す材料の一つである。

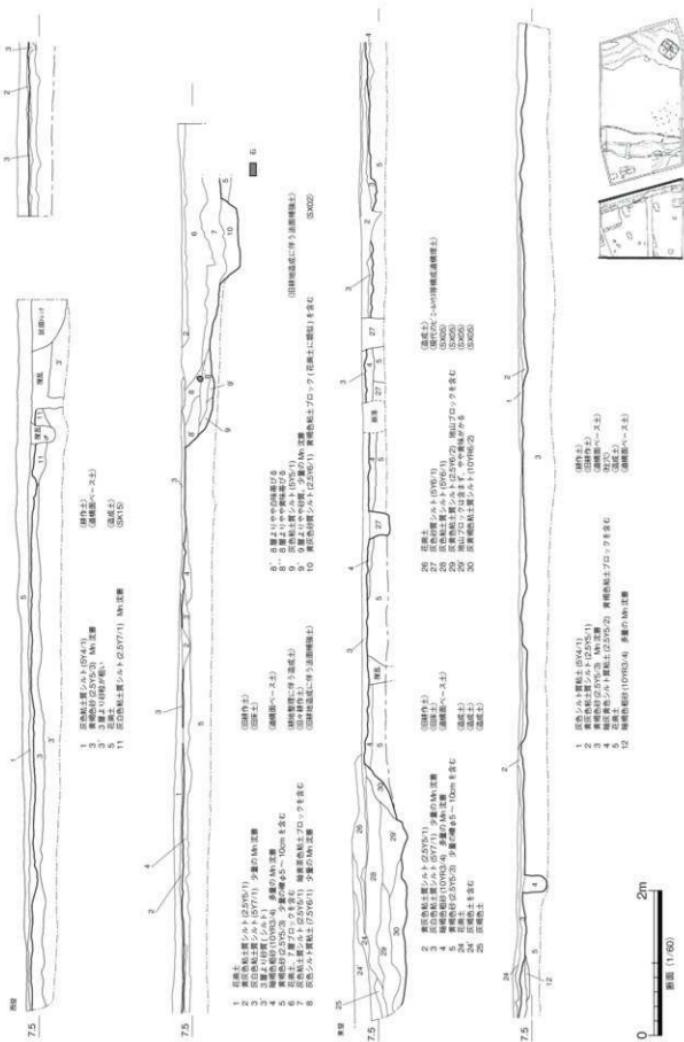
1区は耕作土・床土直下に暗褐色・黄褐色粗砂（西壁4層・東壁4・5層）が広がる。その上面が遺構面である。調査時には撤去されたビニールハウス基礎の掘り方が多数存在し、その穴も近世以前の遺構と同様の調査記録を残していたので、調査写真等からこのような現代の擾乱を除去した図を新たに作成し第6図に示したものである。主な遺構は近世に所属する条里方向の土坑及び溝である。なお、1区北西部の遺構面には東西方向で深さ0.7～0.8mの段差が認められた。現水田面は一筆に統合されているが、丈量図ではこの位置に地境が示されており、周囲と比べると段差が大きい。これは調査地の南東200mに所在する西村天満宮が載る尾根端のような高まりがその西側で北に延びており、その北端の段を検出したものである。

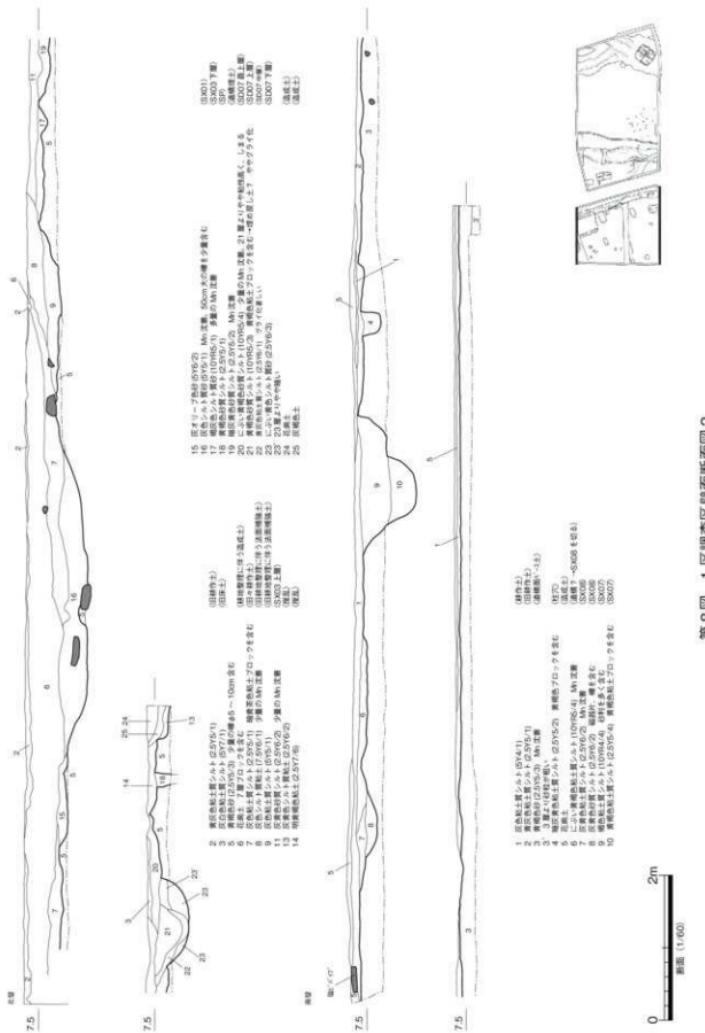
2区は遺構面を形成する基盤層は同じく黄色系砂層だが、その一部が幅5m、深さ1mで切れ込み、灰色系のシルト層（第9図のA～J層）が堆積する。河川として調査し弥生後期から古墳時代後期までの遺物が出土したが、断面から推測すると切り込みが鋭く、直線的に走行していることから、灌漑水路として人工的に掘削されたか、あるいは小規模な自然流路を加工した可能性がある。

3区は東側の遺構面標高が約10cmほど低い。それに沿って、北東方向に弥生前期から中期初頭の自然河川3区SR01が流れる。河川埋没後、古墳時代初頭の堅穴建物が構築されている。建物基礎として土地利用できるほど埋没河川上部の平坦化が進んでいたことを示すもので、低標高地帯における沖積作用の強さを示す。

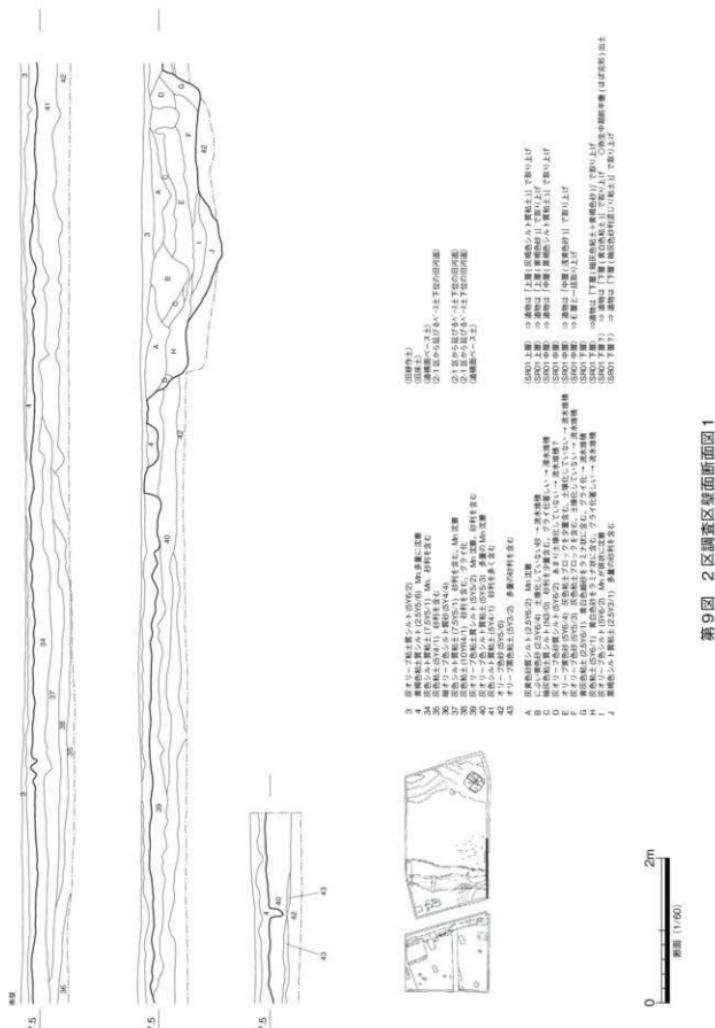


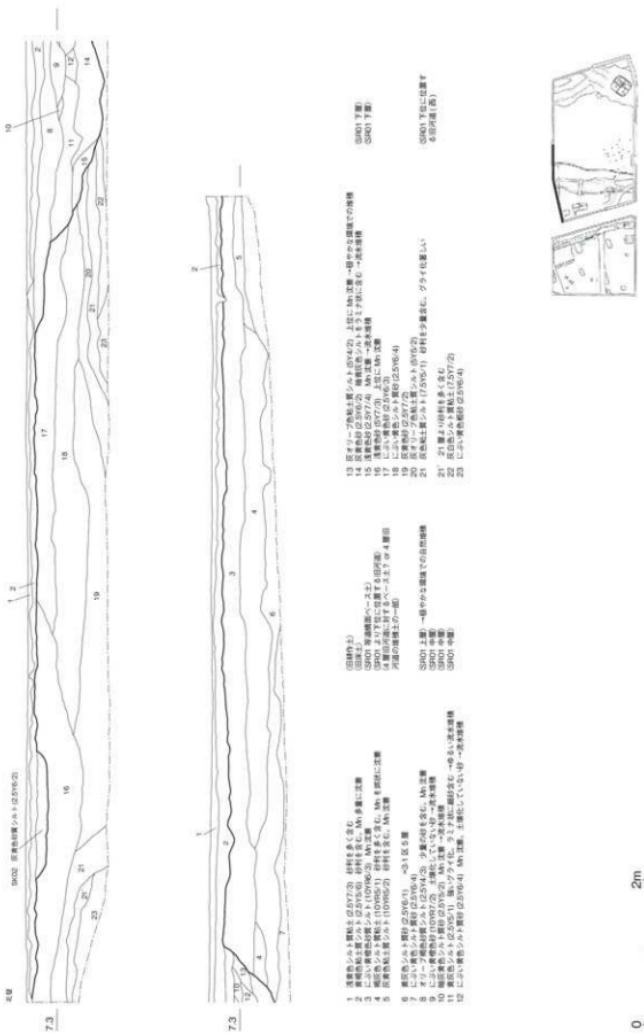
第6図 平成25年度調査区全体平面図



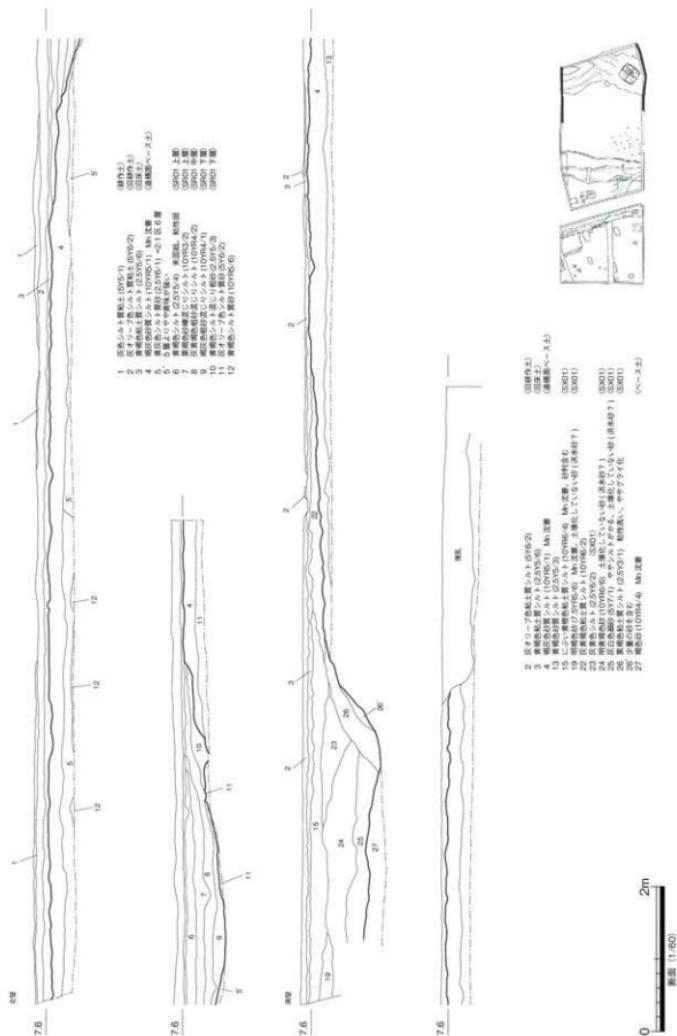


第8図 1区調査区縦面断面図2





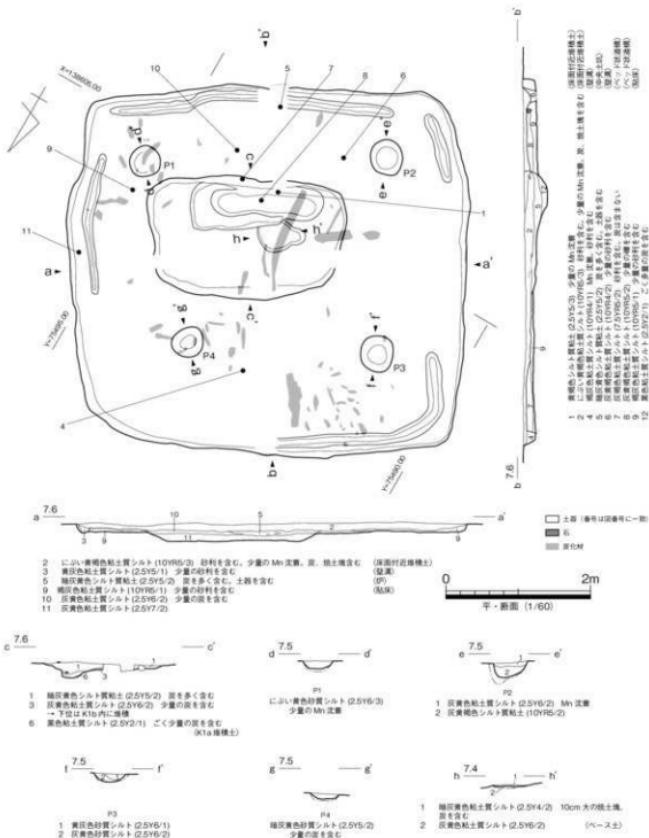
第10図 2区調査区壁面断面図2



第11図 3区調査区壁面断面図



第12図 3区調査区壁面断面図2



第13図 穴建物 SH01 実測図

## 第2節 穴建物

### 3区 SH01

3-2区で検出した穴建物である。一辺5mの方形の掘り方を呈し、中央やや南東寄りに長さ2.7m、幅1.7m、深さ0.15mの下段部があり底面に長さ1.6m、幅0.4m、深さ0.1mの炉がある。炉内及び下段部底面の一部に濃密な炭化物の堆積が認められた。主柱穴として記録している遺構は4箇所あるが、

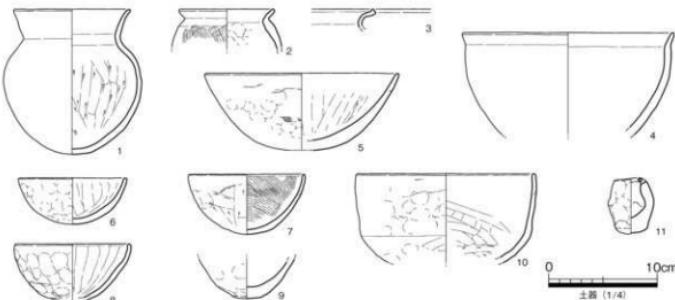


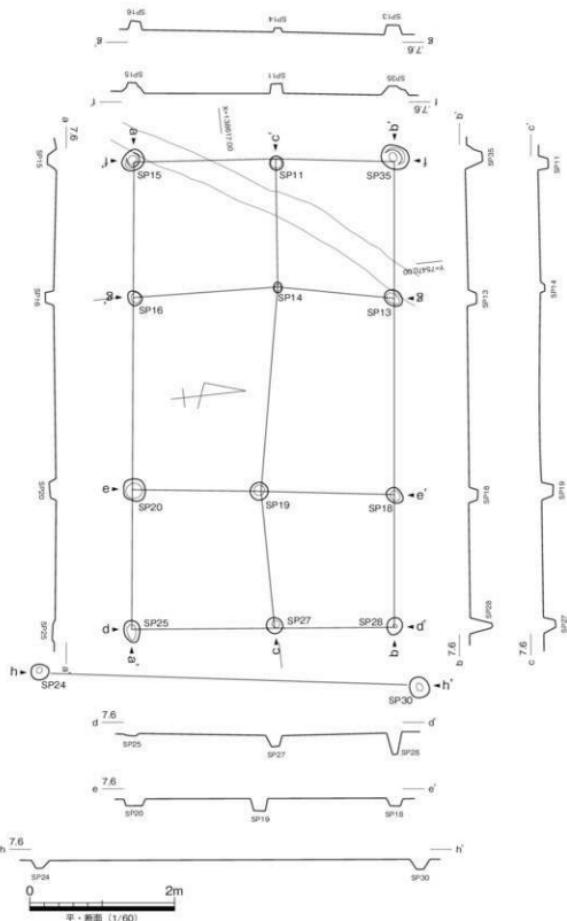
図14 図 穫穴建物SH01出土遺物実測図

検出床面からの深さが0.1～0.15mと浅く柱痕も検出していないことから、既存資料のみで主柱穴と判断することは困難である。写真等での推測だが、炉の手前にある「下段部」は竪穴埋土塗上の窪みであり、本来の底面まで検出できておらず、したがって主柱穴の検出プランが確認できる層位まで掘り下げていなかったために主柱穴が検出できなかつたものとみられる。断面図によれば壁溝のすぐ内側に貼床があることから、四周に段が巡りその段の4つの隅部に主柱穴が存在したものと思われるが、詳細は明らかでない。なお、埋土中に木柾と推定できる炭化材が多数出土した。材の2点を分析した結果、いずれもコナラ属クヌギ節と判明した。

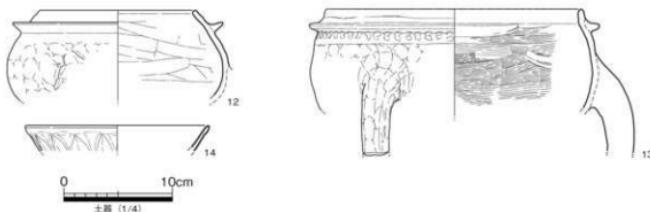
当該遺構の周囲には直径15cm前後の小規模な柱穴が3基ある。埋土が褐色系粘質シルトで当該遺構と等しいことから、周間に木柾などの関連施設が存在した可能性が高い。また、当該建物の基盤土を形成した3-I区の弥生前期～中期初頭に所属する河川（3区SR01）の堆積層からガラス玉（第33図140）が1点出土したことになっているが、上記のような柱穴やそのほかの遺構が底面まで掘り下げられていない状態で基盤の河川埋土の調査を行うと、新しい遺物が古い遺構に混在する。ガラス玉の出土はこのような調査時のアシデントが影響したもので、ガラス玉は本来は当該竪穴建物またはその関連遺構に所属するものと考えられる。

出土遺物は埋土底部で弥生土器甕2点、「床面」で土器器皿9点が出土した。1は床面出土の土器器皿である。体部は肩が張る倒卵形で底部は尖り気味の丸底、口頭部は緩やかに反転して斜め上方に開き、口縁端部が僅かに外反する。2・3は上層出土の弥生土器甕である。3は口縁部を上方にシャープに摘み上げる形態で体部から緩やかなカーブで開延びしながら外反する特徴から弥生時代終末期に所属する。4～10は「床面」出土の土器器皿である。4は口縁部が短く屈曲して外反する形態の鉢、5～9は尖り気味の丸底から緩やかに内湾して斜め上方に立ち上がり、口縁部が外反せず直口で認めるものである。弥生時代終末期から古墳時代初頭に引き継がれる型式である。10は体部中程で屈曲して口縁部が直立するもので弥生時代終末期にはみられず古墳時代初頭に出現する型式である。11は「床面」出土の土器ミニチュア甕である。手づくね成形で口縁端部付近に焼成前の小孔を穿つ。

以上の土器は弥生時代終末期の様相を残しながら1や10の古墳時代初頭に出現する土器があることから、当該遺構は古墳時代初頭に埋没したものと判断できる。



第15図 堀立柱建物 SB01 実測図



第16図 挖立柱建物 SB01 出土遺物実測図

### 第3節 挖立柱建物

#### 2区 SB01

2-2区で検出した挖立柱建物である。桁行3間(6.5m)、梁行2間(3.6m)で柱筋が描わぬ束柱2基を伴う。床面積は23.4m<sup>2</sup>である。柱穴の深さは0.2~0.3mである。建物主軸は北から67度東に振れ、周辺の条里型地割に合致する。なお、東側にはほぼ方向を同じくする柱穴の並びがあり、関連遺構と考える。

出土遺物は土師質土器2点、青磁1点が出土した。12・13は土師質土器足釜である。12はSP18出土で内傾する口縁部の外表面大きく下がった位置に長めの鈎を貼付し、体部最大径下に足を貼付する形態である。13はSP30出土で直立気味の口縁部外表面の上方に短い鈎を貼付し体部最大径より上に足を貼付する形態である。14はSP13出土の中国産青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施文する。やや肉厚で口縁部が肥厚する。胎土は灰色で緻密。釉は青緑色で厚めに掛ける。13世紀に属す。

以上の出土遺物から当該遺構の所属時期は13世紀に所属するものと判断できる。

### 第4節 土坑及び不明遺構

#### 1区 SK01~05・08~10

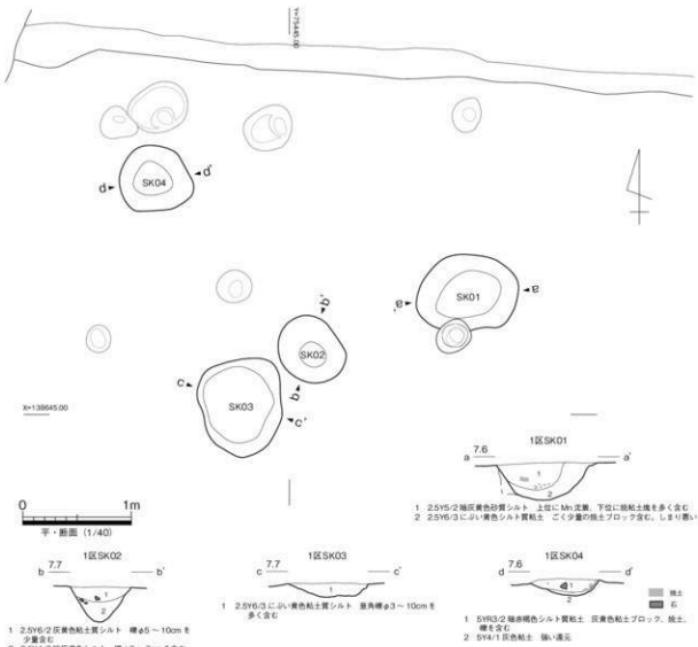
1区及び2区の北西隅に近世の土坑及び不明遺構が散在する。平面形に2種類あり、1区SK01~SK05・SK08~SK10は円形、それ以外は長方形を呈す。

1区SK01~04は1区西北部でまとまって検出した土坑群である。直径0.7~0.9mで深さが0.1~0.35m、灰黄色系シルトで埋没し、径5cmほどの焼土を含む。炭化物はほとんどない。そのうちSK04は底面に灰色粘土を貼るが、色調はやや青みを帯び還元する。

出土遺物は近世土器が少量出土した。江戸時代以降の遺構である。

#### 1区 SK06・12

SK06は長さ2.2m、幅1.1m、深さ0.3mの長方形土坑である。黄色系シルトで埋没する。SK12は一回り大きく、長さ3.0m、幅1.3m、深さ0.5~0.6mの長方形土坑である。なお、断面に棺痕跡などは観察できない。出土遺物は近世土器が少量出土した。江戸時代以降の遺構である。



第17図 1区土坑SK01～04分布図・断面図

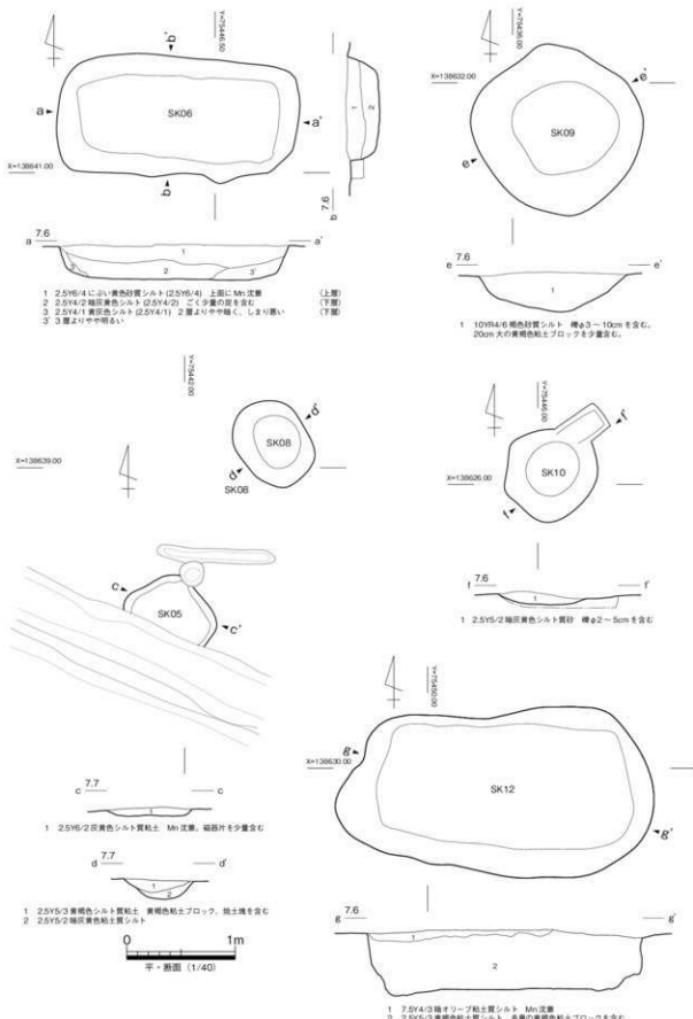
## 1区 SX03

一辺5.5～6.0mで方形の構造である。底面には凹凸があり、0.2～0.3mの深さがある。19世紀前半の溝SD07埋没後に構築されており、19世紀以後の構造である。西側を中心とする褐色粘土を底面に貼り込み、上層にも灰白色系粘土が堆積する。水溜用の機能が推定できる。

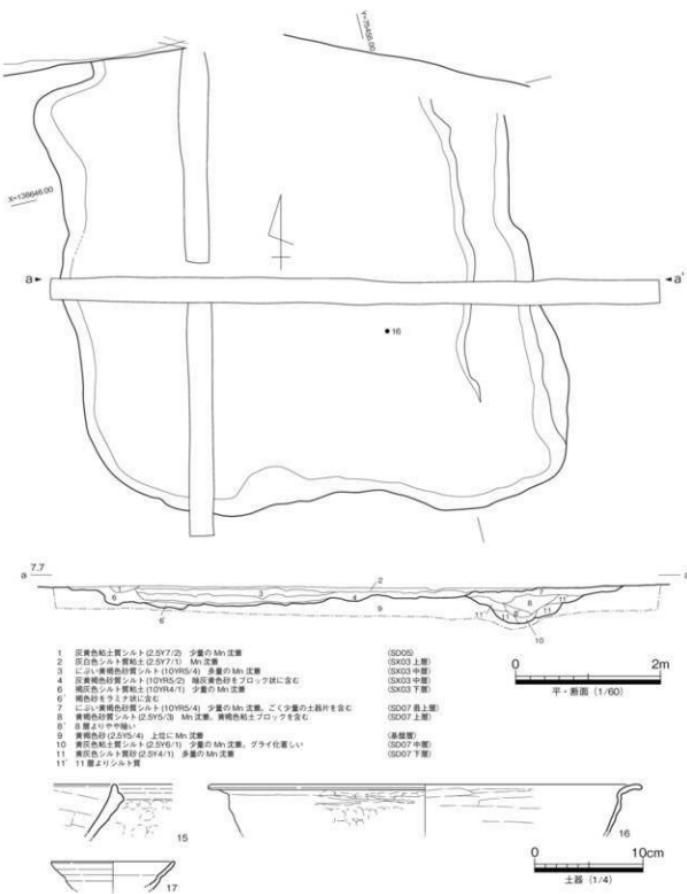
15は土師質土器鉢口縁部片である。斜め上方に直線的に開き、口縁端部を拡張して四線1条施す。16は土師質土器培培である。口縁部が屈曲してやや延びて外反しながら水平に開く。17は肥前系陶器折腕形の小鉢である。口縁部が内湾気味に開き、内面に段をもつ。全面施釉し口縁内面に青緑釉を点掛けする。

## 1区 SX04

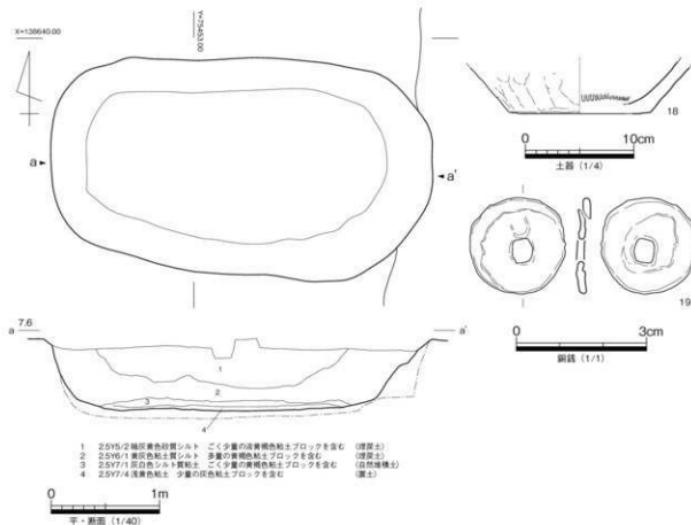
長さ3.5、幅2.0m、深さ0.65mの長楕円形土壙である。底面はほぼ平坦で厚さ約10cmの粘土を貼る。埋土上部は多くの基盤土系の粘質土ブロックが混じることから、一度に埋め戻したものである。主軸は



第18図 1区土坑 SK05～12実測図



第19図 1区不明遺構 SX03 実測図・出土遺物実測図



第20図 1区不明遺構 SX04 実測図・出土遺物実測図

条里型地割に合致する。

出土遺物は18が土師質土器鑿鉢、19が種別不明の銅鏡で近世寛永通宝以降の古鏡である。鉛同位体分析の結果、江戸時代に一般的な日本産原料で作られた銅鏡と判明した。

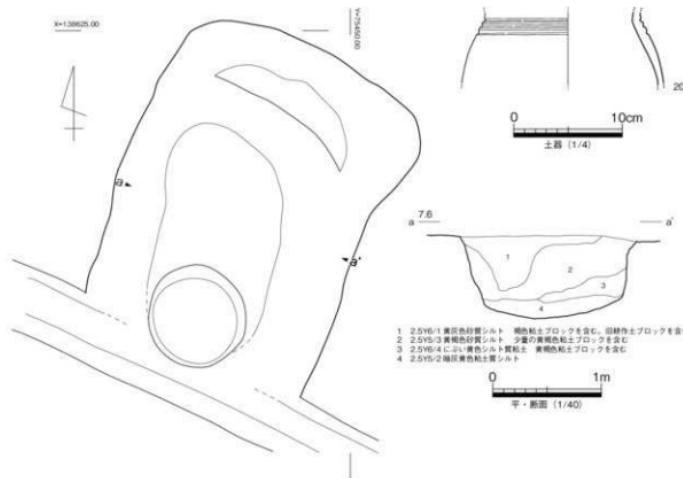
#### 1区 SX07

長さ30m以上、幅23m、深さ0.75mで断面箱形の土坑である。南端は調査区外に延びる。北から22mの位置で直径0.9mの円形器物設置痕跡を検出した。深さは記録がないので不明だが、土師質土器の大形甌を設置していたものと推測する。農地内の水溜遺構と推察する。

出土遺物はほとんどないが、基盤層から混在した弥生土器1点が出土した。20は弥生土器甌である。胴張りの体部上端に3条のヘラ描き沈線文を施す。弥生時代前期に所属する。遺構の年代は江戸時代以降である。

#### 1区 SX08

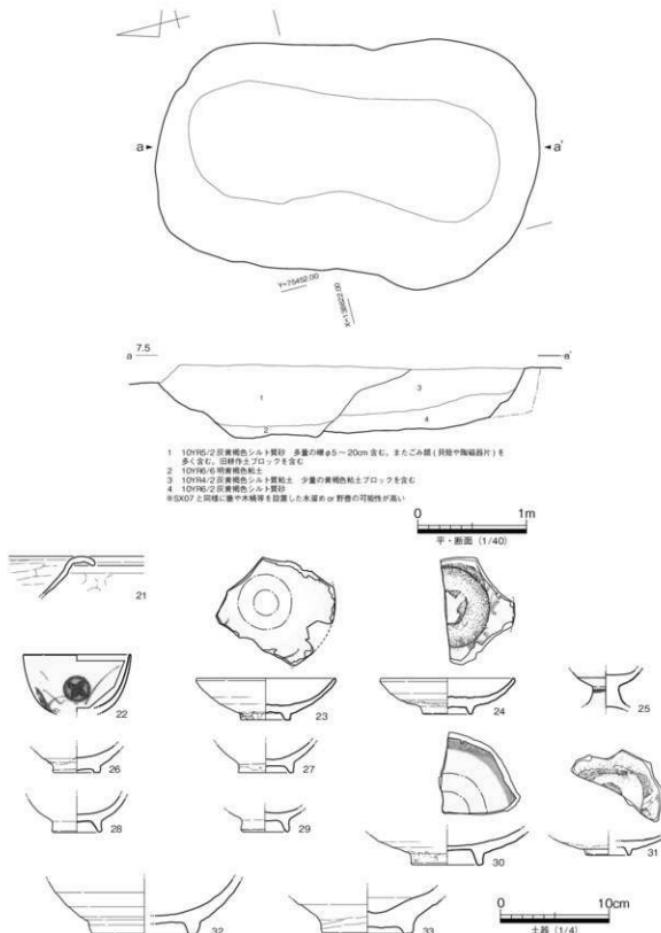
SD07埋没後に掘開された土坑である。長さ3.5m、幅2.3m、深さ0.65mである。北側と南側で埋没時期に差があり、南側(3・4層)埋没後に北側(1・2層)が掘開され、底面に粘土層(2層)を貼つたものと推定する。SX07とはほぼ同じ位置で約2m東に併設しており、調査時の所見ではSX07と同様に水溜用の施設であった可能性を考えている。



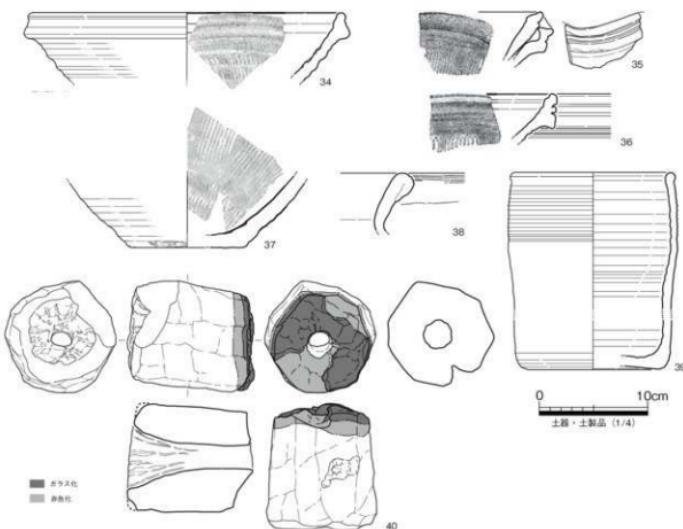
第21図 1区不明遺構 SX07 実測図・出土遺物実測図

出土遺物は近世の土師質土器・磁器染付・陶器・繩目口が出土した。江戸時代以降の遺構である。

21は土師質土器焰烙である。口縁部が屈曲してやや間延びして外反しながら水平に開く。22は磁器染付の碗である。外面に草花文及び家紋（丸に鷹の羽紋）を描く。23・24は磁器染付の皿である。25は磁器染付の台付の仏壇器である。26～29は陶器碗である。26は胎土が灰色味を帯びる肥前系の施釉陶器、27～29は黄色系胎土の肥前系陶器である。30・31は内面施文の皿で30は肥前系陶器、31は砂目積みの磁器染付である。32・33は陶器鉢でいずれも内面施釉である。34～37は備前系陶器擂鉢。外面は口縁部が暗色化し体部は赤茶色を維持する。また36の口縁部下端に重ね焼き痕が残る。内面鉢目の上端は施文時の上端が遺存しナデ消さない。38は備前系陶器の壺である。粘土貼付にて肥厚した口縁部の上端に細めの条線を施文する。39は備前系陶器の水指である。器壁はやや薄く、口縁部は丸く取める。口縁から6cmほど下まで強い回転ナデによる凹線を施文する。施釉はなく、赤茶色に焼き締める。図上による完形復元である。40は黄色系胎土の繩目口である。長さ11cmで断面最大幅10cmである。断面多角形を呈し、送風孔は風元側が大きく開く形態で直径6cm、炉壁側は直径2cmとなる。両小口は一部欠損するも旧状をとどめ、がま口側には炉壁に接する赤化部と炉内相当のガラス化部に分かれる。外面はケズリにより面を整えた形跡が残る。以上の磁器・陶器の特徴は18世紀後半から19世紀の様相をとどめており、当該土坑の埋没年代を示す。



第22図 1区不明遺構 SX08 実測図・出土遺物実測図1



第23図 1区不明遺構 SX08出土遺物実測図2

## 2区 SK01・SK02

SK01は長さ4.5m、幅2.2m、深さ0.25mの長方形土坑である。SK02も北側が調査区外へ延びるがほぼ同規模の遺構と考えられる。主軸は北から7度東に振っており、条里型地割に合致する。埋土は砂質土・粘土等の置土はない。出土遺物は近世土器小片が少量出土したのみで実測可能な遺物はなかった。江戸時代以降の遺構である。

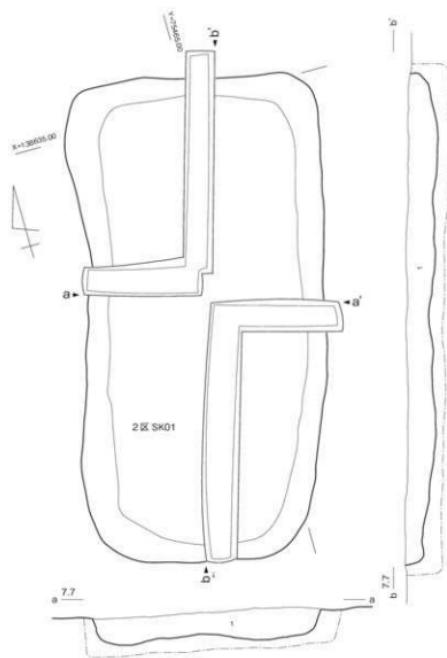
## 第5節 溝

## 2区 SD01

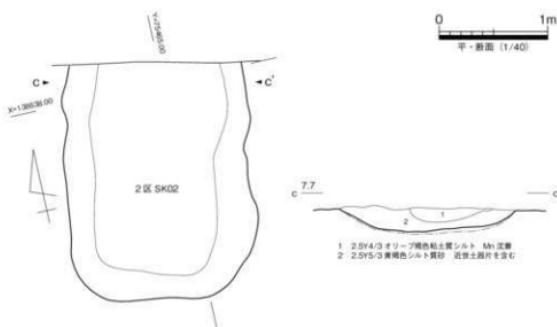
2区掘立柱建物SB01に切られ、北東方向に走行する幅0.5m、深さ0.1mの溝である。断面形はU字形を呈し、黄灰色系砂質シルトで埋没する。出土遺物は土器小片のみで実測可能な遺物はなかった。条里型地割に合致しないことと、SR01に並行することから、弥生～古墳時代に所属するものであろう。

## 1区 SD07

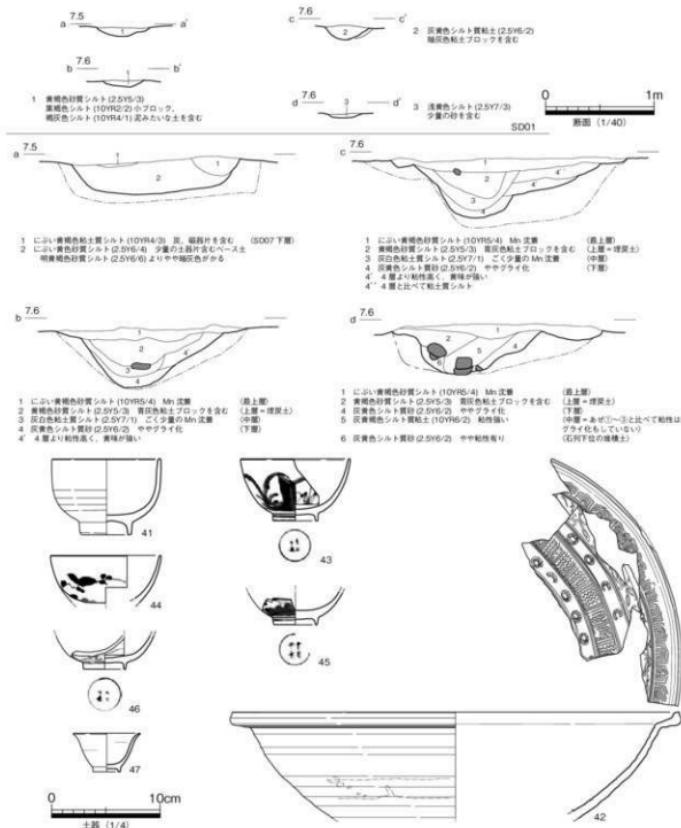
1区の土坑等に切られ、条里方向に走行する溝である。規模は幅が1.5m、深さ0.5mで断面はV字形を呈す。一部に直径15cmほどの亜角礫を積み上げ、護岸石垣状に積み上げる場所があるが全面的



1 2SY5-4 黄褐色シルト質粘土 泥炭の北東面にMnの沈着（やや固結）



第24図 2区土坑SK01・SK02実測図



第25図 SD01・SD07実測図・出土遺物実測図

に施工したかどうか不明。周辺の条里地割線と対比すると、坪境からちょうど半町の位置で南北方向に施工した中間の溝となる。出土遺物は近世18世紀後半の陶磁器類があり、19世紀以後の土坑等に切られているので、19世紀以前に埋没した遺構と判断できる。

出土遺物は近世の陶器・磁器である。41は灰白色系胎土の肥前系陶器碗である。42は三島手の肥前系陶器大鉢で内面に乳白色の陰刻施文がある。43～46は外面上に草花文を染付する磁器碗である。そのうち45、46は底面高台内に細長く崩れた「大明年製」銘を施す。47は口縁端反の磁器猪口である。こ

これらは18世紀後半から19世紀初めにかけてのもので、当該溝の埋没年代を示す。なお42はSX08出土の破片と接合関係にある。SX08で報告した遺物は本来は当該溝に帰属するものを多く含む。

## 第6節 河川

### 2区 SR01・04

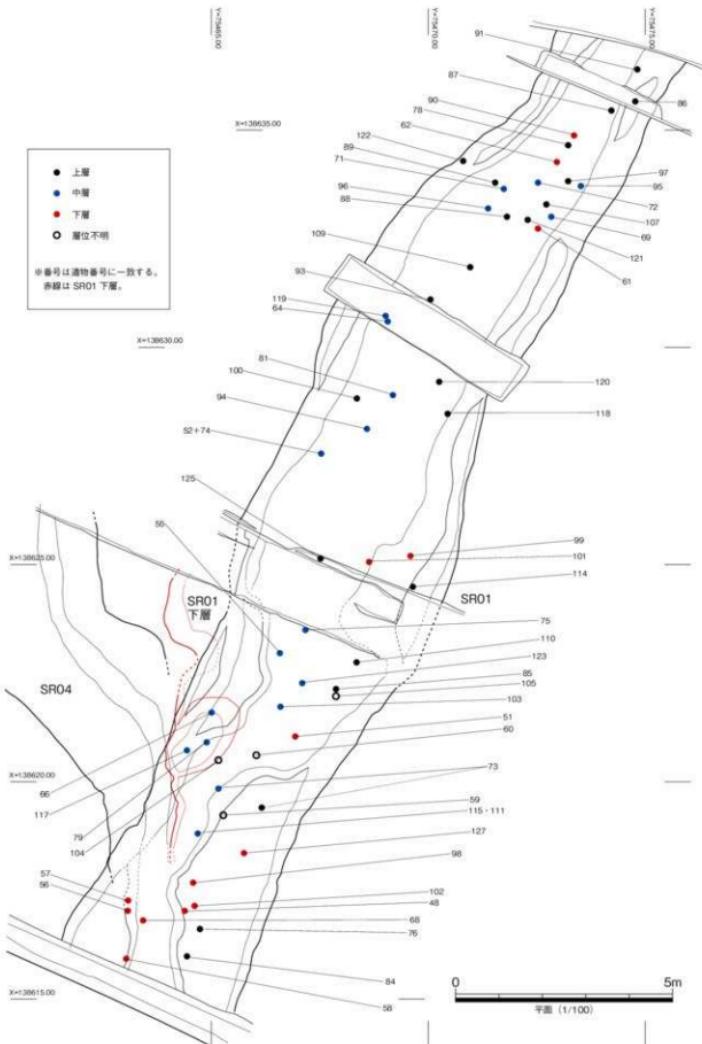
2区西側で検出した幅4.5m、深さ0.9mの断面逆台形状を呈する河川である。一応河川として報告するが、実際には側面傾斜が急角度であるため、人工的な掘削あるいは部分的な地形の整形を想定する必要がある。下層は黒色・灰色系の粘質土及びシルト層が堆積し、中層は淡い褐色（オリーブ）系の砂で埋没する。上層は黄色系砂質シルトで埋没する。なお南半では先行する河川であるSR04と重複し、またSR01下層堆積層の西側上端線が上層上端線より西まで広がる状況が把握できている。出土遺物は弥生時代中期から古墳時代前期までの土器・石器が出土した。出土遺物の報告を踏まえて細部の埋没過程を考える。

48～127はSR01として取り上げた遺物である。48～51は弥生時代中期前半の土器。48は完形の甕で口縁は逆L字形で体部上半に複帯構成の櫛描文及び円形浮文を施文する。底部は焼成後に穿孔し瓶とする。49も逆L字形口縁でヘラ描き沈線文を体部上半に施文する。50は甕底部、51は壺底部である。

52～72は弥生時代後期の土器である。52は完形の壺で玉葱形の体部に小形の口縁が付属する。53は口縁部が短く外反し端部を拡張して凹線文を施文する壺である。54・55は同一個体の可能性が高い壺である。細く立ち上がる頸部から口縁部が緩やかに反転して水平に開き、口縁端部及び頸部下端に円形竹管刺突文を施文する。胎土が赤褐色を呈し他の土器とは異質で他地域からの搬入品と考えられる。竹管刺突文の多用や頸部が細く延びることから四国南部産の可能性がある。56～60は口縁部に凹線文を施文する甕である。61・62は口縁部拡張の甕、63～66は下川津B類系の甕である。63は白色胎土、64は茶褐色系胎土、65は結晶片岩を含む阿波系搬入品、66は在地胎土である。63・64は高松平野からの搬入品であろう。67は口縁部が外反する大形鉢、68はミニチュア鉢、69は高杯である。脚裾に四方の円形透がある。70～72は底部焼成前穿孔の瓶である。

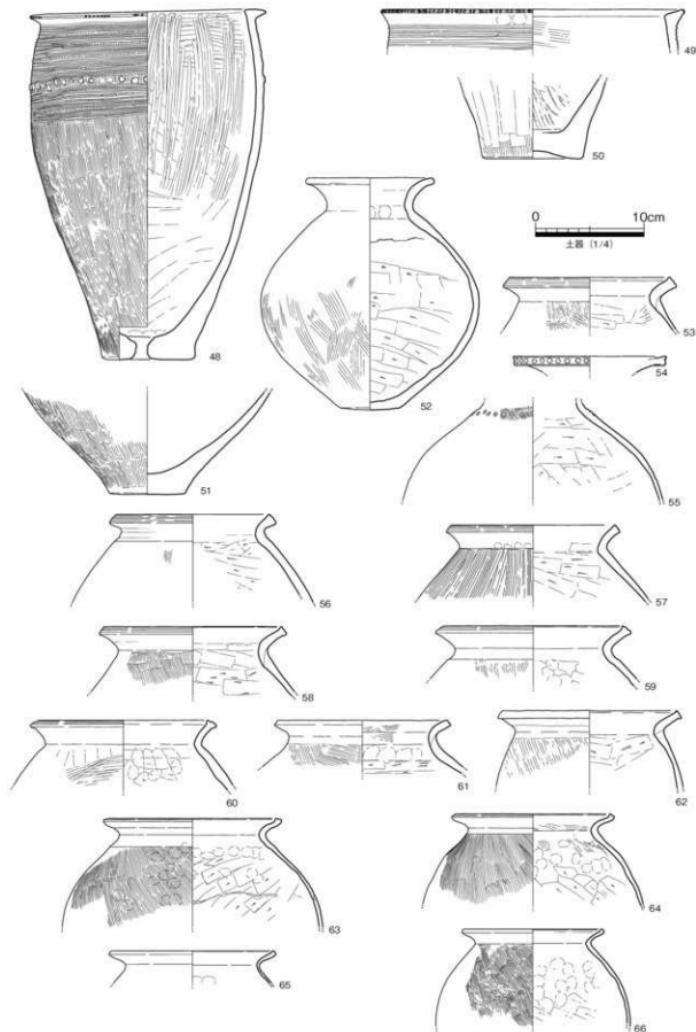
73～124は古墳時代の土器である。73～75は直口壺、76・77は複合口縁壺で76は結晶片岩を胎土中に含む。78～83は直口の小形壺、84～90は小型丸底壺である。91はミニチュア壺である。92～99は甕である。92～94は口縁部に布留式土器の特徴を残す甕、95・96・98は丸底の甕、97は長胴甕になろう。100～102は鉢で各形態を含む。103・104はミニチュア鉢である。105は古代の土器皿である。内面に暗文風のヘラミガキを施す。106～123は高杯である。124は製塙土器の小形の脚台である。125は7世紀中葉以降の須恵器舟身である。126は6世紀末ごろの須恵器杯蓋である。127は長さ約3cmのサヌカイト製の円基式打製石鎌である。以上のSR01出土遺物は弥生時代中期前半から古墳時代終末期までの長期にわたる土器を含む。これらは層位ごとに遺物が取り上げられてはいるが、第9図に示したように必ずしも層位と遺物の新古が対応していない。SR04を含めて埋没過程を考えてみよう。

128～133はSR04として取り上げた遺物である。128は弥生時代中期の甕。櫛描文を多用し中期前半古相に属す。130の底部は成形途上の粘土貼付痕が剥離したものだが一部に折損部を含んでおり、焼成剥離とは云いがたい。131・132は甕蓋である。133は結晶片岩製の柱状片刃石斧である。側面棱線が弛緩しており弥生時代中期に属す。このようにSR04出土土器は弥生時代中期前半古相を下限とする。SR01では同じ時期で残存状態が良好な土器（48～51）が出土している。このことはSR01下層として

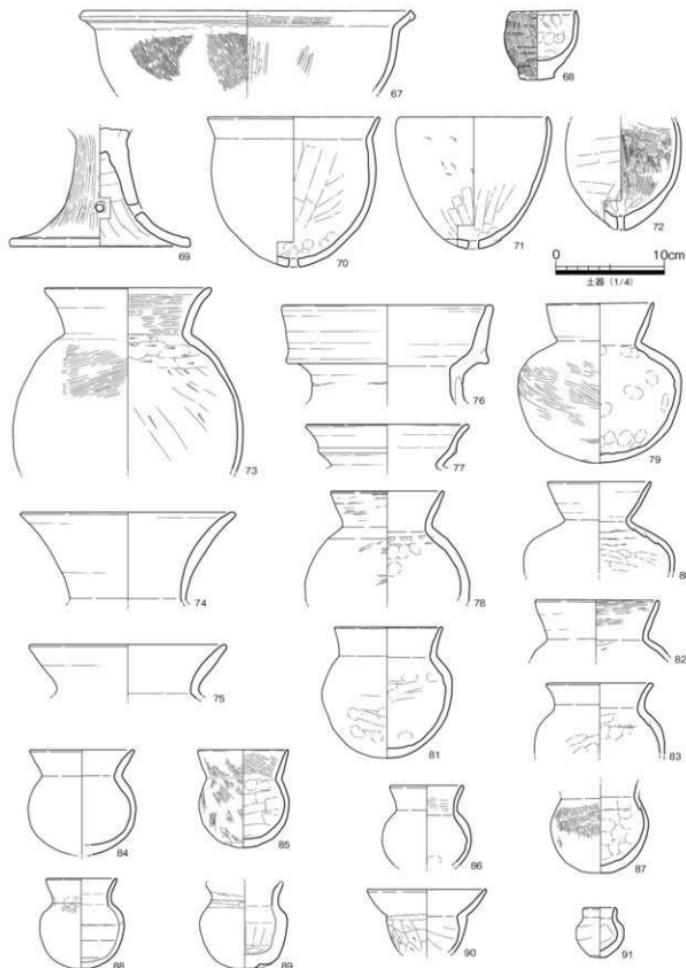


第26図 2区自然河川 SR01・SR04 遺物出土状況

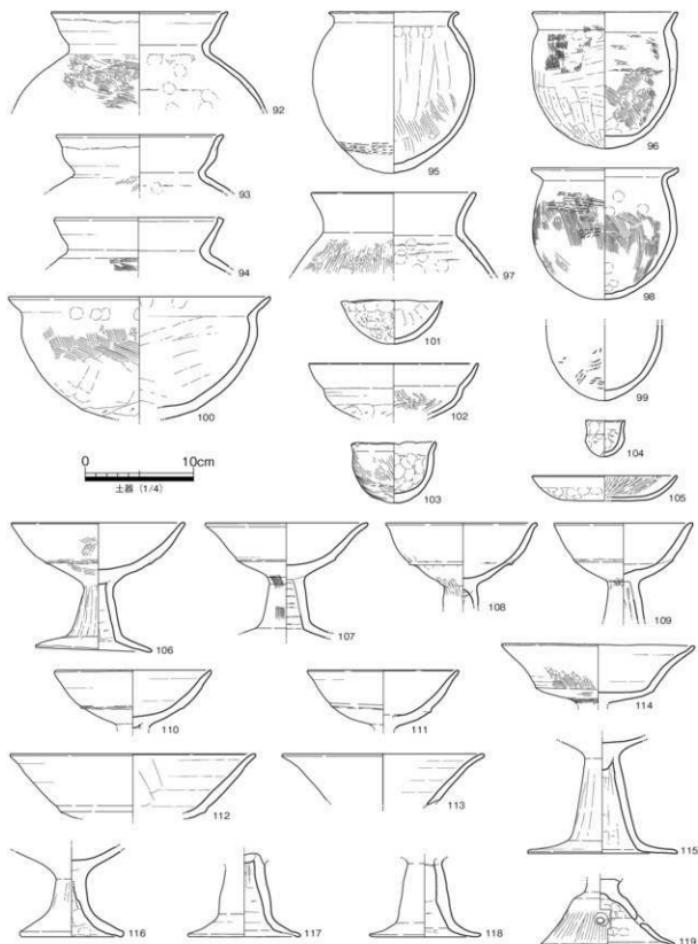




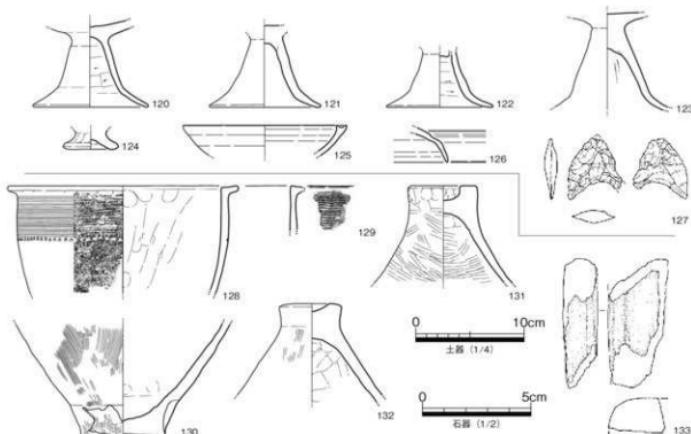
第28図 2区自然河川SR01・SR04出土遺物実測図1



第29図 2区自然河川SR01・SR04出土遺物実測図2



第30図 2区自然河川SR01・SR04出土遺物実測図3



第31図 2区自然河川SR01・SR04出土遺物実測図4

調査した堆積層の一部とSR04の堆積層は元来同じ堆積層で、複数の流路筋が分岐併存していたが、その後SR04の部分を埋めたりSR01の浚渫等を行うなどの人工的に整形を施し北東にのびる流路筋に一本化した過程が想定できる。48の弥生時代中期前半の完形の甕はSR04の埋没直前に意図的に河川に投棄されている。SR04の一部を埋めて人工的な水路に付け替える際の祭祀行為を反映するものであろう。その後は中層や上層において部分的に断面がV字形になるなど2回の明確な掘り直しが認められることから数回の大規模な浚渫などが行われたものと考えられる。さらに7世紀中葉の須恵器（125・126）は当遺構の埋没下限を示す。これは同時に周辺の条里型地割施工時期の上限も示すものである。弥生中期以降、沖積作用が顕著でありながらも人工的に整形し、灌漑機能を長期間継続させている点で周辺の継続的な耕地・水利管理を示唆する遺構である。

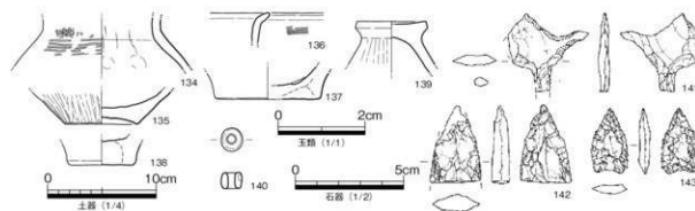
### 3区 SR01

3区東端で北東方向へ流れる河川と北方向へ流れる河川が分岐する地点である。北東へ流れる河川は幅は6～8mで、深さは0.6～0.7m。褐色系の砂混じりシルトなどで埋没するが、断面記録によると最終埋没は流路の中央部にある幅1mの洪水性砂層によるところから、最終的には河川の氾濫を要因とする洪水で埋没したものと考えておきたい。中層・下層は暗灰色系粘質シルトで堆積する。北方向へ流れる河川では出土遺物がないが、土層観察の限りでは北東方向への河川と一緒に存在していたが、洪水堆積層がないことから北東方向への河川の最終埋没の前には北方面への流路はすでに埋没していたものと想定しておきたい。

134～139は弥生土器である。134は外面に柳描文を施す壺、135は体部に顯著な縦線のヘラミガキを施す上げ底気味の壺底部、136は口縁部が短く屈曲する壺、137・138は安定した平底の甕底部で



第32図 3区自然河川 SR01 実測図



第33図 3区自然河川 SR01 出土遺物実測図

ある。139は壺蓋である。これらの土器はいずれも弥生時代中期前半に属す。

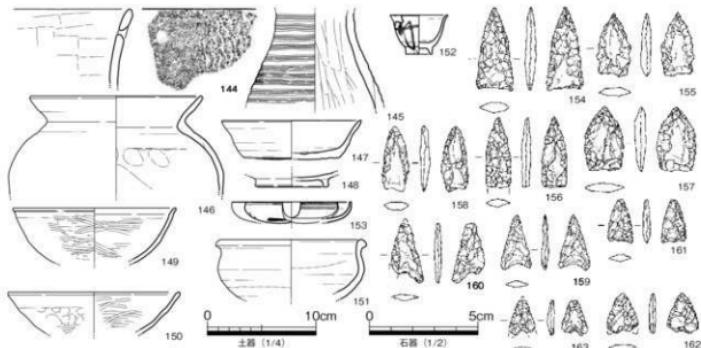
141は平面形が非対称だが石錐の作用部が欠損したとのと判断した。142は風化が顯著で白色化したサヌカイトの尖頭器である。縄文期の混在品であろう。143は長さ3cmのサヌカイト製打製石錐完成品である。側縁を細かく調整加工する。140のガラス玉は3区SH01の項目で記したように、古墳時代初頭ごろに所属する遺構と一緒に掘削したために生じた混在品である。透明感ある青竹色を呈し上下縁は丸く取める形態で器体内に気泡が含まれる。

以上のとおり3区SRO1は弥生時代中期初頭埋没の自然河川で、尖頭器を含むことから縄文時代包含層を削剥して流下した河川である。

#### 第7節 包含層出土の遺物

包含層出土遺物を一括して報告する。144は黒色を呈する縄文土器深鉢である。口縁部が緩やかなカーブで外反し端部が僅かに肥厚する。外面に縱位の櫛状施文具で波状文を施す。縄文時代後期中葉の彦崎K1式または北白川上層2式（泉1981）に相当する。145は長頸の壺で外面全面に櫛状直線文を施す。弥生時代中期前半古相に属す。146は土師器壺である。古墳時代前期に属す。

147は中世の土師質土器杯、148は黒色土器A類（内面黒化、以下内黒をA類、両黒をB類とする）椀、149は黒色土器B類椀である。150は和泉型瓦器椀である。149の黒色土器は外面を手持ちヘラケズリ後に回転を利用しないヘラミガキを施すもので、B類の中では古い特徴をもつ。以上は10世紀後半から13世紀に属す。151は陶器鉢である。152は染付猪口で口縁部が端反形態。153は染付小皿である。154～163はサヌカイト製石錐である。最大でも4cm以下であり大形ではなく、基部形式は四基と平基がある。



第34図 包含層出土遺物実測図

## 第4章 平成26年度の調査 (NNNS2)

### 第1節 調査地区割及び微地形・層序

楠谷川以西の調査区である。東西延長60m、南北幅30mの範囲を調査進行に沿って区分し、東から1区を1区①～④、2、3区に区分した。4区は1～3区と比べ比高差1m低い削平地で、遺構面が残存しないことが判明し、トレンチ調査で終了したエリアである。

調査地の現況はすべて水田地である。1～3区の地表面標高は概ね8m。なお、1～3区の主に西側は調査地の北約50mに位置する西村古墳から南に続く細く長い低丘陵がかつて存在していた。削平前の詳細な地図や写真等がないため視覚的な旧状復元は困難だが、平面図を一瞥すればわかるように、図の北西側斜め半分、つまり1区④、2区西端、3区、4区には極端に削平を被った痕跡があり、柱穴等の遺構がほとんど残存していないので、南西から北東に尾根が伸びていたことが推定できる。一方で1区③以東、及び2区東半分は基盤層が東に傾斜し、東ほど柱穴の残存が良好である。細かくみると、1区③においては西村古墳に近い北側は柱穴が削平を被り浅いが、南側では深くまで柱穴が残存する。つまり西村古墳が存在する細い丘陵は一旦南西に下がる独立丘となっていたことがわかる。その南東側を北流する弥生時代前期以前の自然河川が埋没し、前期の竪穴建物等遺構が形成（第2遺構面）され、さらにその後整地により独立丘東側の地形がある程度平坦化した段階で古代から中世にかけての集落（第1遺構面）が展開したものとみられる。削平されたとはいは独立丘跡には比高差数mの土壘状の高まりが残っていたとみられ、樹木も生い茂り、北西から吹く季節風も和らげたと推定される。これは南東側の建物施設を保護するだけでなく、後述する鍛冶鑄造活動を当該場所でスムーズに行う環境にも寄与したかもしれない。このような地形をうまく利用して施設を営んでいたものと考えられる。

調査地内の土層概要を説明しておく。第1遺構面に至るまでの土層として、耕作土や床土を除去すると耕地整備の整地土層が調査区の東南側を中心に置かれ、その下には黄色ブロック土が認められた。この層の年代は明確ではないが、隣接の独立丘を一部削って耕地拡大した痕跡とみられ、近世ごろに行われた整地と推定する。それらの整地土を除去すると、灰色～暗灰色で炭化物や焼土粒を多く含み一部には黄色土の細粒ブロックを含む砂質土が主に調査区の東南に分布する。これを「灰色包含層」と呼んだ。包含層が存在する場所ではそれが古代の遺構を覆っており、11世紀中葉に一旦集落が廃絶し土地利用が変化する段階で広範囲に整地され堆積した層である。遺構最終埋没層が時間経過とともに沈下しそれによって生じた崖みにもこの灰色包含層が流入する。したがって11世紀代の古代集落が廃絶するにおいては意図的に整地平坦化されたものと判断できる。13世紀以後の柱穴等は調査区の北壁断面を見る限り、灰色包含層堆積後に掘削されており、明確な先後関係がある。このようなことから「灰色包含層」はこの地点の鍵層といえる。

第1遺構面の下位には別の包含層が数層堆積する。上から茶灰色包含層、黒灰色包含層、緑灰色包含層の3層である。いずれも粗砂や細礫混じりでやや粘性を帯びる土層であり、まばらだが土器片やサヌカイト剥片を包含する。この3つの層を除去した面が弥生時代前期後半の第2遺構面である。場所によつて異なるが大部分は軟弱な灰白色～黄褐色細砂層が基盤となる。同面で竪穴建物や土坑を検出した。また河川として捉えたSR04が蛇行しながら竪穴建物周りを取り巻く。その流路は平面形状から見て竪穴建物の周溝の可能性が高い。その下位に幅約20mの河川SR103があり泥炭質の堆積層より出土した炭

化物の放射性炭素年代は弥生時代前期後半を示す。さらにその下位の砂層中では弥生時代前期前半の土器片が出土している。弥生時代前期前半に河川域として多くの流水があり、後半に滞水状態で泥炭層が堆積する状態となり、さらに洪水で厚く砂層堆積して平坦面が形成された段階で堅穴建物が構築されたものと推察する。その後再び自然堆積により包含層が形成され古代に至るという経過が復元できる。

以下、断面図に基づき説明を補強する。

第36図に示した1区南壁断面図では主に第1造構面の標高の推移を確認する。上から1段面は造構面標高は7.6mである。灰色包含層は認められず、すでに削平されたものと推定する。僅かだが造構面標高が東に向かってやや下がる。微妙な高低差が灰色包含層の分布に反映する。2段面では概ね造構面標高は7.6m、3段面で7.7～7.8mと西に向かって上昇する。3段面ではSR103の西肩に向かい強く上昇し4段面で造構面標高が8mを越える4段面中程で8.1mの最高所となる。4段面は西古墳から南に続く丘陵が削平された状態を示す断面だが、削平されてもなお造構面最高所は丘陵延長を示しており、削平された土壤の大きさを物語る。基盤層の22層は花崗岩風化土の丘陵構成土である。

第37図に示した1区①北壁断面では第1造構面、第2造構面、さらにその下位について通しの断面から全体の堆積状況を確認する。第1造構面標高は西端で7.5m、南壁より10cm低い。第1造構面を覆う灰色包含層（5層）はSD105より西に分布し、東側は削平されて確認できない。その結果、造構面標高は7.4mとなる。

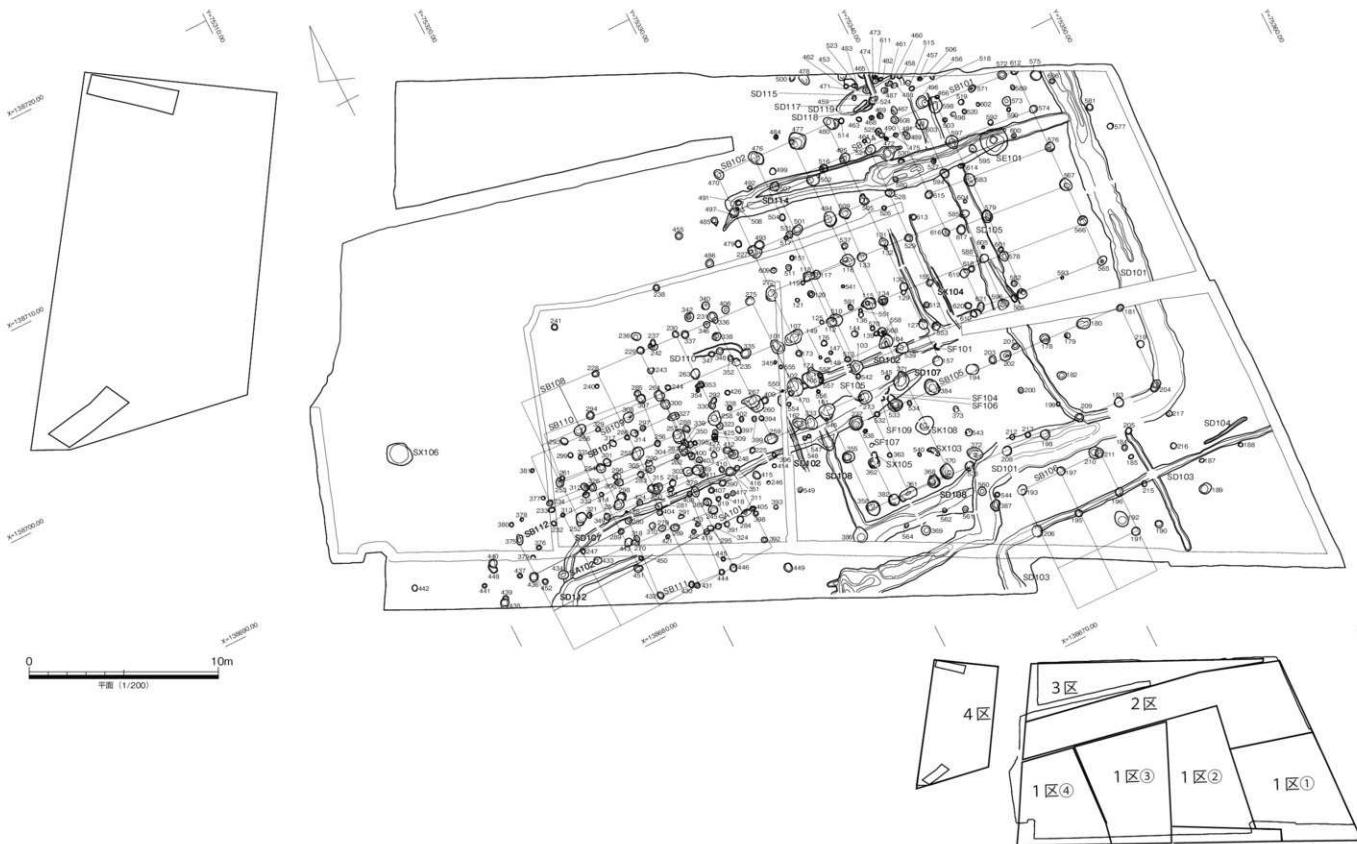
第1造構面下位には茶灰色包含層（7層）、黒灰色包含層（8層）、緑灰色包含層（9層）があり、その下位に弥生時代前期後半のSH101埋土（11・12層）及びそれを覆う洪水性砂層（10・13層）が堆積する。14層以下は22層までがSR103埋土で、有機物を多く含む泥炭層が17・19～22層にあり、18層の洪水性砂層からはやや磨滅した突文土器片（838）が出土している。このうち19層出土の生の種実（堅果）は放射性炭素年代測定の結果、その結実年代が紀元前5世紀末～前4世紀前半を示した。また、SH101主柱穴の同測定の結果は、その伐採年代が紀元前4世紀中頃である（第5章第1節参照）。この22層までの堆積層がSR103で底面の標高は5.6～6.0mである。

23層以下は流木などを含む洪水性砂層と泥炭層（25層）があり23層より平底の弥生時代前期前半と思われる壺底部片（829）が出土した。標高5mまで掘削したがそれ以下は砂層が継続することを確認した上で掘削を断念した。

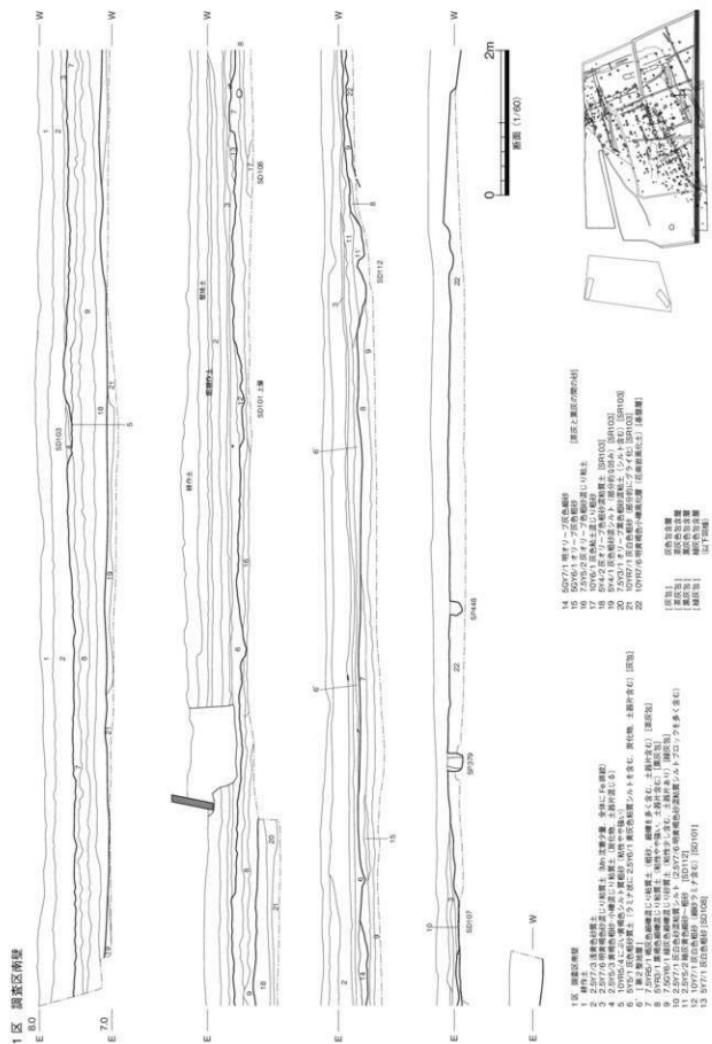
以上のとおり弥生時代前期前半段階の河川由来の砂層（23～26層）の堆積が安定し、後半期には滞水等による有機物層が増加（17～22層）。洪水性の砂層堆積（14～16層）を経て地盤が平坦化したところで堅穴建物SH101（11・12層）が営まれ、その後数層の粗砂混粘質土堆積（7～10層）を経て地盤安定後は削削環境に移行し、削削面として古代・中世の第1造構面が営まれた。

第38図に示した1区②調査区西壁断面は古代建物群の中央部を斜めに横断する断面である。古代造構を覆う灰色包含層（6層）が南に緩やかに下降する傾向が読み取れる。また弥生時代前期河川SR103の掘り方の傾斜（25層上面）に合わせて、そのうち灰色包含層に類似する土層（24層）がSD102以北に分布する。厚さ最大10cmの第2整地層である。丘陵層の窪みを11世紀代の建物構築前に人工的に整地して平坦化した痕跡である。第103～105図に示した土器を含む。1区南壁の6'層に対応する。

第39図に示した調査区東壁断面では第1造構面の標高が北端で7.4m、南端で7.5mと丘陵から離れるにしたがって低く、第2造構面上面（13層上面）は南端で7.2m、中央部で7.0mと北に向かってよ

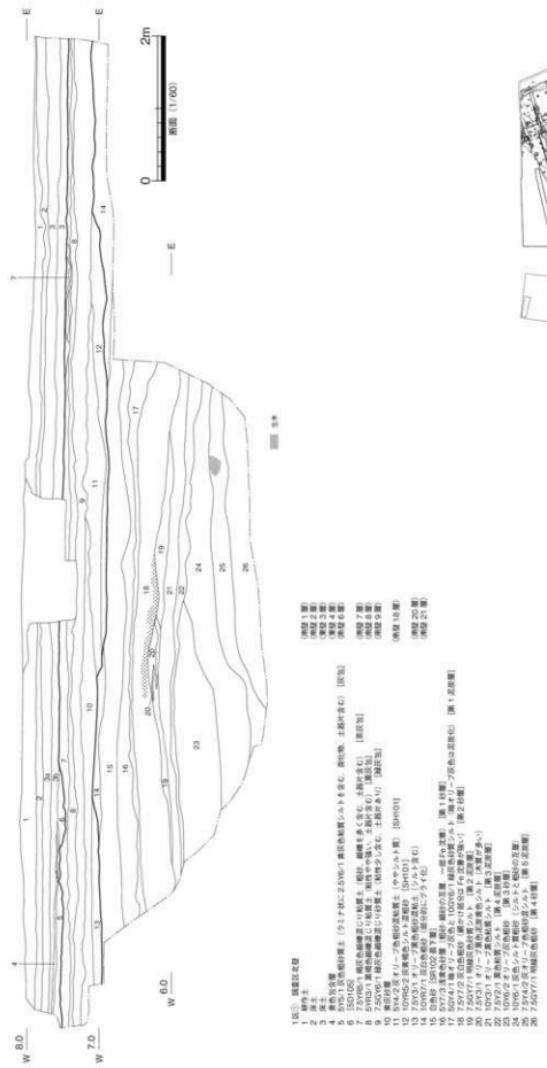


第35図 第1遺構面全体平面図



第36図 1区調査区縦面断面図

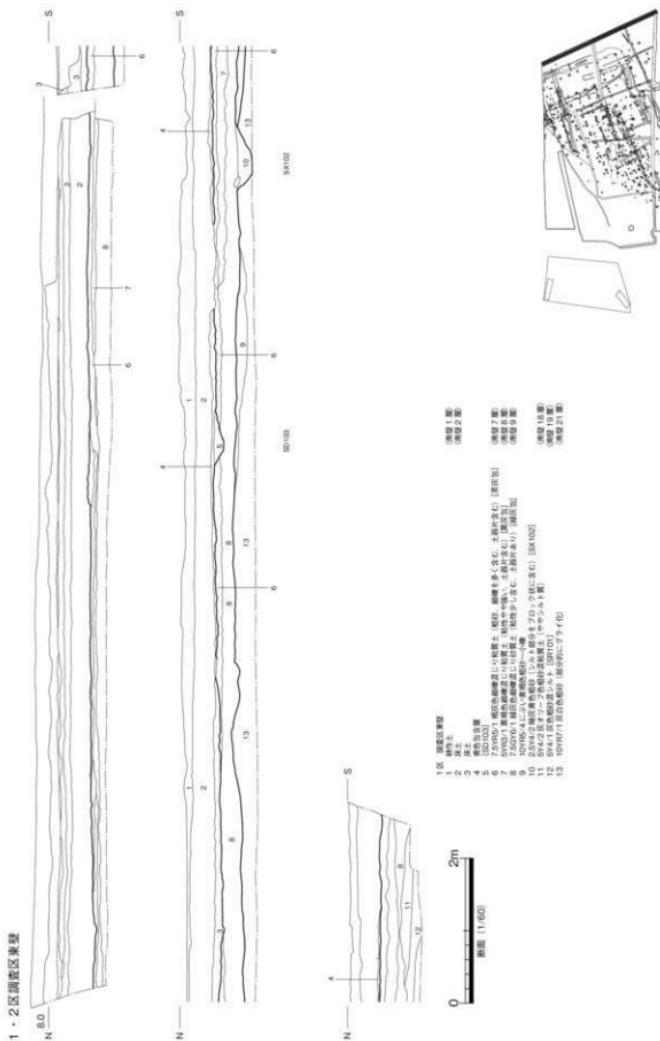
1区(1) 調査区北壁



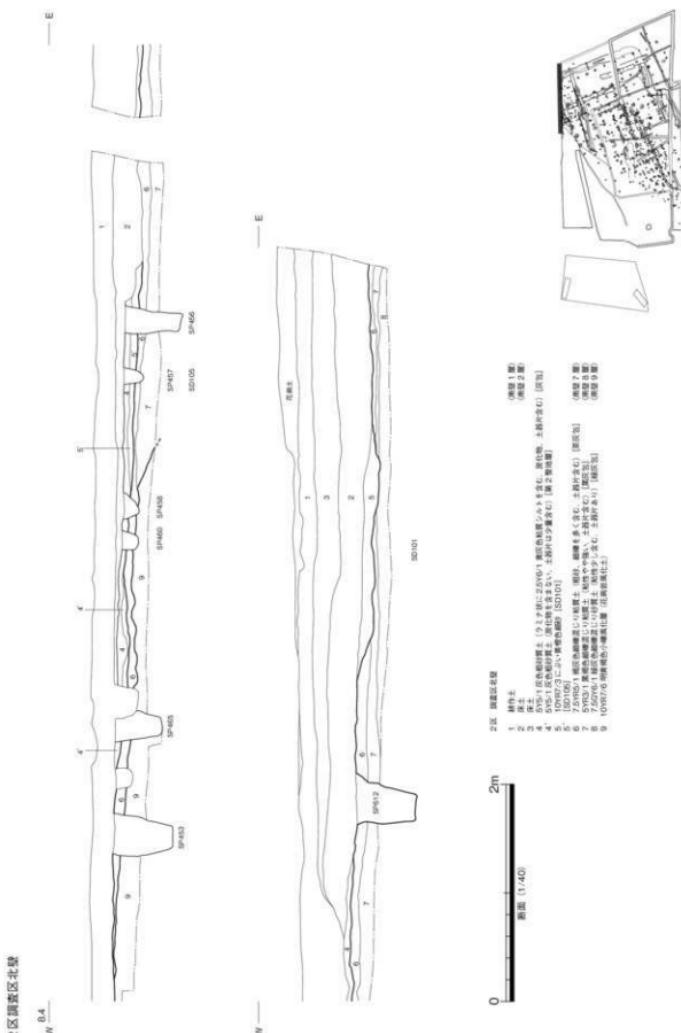
第37図 1区調査区壁面断面図



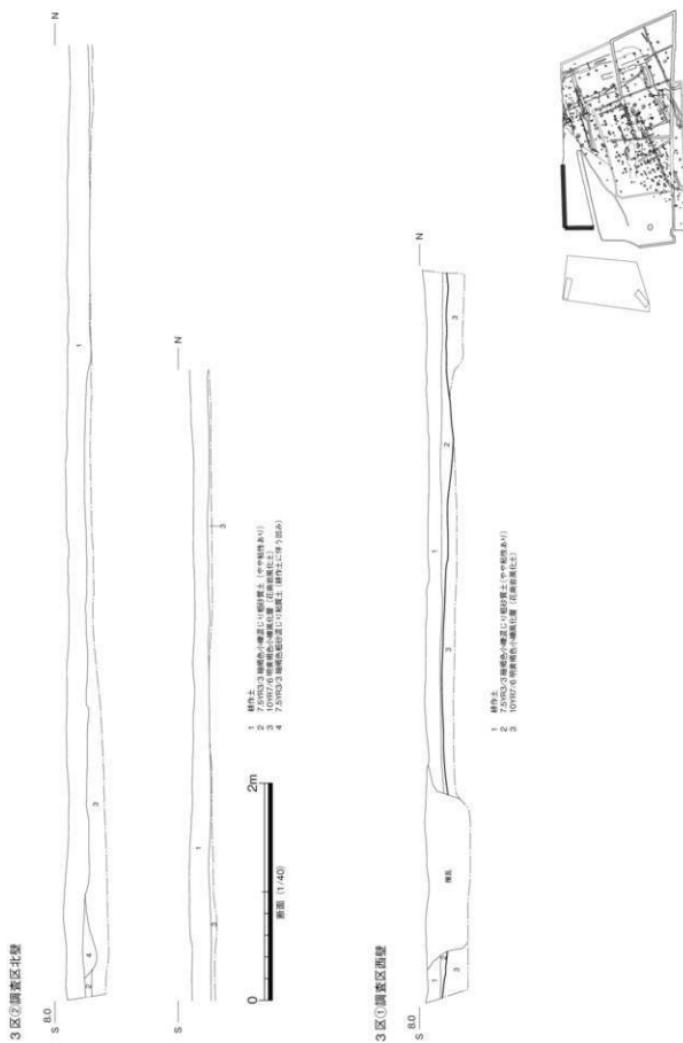
第38図 1区調査区壁面断面図3



第39図 1区調査区縦面断面図

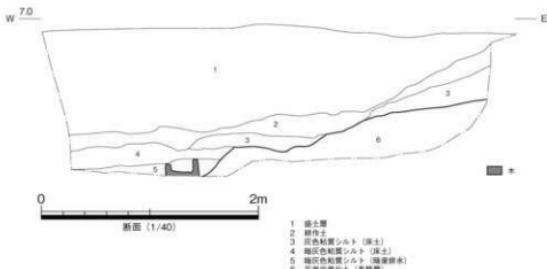


第40図 2区調査区壁面断面図

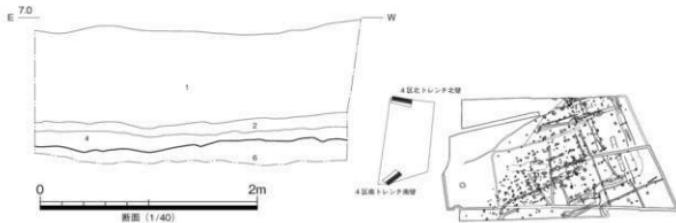


第41図 3区調査区壁面断面図

4区北トレングチ北壁



4区南トレングチ南壁



第42図 4区調査区壁面断面図

り下降する傾向がうかがえる。

第40図に示した調査区北壁断面では灰色包含層(4層)を切る柱穴が多く、これらは13世紀以後の中世に所属する柱穴である。東端の第1遺構面の標高は7.4mと、調査区内では最も低くなっているが、直上に比較的新しい整地土が載ることから第1遺構面自体は削剥面である。

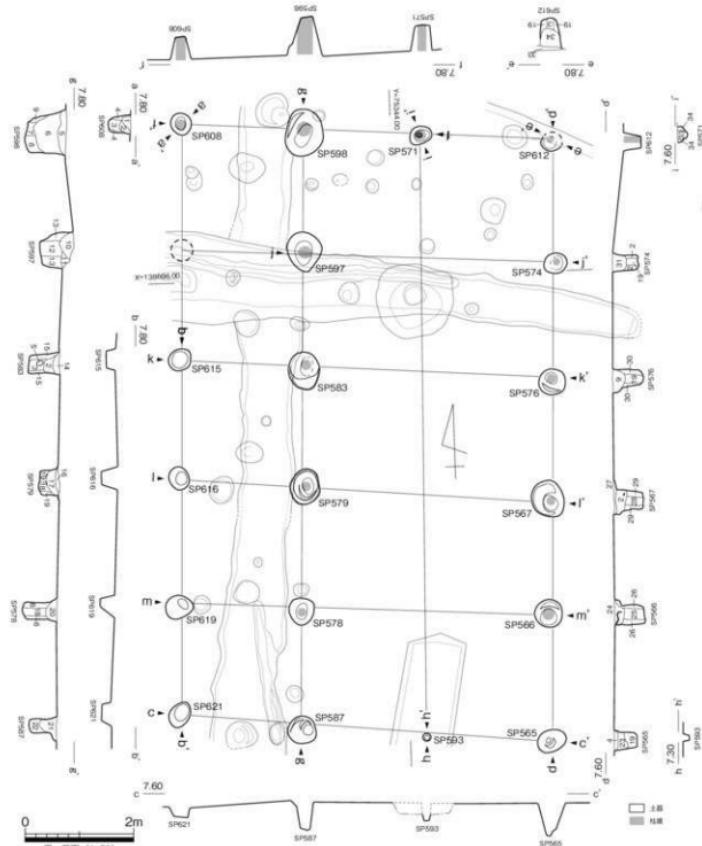
第41図に示した3区断面は大きく削剥された後であることが明らかである。第42図に示した4区の南北トレングチ断面では標高6~6.2mの旧耕作土面及びその下に削平された基盤層を検出した。北トレングチでは近代以後の暗渠樋と思われる木材片が埋没丘陵裾部に埋められていた。

## 第2節 第1遺構面の調査

### (1) 掘立柱建物・構造

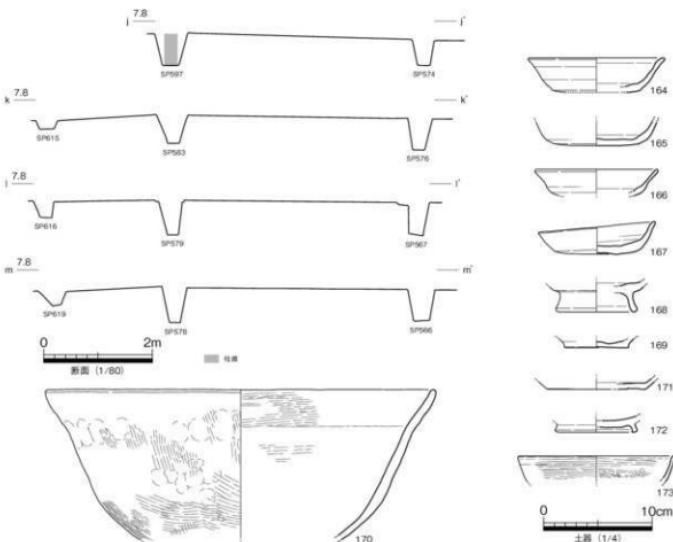
#### SB101

2区③で検出した南北棟の建物である。梁行2間(4.5m)、桁行5間(11.1m)、床面積50m<sup>2</sup>の身舎に西側1間(2.3m)の廂が付属し、廂を含めた総床面積は75m<sup>2</sup>を測る。建物の主軸はN-19°Eで南北方向の正方位に近い。ただし、桁行と梁行の角度が直角ではなく、東側が4.2度南にずれる。身舎に東柱ではなく、側柱のみで構成するが、廂柱と側柱との東西の柱筋はよく揃う。



- 1 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト (土質小片・炭化物含む)
- 2 10YR5-2 灰褐色砂質粘土シルト
- 3 10YR5-2 灰褐色砂質粘土シルト
- 4 10YR5-4 黄褐色砂質粘土シルト (鉄化物・粘土粒子含む)
- 5 10YR5-4 黄褐色砂質粘土シルト (鉄化物・粘土粒子含む)
- 6 10YR4/2 灰褐色砂質粘土シルト (SYRQ/4 黃褐色砂質粘土シルトブロック含む)
- 7 10YR4/2 黄褐色砂質粘土シルト
- 8 10YR4/1 黄褐色砂質粘土シルト
- 9 10YR4/2 黄褐色砂質粘土シルト (鉄化物・粘土粒子少含む)
- 10 2 SYV4/2 黄褐色砂質粘土シルト (粘土・炭化物少含む)
- 11 10YR4/3-2 黄褐色砂質粘土シルト
- 12 10YR4/2 黄褐色砂質粘土シルト (10YH5/4-1 黄褐色砂質粘土シルトブロックを若干含む)
- 13 10YR4/2 黄褐色砂質粘土シルト (10YH5/4-2 黄褐色砂質粘土シルトブロックを若干含む)
- 14 2 SYV4/3 オリーブ色砂質粘土シルト
- 15 10YR4/3-2 黄褐色砂質粘土シルト
- 16 10YR4/2 黄褐色砂質粘土シルト (土粒子多量含む、2.5Y7/2 黄褐色砂質粘土シルト小ブロック多く含む)
- 17 10YR4/2 黄褐色砂質粘土シルト (炭化物・粘土粒子少含む)
- 18 10YR5/2 黄褐色砂質粘土
- 19 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト
- 20 10YH4/3-2 黄褐色砂質粘土シルト (炭化物小粒などを多く含む)
- 21 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト 2.5Y7/2 黄褐色砂質粘土シルト、7.5YR5/2 黄褐色砂質粘土シルト (鉄化物・粘土粒子少含む)
- 22 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト (10YH5/1 黄褐色砂質粘土シルトブロック含む)
- 23 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト (10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルトブロック多く含む)
- 24 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト (炭化物少含む)
- 25 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト (炭化物少含む)
- 26 10YH4/1 紙面合計: 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト
- 27 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト
- 28 2 SYV4/2 黄褐色砂質粘土シルト
- 29 7 SYV4/2 黄褐色砂質粘土シルト
- 30 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト (10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルトブロック多く含む)
- 31 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト (10YH4/4 黄褐色砂質粘土シルトブロック多く含む)
- 32 10YH4/2 黄褐色砂質粘土シルト
- 33 2 SYV4/2 黄褐色砂質粘土シルト
- 34 2 SYV4/2 黄褐色砂質粘土シルト

第43図 挖立柱建物SB101 実測図1



第44図 掘立柱建物SB101 実測図2・出土遺物実測図

柱間は梁行、桁行ともに2.2mである。柱穴は直径0.4~0.9mの円形で、廂柱穴は直径0.4~0.5mを測る。梁行間柱は削平の影響もあるが、元々小形である。深さは0.5m。

柱痕は直径約0.15~0.2mで、埋土上部には柱を抜き取った痕跡がほぼすべての柱穴で認められる。抜き取り穴の埋土は柱穴の位置によって異なり、東側は灰色系砂混粘土質土層、西側はそれに炭・焼土が混在する。特に、建物中央付近にあるSP583や南端のSP587では柱抜き取り後の埋土が柱痕上部まで深く流入する。柱の抜き取り直後に、周辺土を用いて意図的に埋め戻したものと推定できる。なお、廂北端柱穴であるSP608では微細な鐵滓（M173）が出土した。

近接する遺構である溝SD105と建物SB101との関係を整理しておく。当該建物SB101の身舎西側柱穴列は溝SD105と近接する。そして当該建物に接する部分のSD105（北側）の溝幅は広く一定で身舎側柱と完全に並行する。ところがSB101の範囲から南に外れると溝幅が細くなり身舎側柱の南延伸線よりやや東にずれた方向に走行する。これはSD105北側部分の設置目的が当該SB101構築が深くかかることを示している。つまり建物の大きさからみて建築前に整形を行い基壇状の高まりを作つて地盤強化を図った可能性を考えられ、それに用いる土砂を確保するために掘削された溝であった可能性を考えられる。当該建物の南に外れた部分で溝SD105（南側）の溝幅が狭くなっているのは、その部分が東西棟の建物SB105と重複する位置にあることと関係するかもしれない。つまり当該建物SB101基礎地盤構築開始時には先行する建物であるSB105の少なくとも基礎部がまだ残存しており、SB101基礎

地盤構築後に解体されその後に当該建物 SB101 の溝 SD105 の南側が掘り足されたと推定する同じ溝でも場所によって形状が異なる現象が説明できる。一方で SB101 の廂は溝 SD105 を覆うように重複する。これは身舎の基礎地盤と廂部の地盤の間に明確な高さの差があり、身舎周りの排水・防湿機能を重視するために建物構築後も浅い溝としての機能が続いており、建物 SB101 が竣工し SB105 が完全に解体されたのちに溝 SD105（南側）が掘り足されるが、その時には溝 SD105 の大部分は SB101 の廂下に隠れており、形状の異なる溝が作られたものと推定できる。このように SB105 から SB101 への連続的な建て替えとその工程を示唆する材料である。また当該建物の東側には 0.5 ~ 1.0 m 離れて同一方向の溝 SD101 が北に走向し建物の東を区画する。また建物を構成する柱穴は後出する溝 SD113 と重複しておりこれに先行する。そのほか柱穴の重複はないが、掘立柱建物 SB104 や井戸 SE101 と配置上は重複しており、出土遺物から SB104 より新しく SE101 より古い。このように完全に重複する遺構とは時間的な連続性は認められない。

出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器がある。164 ~ 168 は土師器杯である。口径 11cm 前後、器高約 3cm で回転台成形である。体部は斜め上方に立ち上がり、底面は回転ヘラ切り後にナデを施す。形状・法量により形式が分かれる。詳細は後章に譲るが、以下では適宜分類を括弧内に提示することとする。164・165 は深手の杯である。底縁部に違いがあり、165 は棱線を介して体部が立ち上がり（杯 B-1）、165 は丸味を帯びたカーブを介して立ち上がる（杯 B-2）。166・167 は浅手の杯でいずれも底部が丸味を帯びる（杯 C-2）。口径が 11.0cm を越える 166（杯 C-2-a）とそれ以下の 167（杯 C-2-b）がある。168 はヘラ切りした底部から屈曲して斜め上方に直線的に体部が立ち上がり、底部に長めの高台を貼付するもの（杯 E）である。169 は中世に属す土師質器小皿の混在品である。底径 6cm の底部片で底部ヘラ切り後、底縁に段が生じるほど強いナデを施すもので、下川津遺跡 SD III 03（財県埋文 1990 の同遺構 13 ~ 15）のように口径 11cm 前後で器高が 2cm を下回り体部が大きく開く形態と考えられる。同遺跡 SD III 75 や川津元結木遺跡 SD10 で直径 10cm 以下の小皿が一般化するが、その直前の形態であろう。柱穴 SP598 を切る SP466 等の遺物の混在と推定する。170 は土師器土鍋である。浅いタイプの土鍋（土鍋 B）で口縁部と体部の器形変化が緩慢な点が特徴である。171 は須恵器杯である。底径約 9cm で口径は 14cm 前後と推定する。10 世紀後半の混在品である。172 は黒色土器 A 類の椀高台部片である。断面矩形のやや低い高台で高台径は 7cm を越える（椀 B-b）。173 は黒色土器 B 類の椀である。口径 14.5cm で体部下半は丸味を帯びる形態（椀 B）である。外面と内面上端に回転ミガキ、内面下半に縱位の間隔を開けた暗文風のヘラミガキが観察できる。

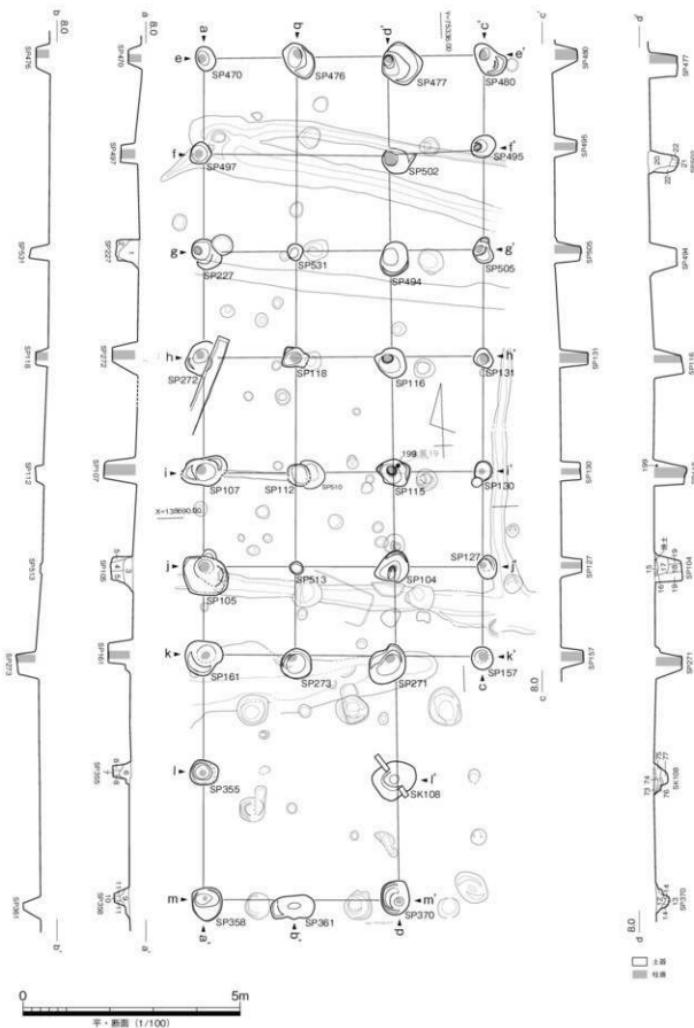
以上の出土遺物は土師器杯において底部が丸い形態が多くを占め、後章に示す西村古代 3 期に属す。11 世紀前半古相の建物である。

## SB102

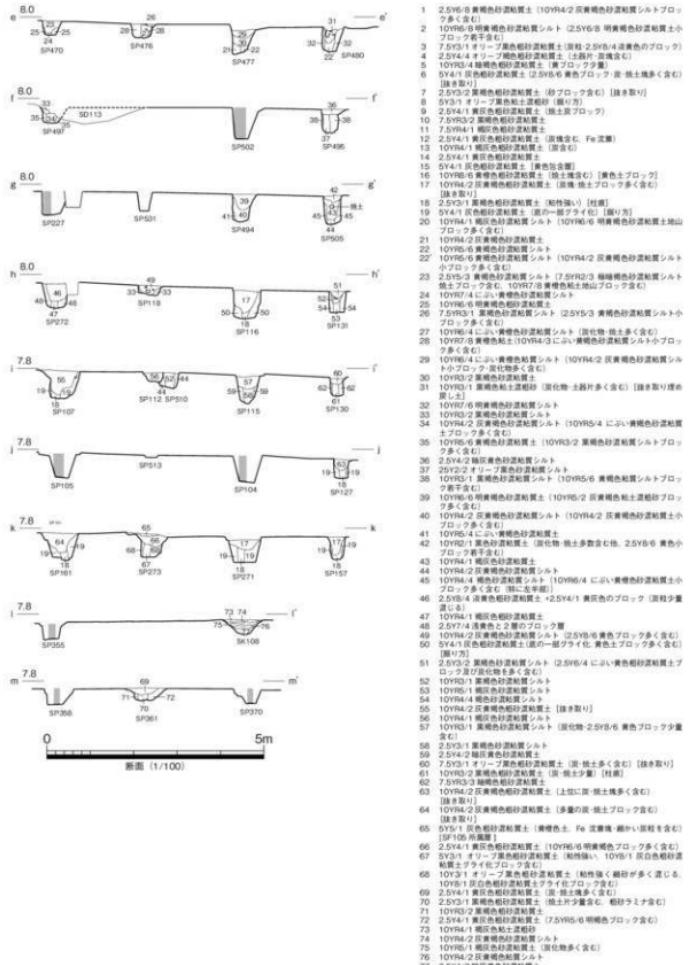
1 区②から 2 区②にかけて検出した南北棟の建物である。梁行 2 間（4.3m）、桁行 6 間（13.8m）、床面積 59m<sup>2</sup> の身舎に東側 1 間（2.2m）の廂が付属し、廂を含めた総床面積 90m<sup>2</sup> の大形の建物である。さらに、南側に接して、東西の身舎側柱筋に合致して柱を配置した 2 間分の付属屋がある。

建物の主軸は N-20°・E で南北方向の正方位に近い。SB101 と異なり、桁行と梁行の角度はほぼ直角である。身舎には北から 2 列目を除き、東柱がある。

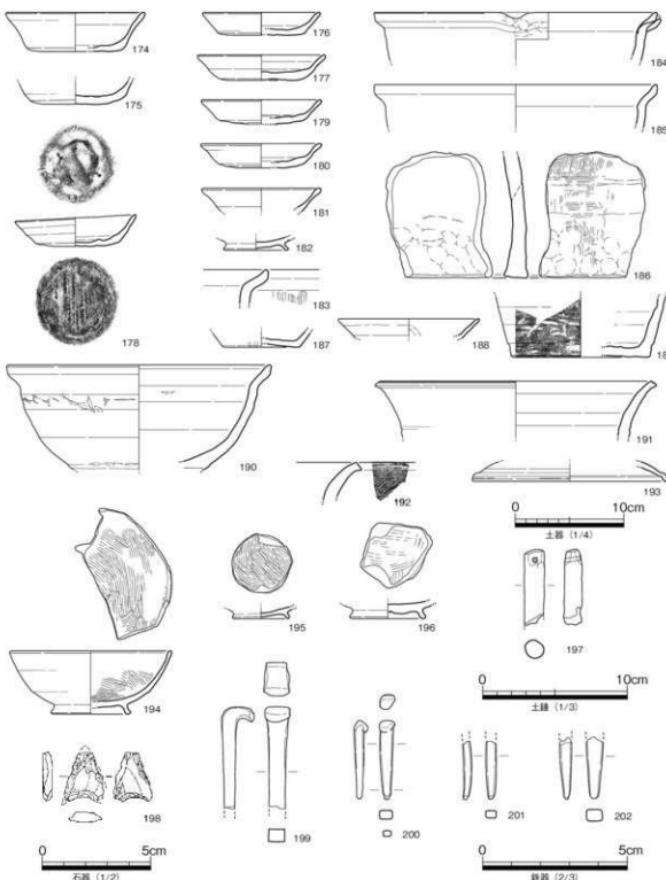
柱間は身舎の梁行、桁行が 2.2 ~ 2.4 m、付属屋が 2.7 ~ 2.9 m である。柱穴は直径 0.4 ~



第45図 挖立柱建物SB102実測図1



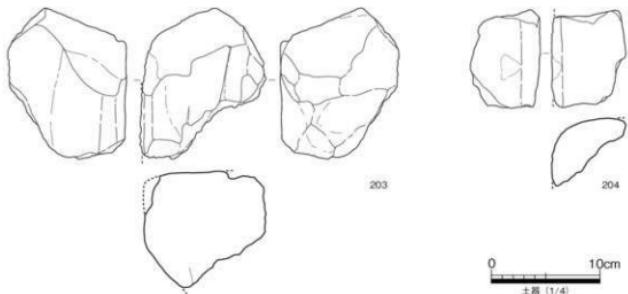
第46図 挖立柱建物 SB102 実測図2



第47図 挖立柱建物SB102出土遺物実測図1

0.9 mで円形を基調とする。廂柱穴は直径0.4～0.5 mを測る。

柱痕は直径約0.2 mで、埋土上部には柱を抜き取った痕跡がほぼすべての柱穴で認められる。抜き取り穴の埋土は柱穴の位置によって異なり、西側は灰色系砂混粘質土層、東側はそれに炭・焼土が混在する。特に、廂柱北端のSP480では抜き取り後の埋土が柱痕上半部まで深く流入する。いずれも基盤土



第48図 挖立柱建物SB102出土遺物実測図2

である黄色粘土層が多量に含まれており、柱の抜き取り直後に、周辺土を用いて意図的に埋め戻したものと推定できる。灰色系砂混粘土層は調査時に「灰色包含層」と称した調査範囲の11世紀以前の遺構をほぼ全面的に覆う遺物包含層で、この一帯の遺構の廃絶段階においてもなお柱の基部は残存し、最後に抜き取ったものといえるので、一帯の大形建物群中では最も新しい建物である。

柱穴は東西に走行する溝SD102やその南の溝SD107と重複する。SD107と重複する3基の柱穴(SP161・271・273)は、後述するように溝SD107が基盤土ブロックを含む整地土で埋め戻された後に掘削されたことが層位的に明確であって、間違はない。一方で溝SD102との重複関係はすこし複雑である。当初の構造検出段階ではSD102を切るように柱穴(SP105)を検出したが、その後の調査により、一見平面的には柱穴の堀形プランがSD102を切っているように見えたのだが、断面を慎重に観察すると、実際には柱穴SP105が埋められた後に溝SD102が掘開されたことが判明した。溝SD102は機能後に炭・焼土等を含んだ土壟で埋没し灰色包含層で覆われたが、その後に柱穴SP105の埋土が有機質材等の腐朽により大きく沈下しSD102の埋土がその上位の灰色包含層を含めて柱穴内に落ち込んだために、溝SD102を検出した段階で「灰色包含層」類似埋土の柱穴がSD102を切っていると誤認していた。つまり当該建物SB102を構成する柱穴SP105は溝SD102構築前に埋没していた。

なお、溝SD102は鍛冶鋳造関係構造SF101・SF102と同時に存在したことが明らかで、当該建物SB102廃絶後一帯で鍛冶鋳造作業が行われた。当該建物柱穴の柱抜き取り穴上半部には鍛冶鋳造作業等で排出された可能性がある焼土や炭化物等が、上記の柱穴SP105等鍛冶鋳造作業場所直近と考えられる柱穴以外の柱穴では比較的多く含まれている。作業場所直近の柱穴は抜き取った後一旦埋め戻し、鍛冶鋳造作業に応じた整地処理が行われたようだが、作業場所から若干でも離れた場所にあった柱は少なくともその基部を維持して、鍛冶鋳造作業終了とあわせてこれらの柱を抜いたために、炭・焼土を抜き取り穴に大量に含むことになったものと推定できる。なおSP273は埋没(埋め戻し)後の窪みを利用して鍛冶炉SF105を構築しており、黄色粘土で丁寧に埋めていることから見ても、柱抜き取りから鍛冶炉生成までの行為の連続性がうかがわれる。なお、SP505で大形の焼土塊が複数出土し、そのうち2点を報告した。出土層位はgライン42・43層で柱抜き取り後の流入土において多くの炭化物とともに出土したものだが、建物に伴う焼土と思われ、炭化物等がすべて鍛冶鋳造作業に関係する訳でもない。

174～181は土師器杯である。口径が11～11.5cmに対して器高が2.3cmと低いものが多い。中世の土師質土器小皿出現直前の段階であり、杯からの器形変化を辿れる資料である。174・175は深手の杯で底縁が丸い形態（杯B-2）。176～181は浅手の杯である。176は底部が平坦で口径が11.5cm以下のもの（杯C-1-b）。177～180は底部が丸く口径が11.0cm以上のもの（杯C-2-a）である。182は土師器椀高台片である。体部下半は丸味をもち、高台は断面矩形で小さく高台径は7cm以下のもの（椀B-c）である。183は土師器土鍋（土鍋A）口縁部片である。184・185は土師器鉢。184は片口部片である。後述の須恵器鉢と法量、形態を共有する。186は土師器移動式竈の裾部片である。187～193は須恵器である。187は底径7cmの杯底部、188は口径約13cmの皿、193は杯蓋片である。これらは9世紀後半～10世紀初の所産で混在品である。189は壺底部片、190は上述の土師器鉢と同形態・法量の須恵器鉢である。191・192は甕口縁部である。191は口縁が長く端部を拡張して端面に沈線が巡る。192は口縁部に平行引きを回転ナデで消した痕跡が残る。

194～196は黒色土器椀である。194がA類、他がB類である。体部下半の形態はいずれも丸味を帯びる。194は高台が高くしっかりしており、高台外径は7cmを越える（椀B-a）。内面見込みは分割によるヘラミガキが施される。195は高台が形・径とも小さく（椀B-c）、196は高台はやや小さいが径は7cmを越える（椀B-b）。

197は棒状土錐、198はサヌカイト製打製石錐、199～202は鉄釘である。201がSP502、ほか3点はSP115で出土た。出土位置記録のある199はSP115のiライン57層（柱抜取後の炭化物等流入土）で出土しており、鍛冶铸造作業に伴う可能性がある。

203・204はいずれもSP505出土の焼土で表面・内面とともに酸化焼成により橙色を呈す。建物を構成する壁土等の一部が被熱し廃棄されたものである。203は表面145度の角度を維持する大形焼土片で建物構築材とするならば軒回りに使われた粘土と推定する。

以上の出土遺物のうち、9・10世紀の混在品は一定量はあるが、土師器杯は底部が丸味を帯びるもののが主体を占めることから後述の西村古代3期に属す遺物群である。11世紀前半古相の建物である。

#### SB104

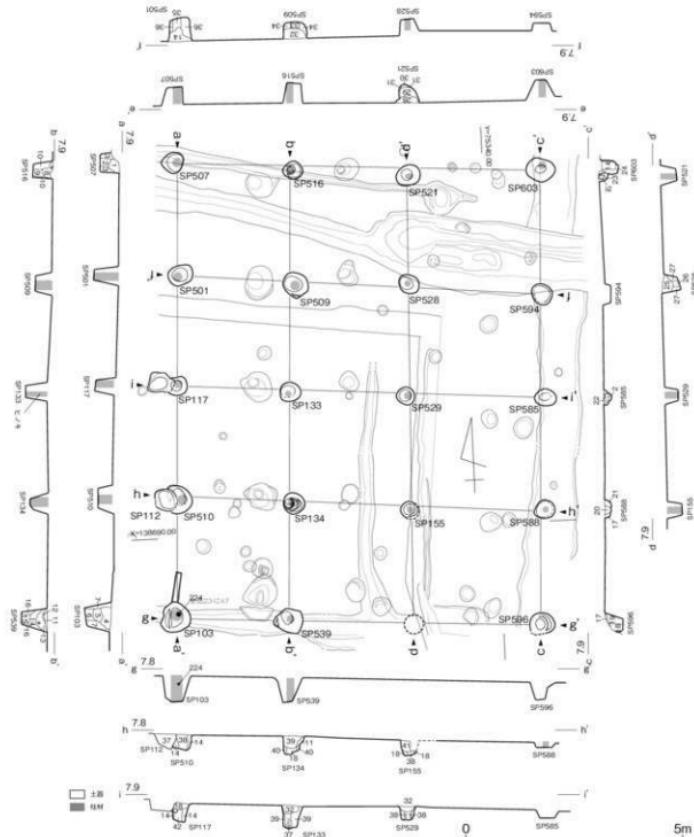
1区②から2区②にかけて検出した南北棟の建物である。梁行3間（8.4m）、桁行4間（10.5m）、床面積89.25m<sup>2</sup>の大形の建物である。

建物の主軸はN-27°-Eで南北方向の正方位に近い。SB101と異なり、桁行と梁行の角度はほぼ直角である。東筋の柱穴は南北端の柱穴を除く3基がいずれも浅く、総柱構造の側柱としては相応しくない。西側の2間分が身舎で、東端柱列を廟と考えるのが妥当である。

梁方向の柱間は西側2間分が2.6～2.8m、廟が3m、桁方向の柱間は2.6mである。柱穴は直径0.4～0.6mでやや小振りである。柱痕は直径約0.15～0.2mで、柱穴埋土上部には柱を抜き取った痕跡がほぼすべての柱穴で認められる。抜き取り穴の埋土には壁土が粉碎された大粒の焼土もしくは黄色粘土層が含まれるが、SB102のような大粒の炭化物は含まれていない。SP539では2層目に粘土化した炭層があるが、これは当該柱穴埋没後にしばらく時間を経て掘開されたSD102の埋土に含まれる炭化物層が、当該柱穴内に有機物の腐朽により柱穴内に落ち込んだものである。

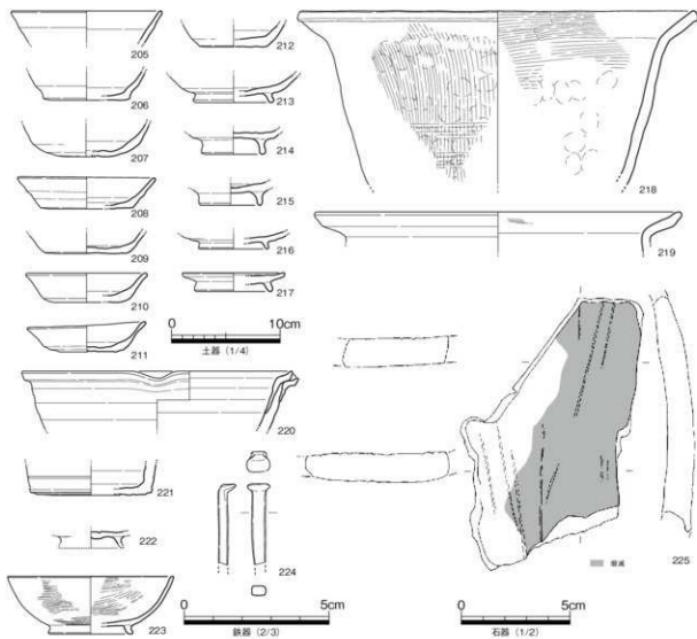
そのほか東端の柱筋（彌筋の可能性が高い）はSD105に埋土上部を削平されている。

南西隅柱のSP103ではaライン断面4層下位で多孔質で一部ガラス化した被熱粘土が出土した。1点



1. 2SY4/2 頂面黄色の漆器類シート【a 10mmの柱の柱地物多々含む】  
2. 10YH4/3(ニ)2 黄褐色の漆器類シート  
3. 10YH4/3(ニ)2 黄褐色の漆器類シート【柱地物多々含む】  
4. 2SY4/1 頂面黄色の漆器類シート【柱地物多々含む】  
5. 5Y4/1(直角相手)漆器類【漆地 黄色のロッタ裏】  
6. 10YH4/1 漆器類【柱地物】  
7. 2SY4/1 漆器類【柱地物】  
8. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート【10YH4/2 漆器類】  
9. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート【10YH4/2 漆器類】  
10. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート【10YH4/2(ニ)2 黄褐色の漆器類シート】  
11. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート【10YH4/2】  
12. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート【10YH4/2】  
13. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート【柱地物 2SY4/2 漆器類】  
14. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート  
15. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート  
16. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート  
17. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート  
18. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート  
19. 2SY4/2(直角相手)漆器類シート  
20. 10YH4/3(ニ)2 黄褐色の漆器類シート  
21. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート  
22. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート
23. 10YH4/3(直角相手)漆器類シート【10YH4/2 黄褐色の漆器類シート】  
24. 2SY4/3(オリーブ色の漆器類シート)  
25. 10YH4/3 黄褐色の漆器類シート【直角相手 案内旗】  
26. 2SY4/1 黄褐色の漆器類シート  
27. 2SY4/1(直角相手)漆器類【SP521】  
28. 10YH4/1(直角相手)漆器類シート【10YH4/2 案内旗】  
29. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート【10YH4/2 案内旗】  
30. 10YH4/5 黄褐色の漆器類シート  
31. 10YH4/6(直角相手)漆器類シート  
32. 10YH4/6(直角相手)漆器類シート【2SY4/2 漆器類】  
33. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート【2SY4/2 漆器類】  
34. 10YH4/3(直角相手)漆器類シート【10YH4/2 黄褐色の漆器類】  
35. 10YH4/3(直角相手)漆器類シート  
36. 10YH4/6 黄褐色の漆器類シート【10YH4/2 黄褐色の漆器類】  
37. 10YH4/1(直角相手)漆器類シート  
38. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート  
39. 2SY4/2(直角相手)漆器類シート【2SY4/4(直角相手)漆器類】  
40. 10YH4/2(直角相手)漆器類シート  
41. 10YH4/3(直角相手)漆器類シート【2SY4/4(直角相手)漆器類】  
42. 10YH4/3(直角相手)漆器類シート【2SY4/6(直角相手)漆器類】

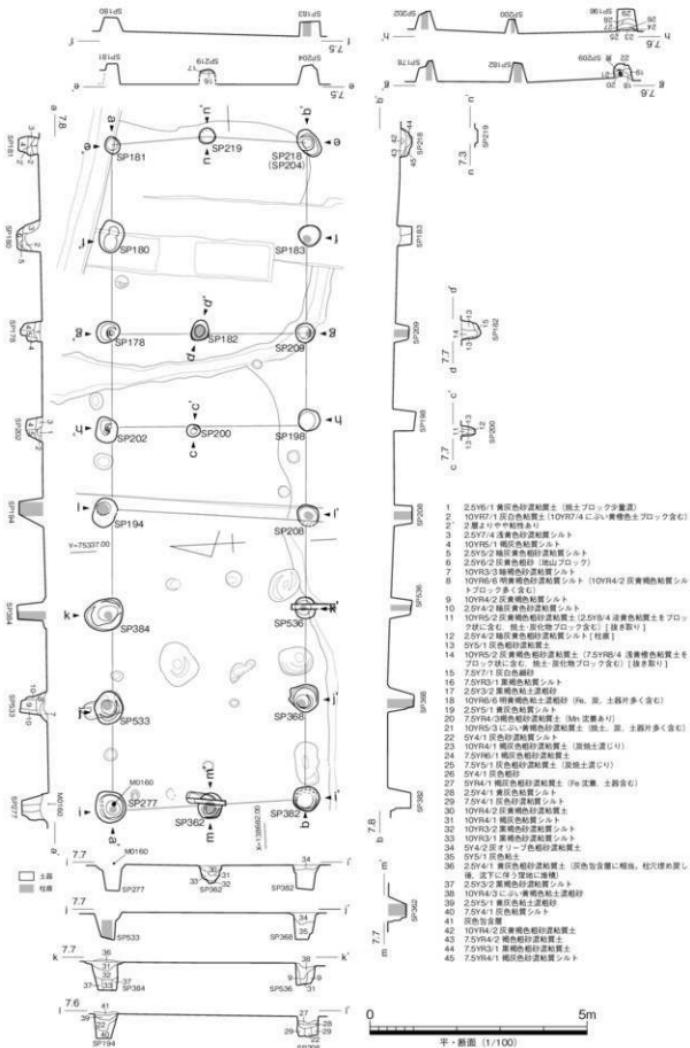
第49図 据立柱建物SB104 実測図



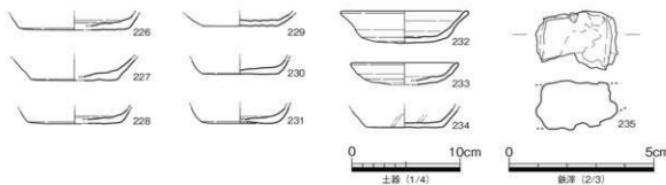
第50図 挖立柱建物SB104出土遺物実測図

のみであることと、後述する鋳造鉄関連構に伴うSD102と重複する箇所での出土であることから、SD102からの混在である。なおSP133・539の柱材片の樹種同定結果はヒノキ・アスナロであった。

205～212は土師器杯である。このうち、205・206は体部が深手で直線的に聞く形状(杯A)で204は円盤高台である。外面に赤色顔料を範轄掛けした痕が残る。207は深手で底部が丸い形態(B-2)。208・209は底部が平坦で底縁に稜線をもつ(杯C-1a)。210・211は底部が丸い形態で口径は11.0cm以上ある(杯C-1a)。212は底径6cmで器壁が厚手の杯で全形は不明。213～216は土師器碗である。213～215は高台付近から体部が屈曲して斜め上方に立ち上がる形状(碗A)で216は底部が丸く体部は緩やかなカーブで立ち上がる形状(碗B)である。217は土師器托である。高台は低く托口径は10cm未満と未発達。218・219は土師器土鍋である。218は体部から口縁部にかけて緩やかに接続する深鍋(土鍋A)である。219は口縁端面に窪みが巡る。220は片口の須恵器鉢。口縁部が屈曲し端部が短く上方に突出する。SB102出土の鉢と比較して成形がシャープである。後出するSB102所属のSP408及びその周辺包含層出土の破片と接合する。221は須恵器壺である。底部は回転ヘラ切りし体部は僅かに膨らみながら上方に立ち上がる。222は黒色土器A類の楕高台部片である。223は両黒の黒色



第51図 挖立柱建物SB105実測図



第52図 挖立柱建物SB105出土遺物実測図

土器B類椀である。高台径は約8cmと大きめで口径は15cmを越える(椀B-a)。高台下端をやや外下方に摘み出す。

224は鉄釘である。頭部から体部にかけて残存する。頭部形状は身より幅広で法量分類では中形に属す。225は湾曲した流紋岩板材を素材とした砥石の中央付近の破片である。表面は使用による磨滅と研磨筋が残る。

以上の遺物は土師器杯Aや底部が平坦な土師器杯C-1、出現期の小形の土師器托、口縁部屈曲がシャープで短い須恵器片口鉢など古い要素が多く西村古代2期に属する土器群といえる。10世紀後半新相に位置づけられる建物である。

#### SB105

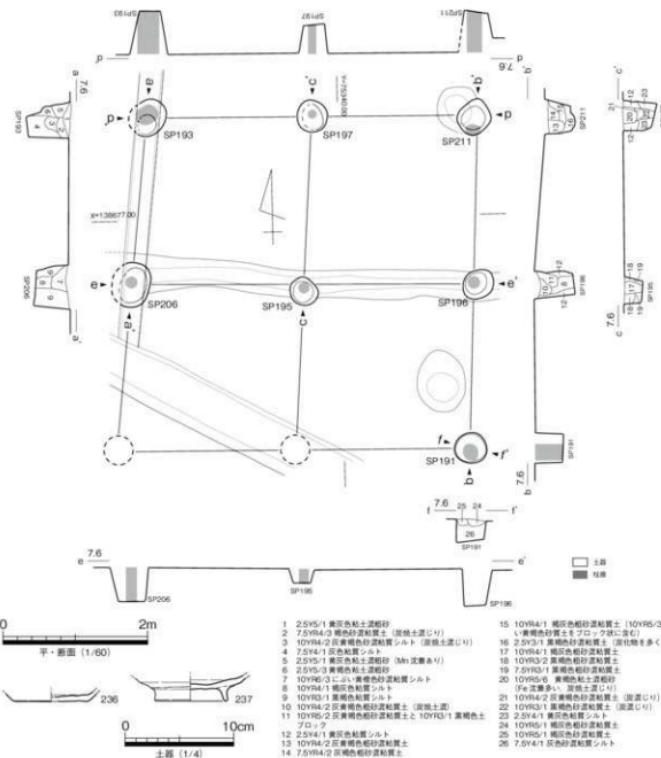
1区①から1区②にかけて検出した東西棟の建物である。梁行2間(4.4m)、桁行7間(15.2m)、床面積67m<sup>2</sup>の長屋建物である。

建物の主軸はN30°Eで東西方向の正方位に近い。SB101と異なり、桁行と梁行の角度はほぼ直角である。東から3・4列目に東柱がある。この東柱と梁間の間柱は他の側柱と比べやや浅く、主に側柱で上部構造を支える小屋組みが想定できる。柱間は梁桁とともに2.2mを測る。柱穴は直径0.4~0.9mで円形を基調とする。柱痕は直径約0.2mで、埋土上部に柱を抜き取った痕跡がほぼすべての柱穴で認められる。建物西側に約2m離れて南北方向の溝SD108が、また南側13m及び東側にSD101下層が区画するように取巻いており、雨落溝と想定する。

切り合い関係は、柱穴埋土は東側ではSD101上層堆積層やSD105に覆われそれに先行する。また西側ではSD107やその周辺を埋没・整地した黄色粘土ブロック混じり土(第一整地層)の埋没後にその上面から掘開しているのでそれらに後出する。

抜き取り穴には小粒の炭・焼土を含む暗灰褐色土が流入し、さらにその上部に「灰色包含層」が流入する柱穴がある。北西側の柱穴では「灰色包含層」流入以前にSD107及びその周囲を埋めて整地した可能性のある黄色粘土ブロック混じり土(第一整地層としたもの)の二次堆積層が上部に流入する。なお、SP53では柱穴埋没後の窪みを利用して鍛冶炉SF106を構築している。また、SP277で出土した楕形漆2点は埋土最上部の黄色整地土上部で出土していることから、当該建物廃絶後上部を整地された後にちょうど当該柱穴位置の窪みに落ち込んで埋没したもので、当該建物埋没後に行われた鍛冶鋳造に伴うものである可能性が高い。

なお、当該柱穴埋没後に内部の有機物腐朽によって埋戻土が沈下し、柱穴上部に窪みが生じて後出の



第 53 図 掘立柱建物 SB106 実測図・出土遺物実測図

SD101 上層や SD105 の埋土が流入、さらにその上部の灰色包含層もその産みに流入するため、調査中には溝との先後関係の把握に一部混乱が生じたが、SD101 上層で出土した土器の出土状況を写真や図面等で点検すると、柱穴の最終的な掘り方ラインの内側まで SD101 上層の土師器等が分布し、土と同時に柱穴内に傾斜することや、重複する柱穴は肩部が削剥され丸い形状を呈すことなどから、SB105 柱穴は SD101 や SD105 に先行して存在した柱穴と判断した。

226～233は土師器杯である。226～229は底径7～9cmのヘラ切りの底部から斜め上方に直線的に体部が立ち上がる形態で深手の杯（杯B-1）。230・231は底縁が丸い深手の杯（杯B-2）だが、底径が小さい点が特徴である。232・233は浅手で底縁が丸い杯（杯C-2）で232は口径が11cmを越え（杯C-2-a）、233はそれ以下（杯C-2-b）である。234は須恵器杯で9世紀後半～10世紀初の混在品か。火

擲が残る。

235は厚さ1.5cmの椀形鍛治溝である。溝は黒褐色(7.5YR3/1)を呈し、破断面には直径1~4mmの大気泡が観察できる。上下面とも残存するが側面は全面破断する。重量15.53g。下面是浅い椀形を呈する。このほかM160(I-249)は縁辺が遺存する椀形鍛治溝である。上面は凹凸面で下面も多数の気泡をもつ凹凸面である。これらの鍛治溝は上記のように当該柱穴埋没後、その上部を黄色土で整地しさらにその後に整地土が僅かに窪んだ部分で出土したもので、周辺の鍛冶铸造関係遺構に伴う遺物である。

以上SB105出土の遺物は土師器杯に深手の杯Bが多いものの、いずれも径が小さい。残りの良い232は底部が強く押し出され丸味が強調された器形である。出土量が少ないものの、遺構の切り合い等も勘案すると西村古代3期の遺物群と判断できる。11世紀前半古相である。

#### SB106

1区①で検出した南北棟の建物である。梁行2間(4.6m)、桁行2間(4.6m)以上の建物で、南側は調査区の南に外れる。SD103と重複するがそれに先行する建物である。

建物の主軸はN-18°-Eで南北方向の正方位に近い。東柱SP195は側柱と比べて浅い。

柱間は梁桁とも23mを測る。柱穴は直径0.4~0.5mで円形を基調とする。柱痕は直径約0.1~0.15mで、黄色土ブロックを含む土で最終埋没する。

建物北側および西側にSD101が取巻くことから、SD101やその西北側の鍛冶铸造関係遺構等と同時併存しうる位置関係である。

236は土師器杯、237は土師器碗である。236は回転ヘラ切りの底部から屈曲して体部が斜め上方に立ち上がる形態、237は高めの高台から体部が内湾しながら立ち上がる形態で、底部よりに稜線が巡る。11世紀中葉の建物であろう。

#### SB107

1区③で検出した東西棟の建物である。梁行2間(3.6m)、桁行3間(5.5m)、床面積20m<sup>2</sup>の掘立柱建物である。建物の主軸はN-24°-Eで東西方向からやや南に傾く。桁行と梁行の角度はほぼ直角である。側柱のみで構成する。

柱間は1.8mを測る。柱穴は直径0.3~0.4mと小形で円形を基調とする。柱痕は直径約0.1~0.15mと細い。柱穴は他のすべての遺構に切られており、付近で最も古い遺構と考えられる。

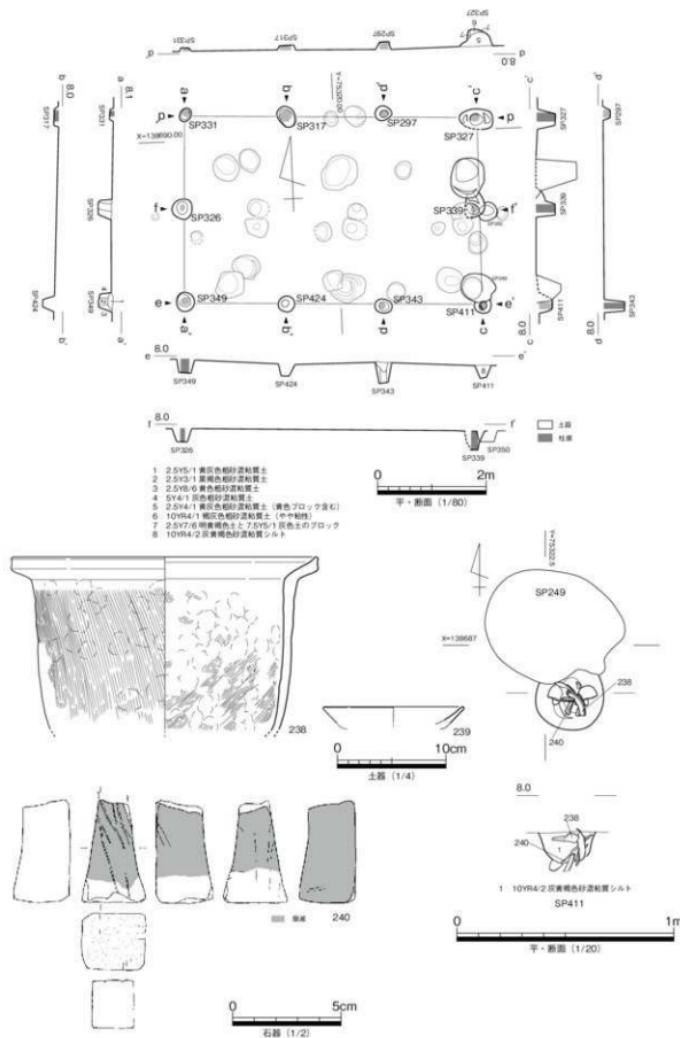
238は土師器土鍋である。やや外傾しながら直線的に立ち上がる体部から口縁が強く屈曲して開き端を上方に抵抗して端面を強いナデにより窪ませる形態で外面は粗い継位のハケ目、内面は不定方向のハケ目をナテ消す。9世紀後葉に位置づけられる高松市多肥北原遺跡SD501に類似資料がある。239は須恵器皿である。240は凝灰岩製の砥石である。重量は45.55gで各面とも顕著な使用痕が認められる。

以上の出土遺物から、9世紀後葉の建物と判断できる。

#### SB108

1区②から1区③にかけて検出した東西棟の建物である。梁行2間(4.7~5.0m)、桁行5間(13.2m)、床面積62m<sup>2</sup>の身舎に南側1間(2.2m)の廊が付属し、廊を含めた総床面積88.5m<sup>2</sup>の大形の建物である。

建物の主軸はN-34°-Eで東西方向の正方位に近いが、桁行と梁行に4.1度の角度差があり、平行四



第54図 掘立柱建物SB107実測図・出土遺物実測図

辺形の平面形を呈す。身舎には東柱があるが、桁方向の柱筋は通らず、個々の梁方向の柱筋が良く揃う。南端 a ラインは麻柱筋で深さは 40cm ほど、その内側の b ラインが深さ 60 ~ 80cm で側柱の特徴を備える。c ラインは北側側柱だが、いずれも浅い。これは建物北側に丘陵裾が迫り、柱穴掘削遭構面が後世に大きく掘り下げられ柱穴が浅くしか残存しないからである。

柱間は 22 ~ 25 m。柱穴は直径 0.4 ~ 0.9 m で円形を基調とする。

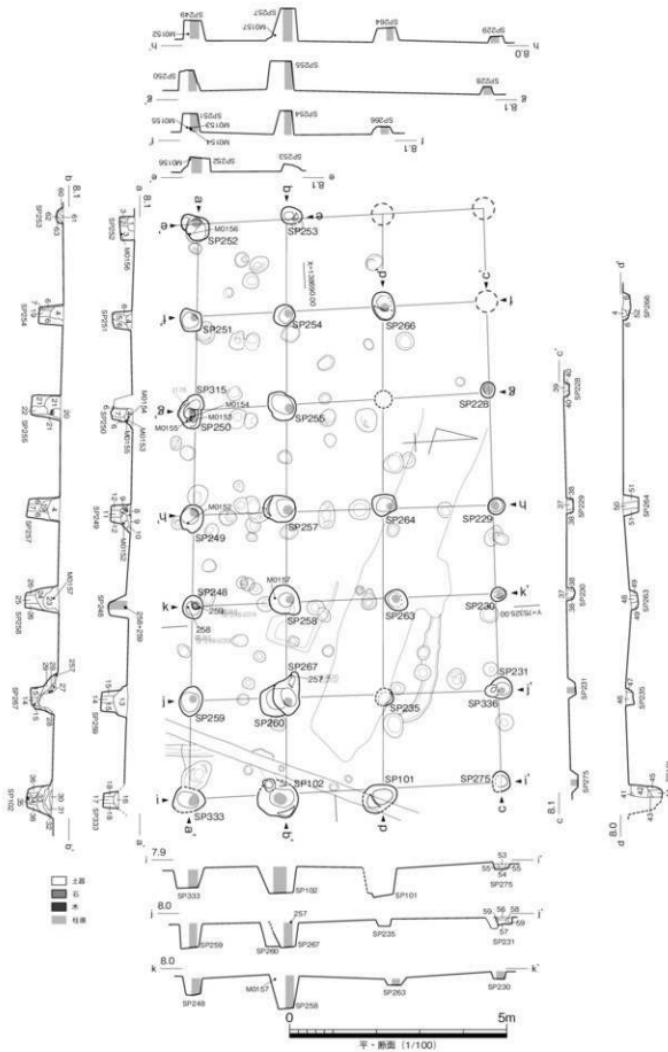
柱痕は直径約 0.2 m で、埋土上部には柱を抜き取った痕跡がほぼすべての柱穴で認められる。抜き取り穴の埋土は建物南側中央付近の柱穴は炭・焼土混じり土が目立つ。また、東端の SP102 は鍛冶鉄造関係遭構である SD102 と重複しており、調査当初は SD102 を切る柱穴と思われたが、掘り下げながら確認すると、SD102 に埋没した大量の炭や焼土が柱穴上部 1/3 まで流入する。このことは、SD102 掘削前に SD108 が存在し、後の柱穴内に機物の腐朽過程で SD102 の埋土をほぼ現状維持する形で崩落に至ったものである。

SP102 を詳細に記録した図が第 56 図である。1 は付近一帯を最終埋没させる灰色包含層である。2 は黄色土と灰色土のブロック層で SD012 崩落後の流入土。3 が崩落した SD102 の埋土で大量の炭焼土が含まれる。4 は明黄褐色土で当該柱穴の廃絶・柱抜き取り直後に埋め戻した土である。本来は 5・6 層が 20cm ほど上部まで存在していたはずだが、有機物等の腐朽により大きく沈下し SD102 埋没土が柱穴内に流入したものである。なお、柱穴底面には腐朽を免れた礎板群が残っていた。SP101 は身舎東側の梁間柱で深い掘り形が残り、底面に同様に腐朽を免れた礎板群が残っていた。

241 ~ 243 は土師器杯である。底部は回転ヘラ切りで切り離す。241 は浅手で体部が斜め上方に直線的に開き（杯 C-1a）、242 は浅手で回転ナデにより底縁が丸く（杯 C-2a）、243 はさらに浅手で口縁が短く開くものの（杯 D）がある。244 は土師器の深手の土鍋（土鍋 A）である。体部と口縁部の境は屈曲が残るが顕著な指圧で不明瞭な部分もある。245 ~ 250 は須恵器である。245 ~ 247 は 9 世紀後葉の杯で火拂が残る。248 は皿、249 は小形壺の口縁部、250 は壺底部である。251・252 は黒色土器 A 類楕で底部が丸く高台が大きいタイプである（楕 B-a）。253・254 は両黒の黒色土器 B 類で、253 は器壁が薄く体部が直線的（楕 A）、254 は底部が丸い形態で高台と体部との間に幅広く薄い突帯を貼付し托を模倣する托上楕である。托部径は 9.4cm。金属器模倣の器種で一般集落より寺院や官衙関連の遺跡で出土することの多い器種とされる。

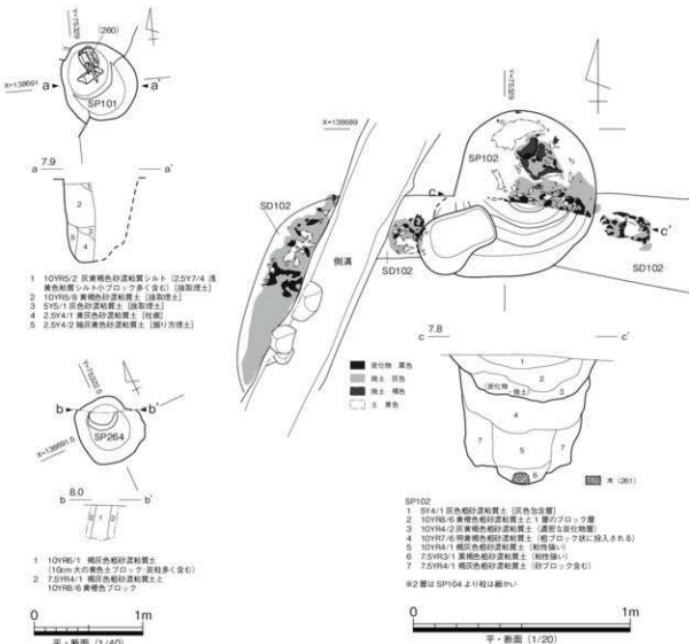
255 は小形の管状土錘、256 は小形の有溝土錘である。257 は長さ 35cm、幅 1.4cm、厚さ 1.2cm（錆剥れ含む数値）で両端が破損する棒状の鉄器である。X 線写真からみると、端から 1.5cm の部分に開をもつ刀子である。刃部付近は欠損するが最大身幅が 1.4cm と小形である。

258・259 は東から 3 列目の南端柱穴 SP248 の柱抜き取り穴で出土した鉄滓である。258 は上下両面が遺存する小形楕形鍛冶滓で滓の厚さは 1.2cm で黒褐色（10YR3/1）を呈す。破断面には直径 1 ~ 3mm 大の気泡が観察できる。滓の下面には厚さ 0.4cm で砂礫混じりの灰白色（5Y7/1）粘土が貼り付く。炉底土表面の剥離と考えられる。滓の上面には明褐色（7.5YR5/6）の砂礫混じり粘土が厚さ 0.3cm で付着する。これは炉壁の崩落によるものと考えられる。滓の上面は平坦で下面は浅い楕形を呈する。259 も上下両面が遺存する小形楕形鍛冶滓である。滓の厚味が最大でも 0.7cm と薄く色調は暗オリーブ褐色（25Y3/3）を呈す。滓の下面は炉底材と推定される灰黄色（2.5Y6/2）砂混り粘土が半分ほど付着し、残りの半分は滓下面が露出し直径 1mm 以下の微細な気泡が多数観察できる。滓の上面は長さ 5 ~ 7mm の木炭粒を噴み込む鉄錆層が約 0.3cm の厚さで盛り上がる粗鬆面である。

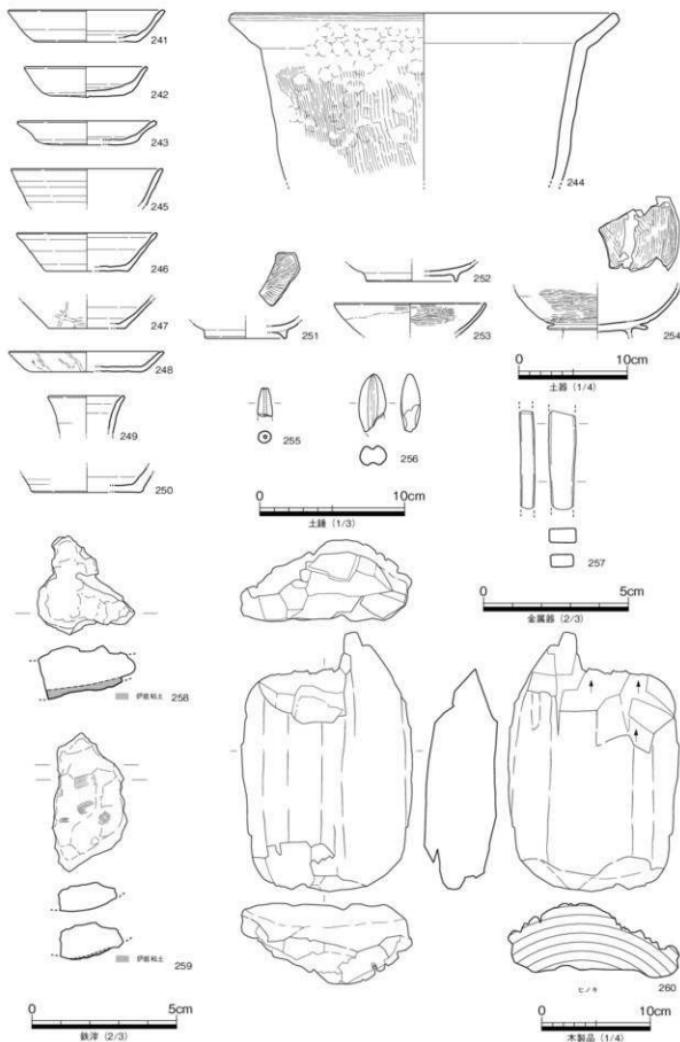


第55図 挖立柱建物SB108実測図1

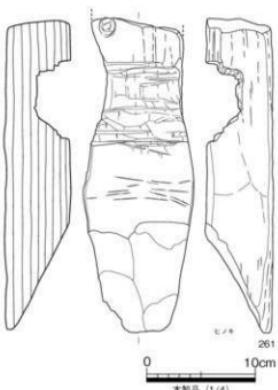
- 1 10YR5/1 反復褐色砂凝結質土 (2.5Y5/3 黄褐色ブロック多く含む) [隙き取り]  
 2 7.5YR5/6 反復褐色砂凝結質土 (Fe 増加) [物理土]  
 3 7.5YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (10YR6/6 黄褐色ブロック) [風化土]  
 4 7.5YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (Fe 増加) [物理土]  
 5 10YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (Fe 増加) [物理土]  
 6 7.5YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (10YR6/6 黄褐色ブロック) [風化土]  
 7 7.5YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (Fe 増加) [物理土]  
 8 10YR6/4 黄褐色砂凝結質土 (褐色粘土質) [風化土]  
 9 10YR6/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [風化土]  
 10 10YR6/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質多く含む] [隙き取り]  
 11 2.5Y5/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 12 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 13 2.5Y3/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 14 2.5Y3/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 15 5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 16 5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 17 10YR4/4 黄褐色砂凝結質シルト [物理土]  
 18 10YR4/4 黄褐色砂凝結質シルト [物理土]  
 19 7.5YR4/1 黄褐色土と 2.5Y6/1 黄褐色のブロック (黄褐色多く含む) [物理土]  
 20 10YR6/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 21 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 22 10YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 23 2.5Y3/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 24 2.5Y3/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 25 5Y2/1 黄褐色シルト [褐色土質] (2.5Y5/2 黄褐色のブロック) [物理土]  
 26 5Y2/2 黄褐色砂凝結質シルト (褐色土質)  
 27 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質シルト (褐色土質)  
 28 10YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [隙き取り]  
 29 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 30 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 31 10YR8/6 黄褐色砂凝結質土と 3D 種のブロック層  
 32 10YR4/6 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [風化物質]  
 33 10YR7/6 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [風化物質]
- 34 10YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [隙き取り]  
 35 7.5YR3/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [物理土]  
 36 7.5YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色ブロック含む) [風化土]  
 37 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質] (褐色土質多く含む)  
 38 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質] (褐色土質多く含む)  
 39 2.5Y5/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 40 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 41 10YR6/2 黄褐色砂凝結質シルト (2.5Y7/4 黄褐色砂凝結質シルトブロック多く含む) [隙き取り]  
 42 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 43 5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 44 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 45 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 46 5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 47 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色ブロック・块土・黄褐色少部分含む) [物理土] (隙き取り)  
 48 10YR6/2 黄褐色砂凝結質シルト (2.5Y7/4 黄褐色砂凝結質シルトブロック多く含む) [隙き取り]  
 49 10YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 50 10YR6/1 黄褐色砂凝結質土 (10YR6/6 黄褐色土・ブロック・黄褐色多く含む)  
 51 10YR6/1 黄褐色砂凝結質土 (10YR6/6 黄褐色土・ブロック・黄褐色多く含む)  
 52 7.5YR4/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 53 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質シルト (2.5Y7/4 黄褐色砂凝結質シルトの小ブロック多く含む)  
 54 2.5Y4/1 黄褐色砂凝結質シルト (褐色土質)  
 55 10YR4/1 黄褐色砂凝結質シルト  
 56 2.5Y5/1 黄褐色砂凝結質土と 2.5Y6/6 黄褐色砂凝結質土ブロック (褐化物多く含む)  
 57 10YR4/2 黄褐色砂凝結質土 (2.5Y7/6 黄褐色の大型ブロック多く含む) [隙き取り]  
 58 2.5Y5/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質)  
 59 2.5Y5/1 黄褐色砂凝結質土 (褐色土質) [褐色土質]  
 60 2.5Y6/6 黄褐色砂凝結質土  
 61 2.5Y6/6 黄褐色砂凝結質土  
 62 2.5Y7/4 黄褐色砂凝結質土  
 63 5Y4/1 黄褐色



第56図 挖立柱建物 SB108 実測図2



第57図 掘立柱建物SB108出土遺物実測図1



第58図 挖立柱建物SB108  
出土遺物実測図2

#### SB109

1区②から1区③にかけて検出した東西棟の建物である。梁行1間(2.7~3.0m)、桁行4間(7.7m)、床面積23m<sup>2</sup>の掘立柱建物で、南の柱筋は1回の建て替えで若干の縮小がある。

建物の主軸はN50°-Eで東西方向の正方位に近い。

柱間は1.9~2.0m。柱穴は直径0.3~0.5mで円形を基調とする。柱痕は直徑約0.15mで、埋土上部に黄色土ブロックを含む抜き取り穴を認める。

262・263は土器器土鍋である。いずれも口縁部が短く外反する形態で内面側は稜線が明瞭だが、外側は緩やかなカーブで体部と口縁部を接続している。高松市多肥北原西遺跡SD501に類似する資料がある。9世紀後半新相に所属するものである。264・265は須恵器杯である。体部が斜上方に僅かに外反しながら開く形態で底部は平底と推定される。上記と同時期であろう。266は砂岩礫の表面を使用した砥石である。使用痕は顕著で、一部一点鎖線内は被熱のため黒化する。

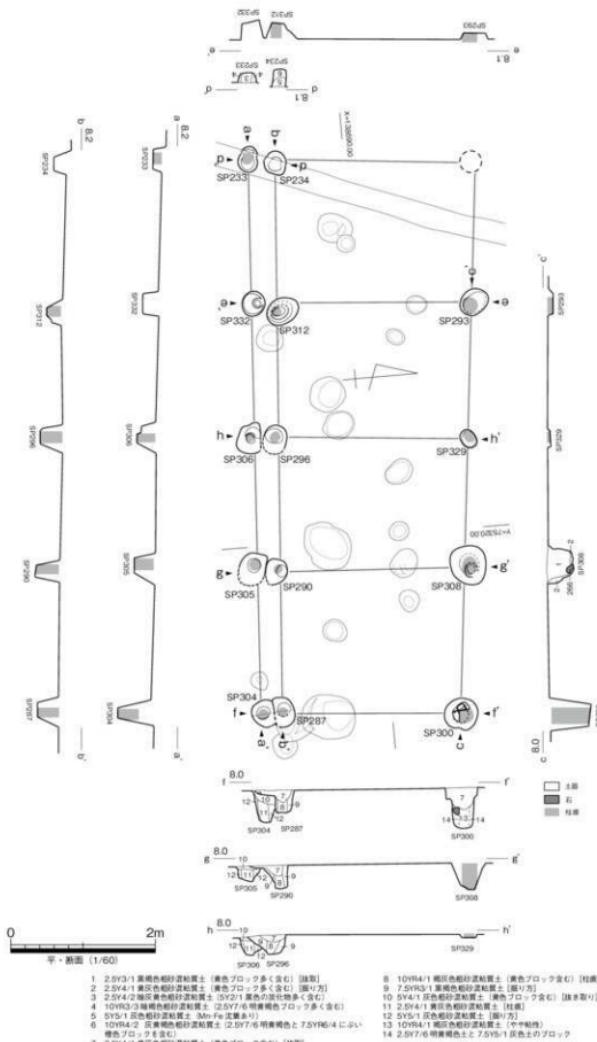
建物SB107の柱穴を切っていることから、それに後続する9世紀後半新相の建物である。

#### SB110

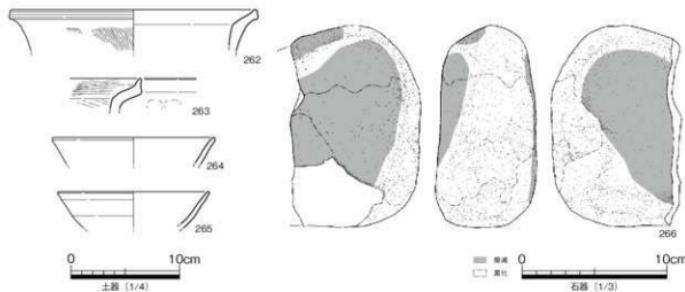
1区③で検出した東西棟の建物である。梁行1間(2.6m)、桁行2間(5.4m)、床面積14m<sup>2</sup>の小規模な掘立柱建物である。建物SB108を構成する柱穴SP263と重複しそれを切っているので、SB108より新しい。建物の主軸はN6.7°-Eで東西方向の正方位からやや東回転。SB111の方位と直角に交わる。

柱間は2.5~2.8m。柱穴は直径0.3~0.5mで円形を基調とする。柱痕は直徑約0.2m。

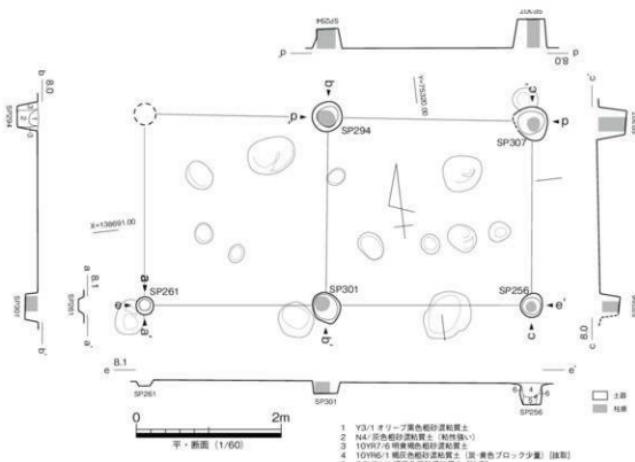
実測可能な出土遺物はなかった。



第59図 据立柱建物SB109実測図



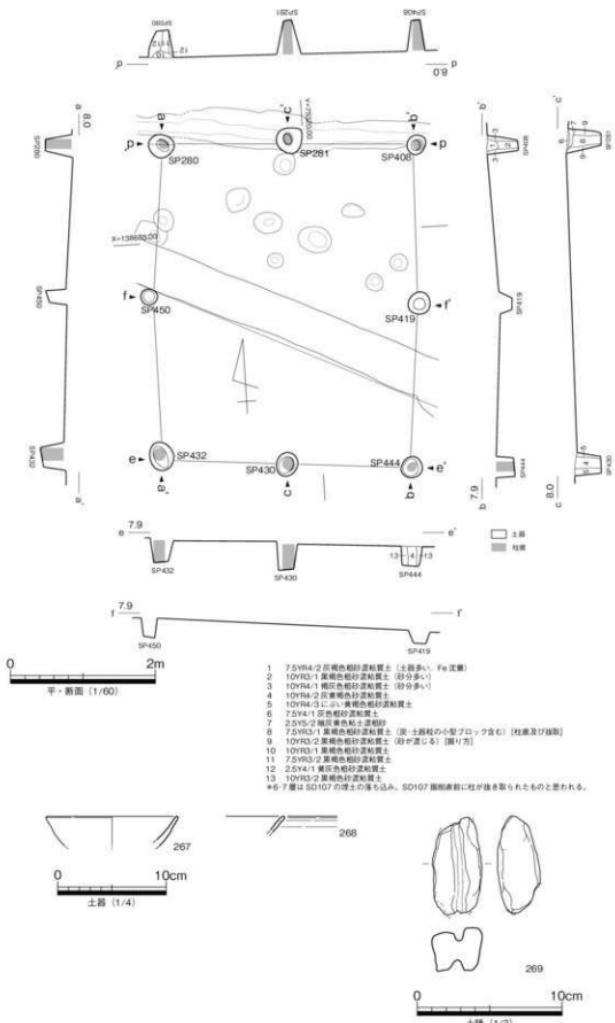
第60図 掘立柱建物SB109出土遺物実測図



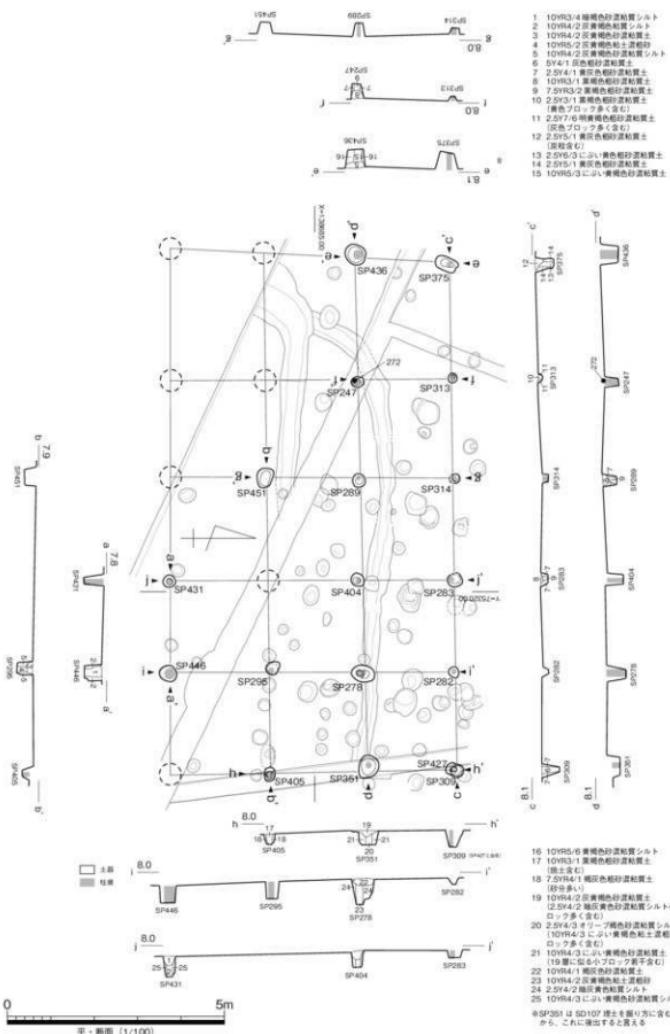
第61図 掘立柱建物SB110実測図

## SB111

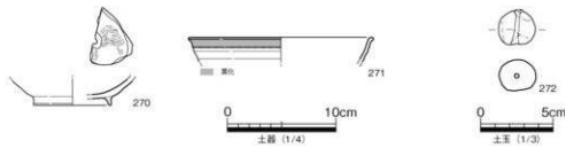
1区③で検出した南北棟の建物である。梁行2間(3.5m)、桁行2間(4.4m)、床面積14m<sup>2</sup>の小規模な掘立柱建物である。建物SB108に付属するSD107を切っているので、SB108より新しい。建物の主軸はN3.5°Eで、SB110及びSB105の方位と直角に交わり、SA101と平行する。互いに同時期の遺構



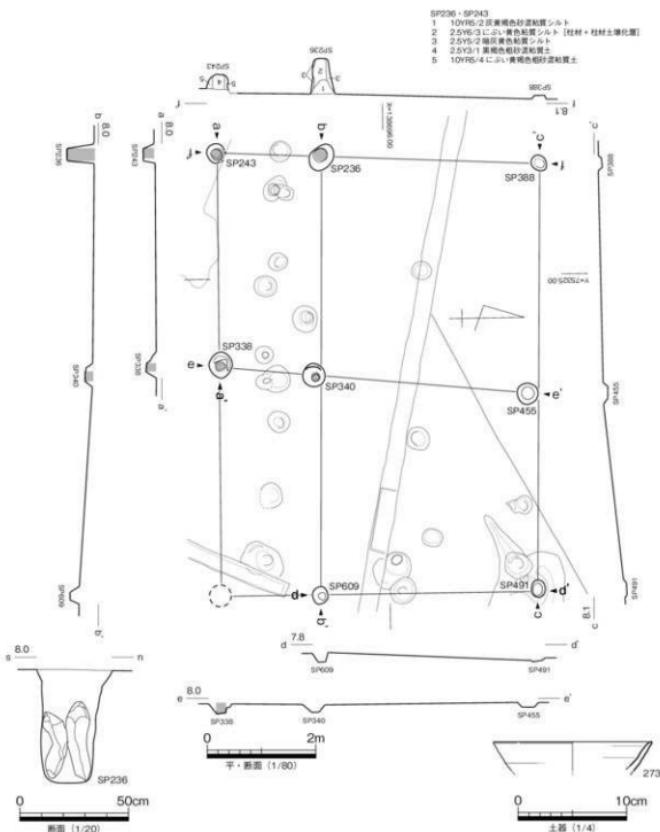
第62図 挖立柱建物SB111実測図・同出土遺物実測図



第63図 挖立柱建物SB112実測図



第64図 挖立柱建物SB112出土遺物実測図



第65図 挖立柱建物SB113実測図・出土遺物実測図

とみて矛盾ない。

柱間は1.7、2.2m。柱穴は直径0.3~0.4mで円形を基調とする。柱痕は直径約0.15~0.2mであった。

267は土師器杯、268は須恵器杯である。269は大形の有溝土錘である。このほかSD107と重複するSP408から多孔質被熱粘土塊(M0165)が出土した。綠青及び鉄錫が付着し、一部がガラス化する。SD107埋土で鉄滓等が出土しており、本来はSD107や周辺に散在した鍛冶鑄造関連遺物が切り合い等により混在したものである。

### SB112

1区③で検出した東西棟の建物である。梁行2間(4.3m)、桁行5間(12.0m)、床面積52m<sup>2</sup>の身舎に南側1間(2.2m)の扉が付属し、廂を含めた総床面積78m<sup>2</sup>の大形の建物である。

建物の主軸はN0°-Eで東西方向の正方位だが、建物西側が扇状にやや開き台形の平面形を呈す。身舎には東柱があるが、桁方向の柱筋は通らず、個々の梁方向の柱筋が良く揃う。

柱間は梁間が2.2m、桁行は2.1~2.7m。柱穴は直径0.4~0.9mで円形を基調とする。

柱穴のうちSP351・SP278はSD107と重複する。調査時には柱穴が新しいとみて調査を進めたが、写真及び図面を点検すると、SP351の断面にSD107埋土とよく似た埋土(19層)があり、本来は柱穴埋没後にSD107が掘開されたことが分かる。

北側側柱筋のcラインは隅柱の2基は深いがその他の浅い。これは建物北側に丘陵裾が迫り、柱穴掘削面が発達後に大きく掘り下げられ。柱穴が浅くしか残存しないからである。その契機はほぼ同規格の掘立柱建物SB108の構築にある。SB108構築に当たっては丘陵裾を一部カットすることで平坦面を広げ、南側のスペースを確保している。それにより、先行する当該建物の柱穴は削平を被った。なお、当該建物近辺には西側鍛冶鑄造関連遺物分布があるが、建物柱穴からは1点も関連遺物が出土していない。したがって、鍛冶鑄造がここで行われる前に建物柱穴は完全埋没していたことが分かる。

270は黒色土器A類の椀である。高台から体部へは屈曲して斜め上方に立ち上がる(楕A)。底径7cmで内面に分割ヘラミガキが観察できる。271は須恵器碗である。口径17cmと大形で外面1cmほどが重ね焼きにより黒化する。外面に顕著な回転ナデによる凹凸が目立ち、口縁端部は短く外反する。須恵器碗としては初現期で、9世紀後半の丸亀市郡家一里屋遺跡I区SD12(財県理1993の184)や9世紀末~10世紀初めの高松市多肥北原西遺跡SD501(県理文2017の314)に続く形態と考えられる。SB107やSB109等9世紀後半の遺構に伴うものが混在したと考えられる。このほか272は土玉である。

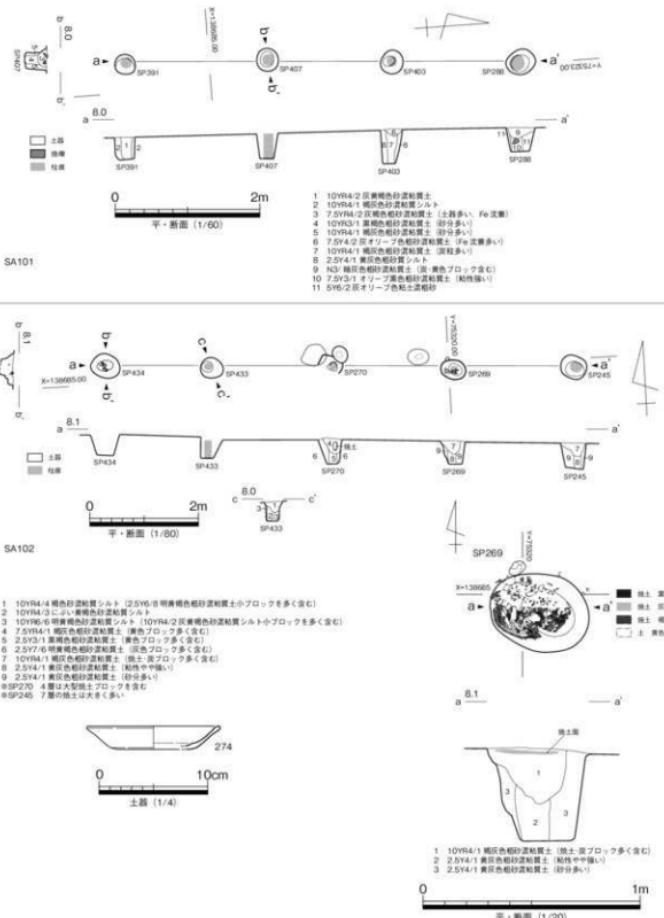
### SB113

1区③・2区で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁行1間(4.0m)、桁行2間(8.0m)、床面積32m<sup>2</sup>の身舎に南側1間の部分廂が付属。廂を含めた総床面積39.6m<sup>2</sup>の建物である。

建物の主軸はN0.9°-Eで東西方向のはば正方位である。桁方向の間柱から廂の東端の柱筋(SP455・340・338)は斜行する。調査区北西丘陵裾の削平のため北西側の柱穴は浅く、南ほど柱穴の底が深い。なお、SB109の東側梁間の柱筋と当該建物西側梁間から廂へ続く柱筋が直線に揃う。

身舎南西の隅柱SP236には柱根が遺存した。相当に腐朽するが、出土状況及び樹種同定分析から直径25~28cmのヒノキの柱と判明した。

273はSP340から出土した土師器杯である。復元口径14.6cmで体部が直線的に斜め上方に開く形態で、



第 66 図 横列 SA101・SA102 実測図・SA102 出土遺物実測図

口縁端部は丸く收め、外面側は直線的、内面側は膨らみをもつ。須恵器模倣の回転台の成形品で川津東山田I遺跡 SD3109 資料に類例があり、10世紀前半。

### SA101

1区③で検出した南北方向の構列である。柱穴4基で構成し、延長5.4mで柱間は18m、主軸はN43°・Eである。柱穴は直径0.3～0.4mで円形を基調とする。建物SB110及びSB111と方向が揃い、それらの東に位置する。

実測可能な出土遺物はなかったが、配置からSB110・111と同時期と判断する。

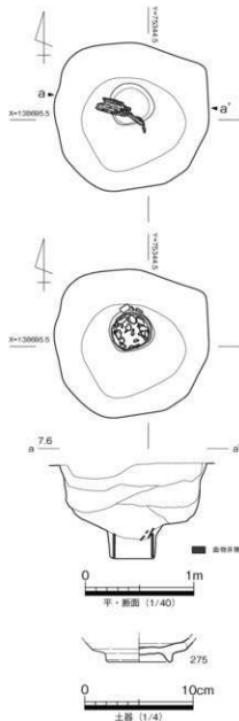
### SA102

1区③で検出した東西方向の構列である。柱穴5基で構成し、延長8.8mで柱間は2.2m、主軸はN32°・Eである。柱穴は直径0.4～0.5mで円形を基調とする。建物SB108と方向が揃い、その2.2m南に位置し、建物の梁行の柱筋と当該構列の柱穴が一致するので、構造的に関連している可能性もある。

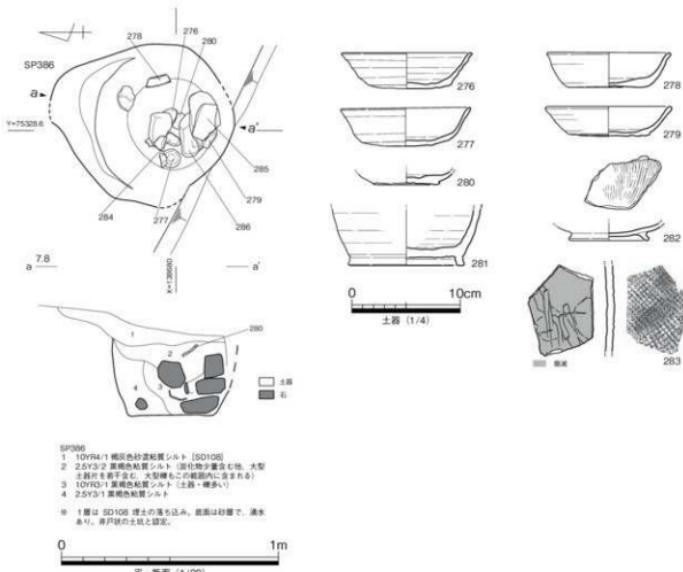
重複関係では、建物SB108に伴う東西溝SD107埋没後に西端の柱穴SP434が掘開されており、その位置がSD107に後続する溝SD112が屈曲する地点に近く、当該構列SA102の方向と溝SD112の走向方向が一致していることから、建物SB108の南側の拡張に伴いSD112が掘開されるに合わせて、建物も南側の一部が改変されるにおいて構築された構列と言える。つまりSB108の新しい段階に伴う構列である。

274は土師器杯である。回転ヘラ切りの底面から体部が斜め上方にやや外反気味に聞く形態で、口径に対して器高が低い皿のような器形である（杯D）。土師器小皿の形成に至る途上の形態である。

構成するいずれの柱穴でも抜取穴に炭・焼土を多く含む屑が流入する。特に東から2つ目の柱穴SP269は図に示したように被熱・酸化具合によって異なる様々な色調の焼土が廃棄されており、鍛冶铸造関連構が近傍に所在した可能性を示す。またSP245では通常より強固に焼き締まった焼土4点が出土した（第75表）。これらは外縁部が酸化して橙色～黄色系の色調を示すのに対して、破断面で観察する断面内部は黒褐色系で還元状態で高温にさらされた痕跡が認められる。SB108の古段階に伴うSD107では鍛冶関連遺物



第67図 井戸 SE101 実測図  
・出土遺物実測図



第68図 土坑（SP386）実測図・出土遺物実測図1

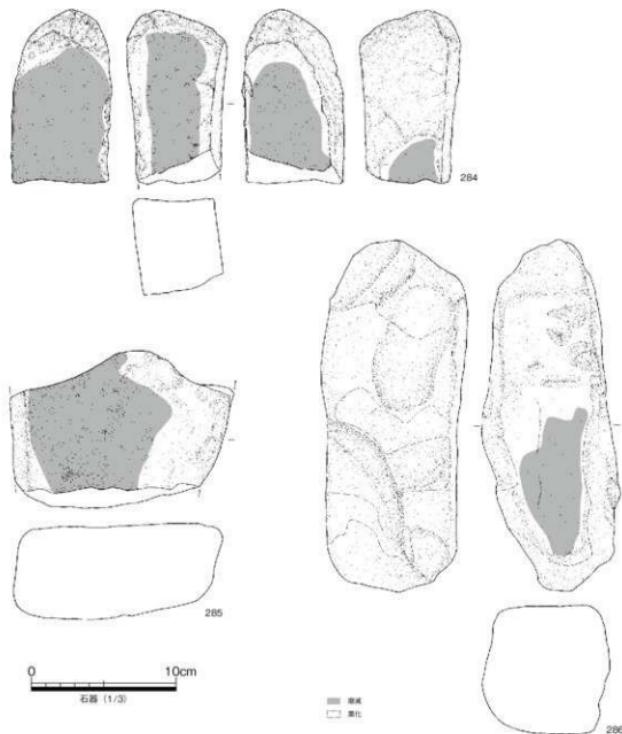
が出土しているが、当該柵列はSD107埋没後に構築されているので明確に時期差がある。SD108新段階においても、調査区内外のどこかで鍛冶鋳造作業を行ったことを示すものであろう。

## (2) 土坑・井戸

### 井戸 SE101

2区で検出した井戸である。中世溝SD113調査後に掘り方を検出しているので、溝に先行する遺構である。直径1.4m、深さ1.0mで最深部に直径35cmの曲物井枠を設置する。埋土は上から1~3層に大別される。1層は粗糹・細繖混じる橙色系粘質土で基盤層の黄橙色土ブロックを多く含む埋め戻し層である。2層は灰色粘質シルト層で井戸機能廃絶後に自然堆積したものであろう。その底面に直径42cmの円形掘り方を設け、曲物井枠を設置する。若干の薄板木片が内部に落ち込む状態で出土しており、残存部より上にも若干の井枠設備があったかもしれないが詳細は不明である。

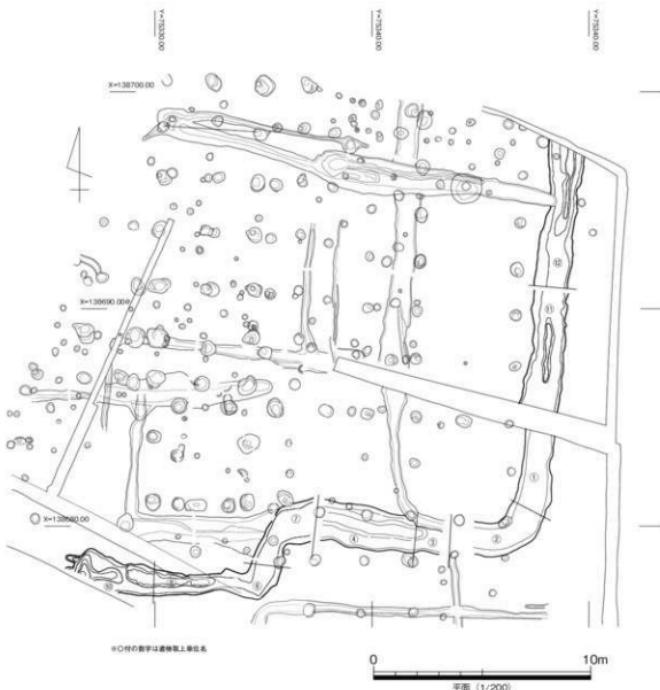
埋土から275の土師器碗の底部片が1点出土した。高台はやや低めだが安定した断面逆三角形高台で、体部が屈曲して立ち上がる形態で12世紀前半（綾川町西村遺跡N5調査柱穴46図175など）に位置づけられる。掘削時期はそれ以前、埋没時期は13世紀前半以前である。



第69図 土坑 (SP386) 出土遺物実測図2

## 土坑 SP386

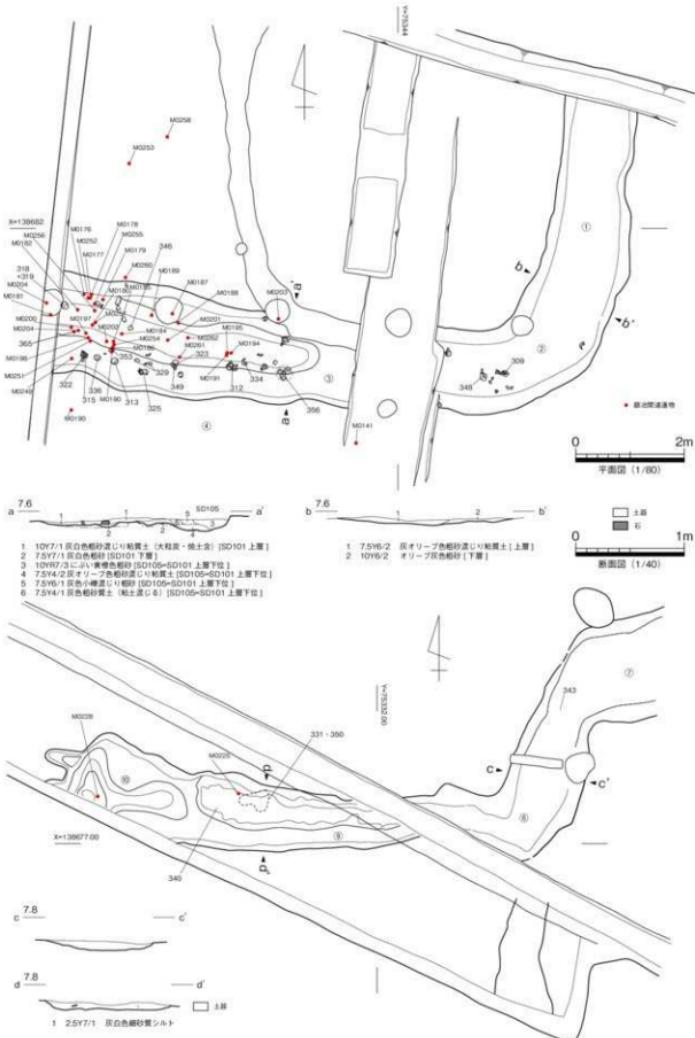
1区②南側で検出した土坑である。当初SD108と切り合う柱穴として調査を始めたが、断面等観察の結果、SD108埋没以前に機能した若干の石積をもつ水溜状遺構と判断した。直径0.65m、深さ0.4m以上の平面正円の土坑で、黒褐色系粘質シルトで埋没する。最上部にはSD108埋土が堆みながら流入することから、当該土坑埋土に有機物が多く含まれ、それが腐朽することにより堆みが生じた可能性がある。底面は砂層に至って湧水がある。掘り方南側で15~25cm大の礫が3段積まれ、その前面で土師器5個体・黒色土器1個体、須恵器壺1個体、須恵器甕転用硯1個体が出土した。規模は小さいが、取水を目的とする土坑であった可能性がある。同様に礫を若干積み上げた水溜遺構は仲多度郡多度津町南鴨遺跡でも12世紀ごろの例がある。



第70図 SD101 概要図

276～280は土師器杯である。5点のうち276～279の4点がほぼ完形、上部に混在した状態の280が底部片である。いずれも底面は回転ヘラ切りで平底となるものが多い。口径は11～12cmで体部は斜め60度ほどでやや直線的に立ち上がり、大きく聞く形態ではない。形式は276が底縁に棱線のある杯B-1、277・278は底部が丸い杯B-2、279は浅手で平底の杯C-1-aである。280は底部がヘラ切り後円盤状に貼り付くもので、杯Aの円盤高台の痕跡かもしれない。281は須恵器壺底部片で9世紀後半の混在品。282の黒色土器は内黒のA類で高台はやや薄手で外に踏ん張る形態。283の須恵器壺転用硯は外面格子叩き、内面当て具ナデ消しの胴部片で、内面の全面に光沢を帯びる使用による研磨痕が残る。周縁の破断により研磨面が分断されることから、硯としての使用後に破断したものである。

284～286は砂岩製の大形の砥石である。いずれも石材の風化は進行していない。284は小口部等に自然面を残すが、方形断面の各面に極めて平滑な砥面を認める。285の砥面は自然面の凹凸を僅かに残すが、広い平滑面をもつ。286は砥面が狭く器面の40%程度が被熱により黒化する。



第71図 SD101 ①～⑩断面図・遺物出土状況図



第72図 SD101 ①②断面図  
・最上層遺物出土状況図

- 86 -

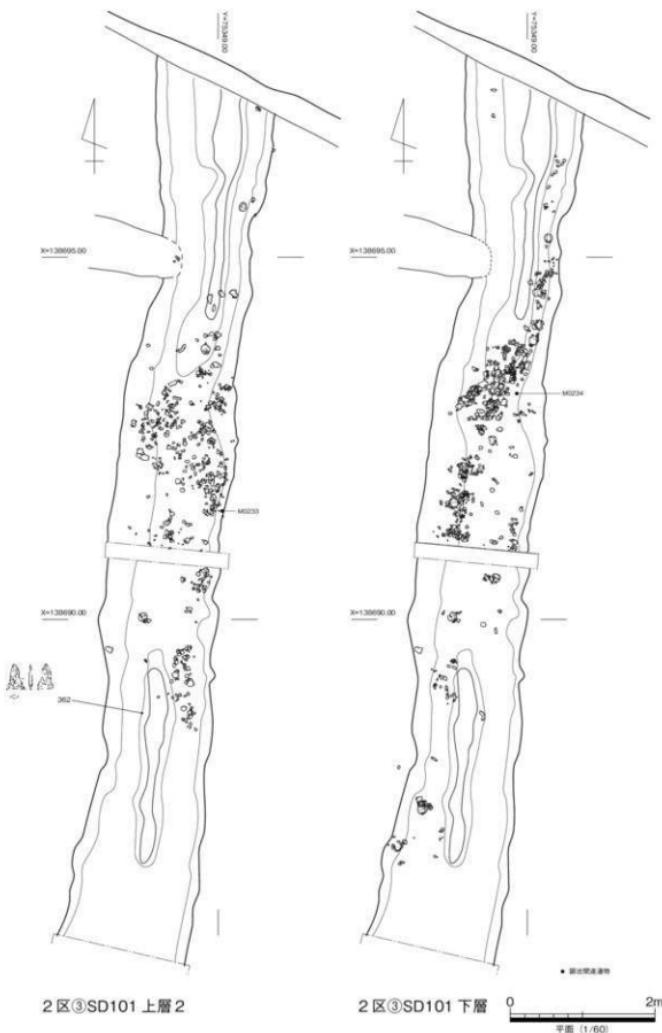
以上遺物の土器は西村古代2期に相当し、10世紀後半新相に埋没した遺構である。

### (3) 溝 溝 SD101

1区①・②及び2区において検出した区画溝である。掘立柱建物SB101やSB102等の柱穴が特に集中する範囲の南と東を区画するように配し、西南側は5mほど南にクランクして西走る。西端には部分的に窪みがあり、それより西には溝は伸びないが、さらに屈曲して南には伸びる可能性はある。⑩区でやや北側に僅かながら突出する平面形状を呈す。北側の溝SD102との関連が考えられる。

延長45m分を調査したが、図面に示したように①から調査順にしたがって区画番号を付し、⑤⑧は欠番として⑪までの10の区画に分けて調査を行った。このうち、③④間の断面でSD105との切り合いを観察しSD105に切られることを確認した。また⑦ではSD108を切って南西に斜行するラインを確認した。ただし、SD108は当該溝SD101の下層に接続する溝である。

溝の深さは南側で0.1m、北側の2区では0.2mと浅い。東側の南北筋(⑪⑫区)では上層、下層に掘り分け、層位別に遺物平面分布を図化した。ただし、土器に個別番号を付して取り上げた訳ではないので個別の出土位置は不明である。上層では全体にわたって出土し、下層では西側に集中する。



第73図 SD101 ⑪⑫下層・上層遺物出土状況図